

博士論文

中国朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育

－出稼ぎの変容と留守児童の問題から見る家族生活－

2014年 3月

宇都宮大学国際学研究科博士後期課程

国際学研究専攻

104601C

金 英 花

目 次

図リスト.....	V
表リスト.....	VI
第1章 問題の所在と研究の枠組み.....	1
第1節 問題の所在と研究目的.....	1
1-1. 朝鮮族の移動と出稼ぎブーム.....	1
1-2. 家族分散と留守児童.....	3
1-3. 研究目的と課題.....	5
第2節 先行研究への検討と本研究の意義.....	6
2-1. 朝鮮族の留守児童の研究.....	6
2-2. 家族の変容に関する研究.....	10
2-3. 本論文の研究意義.....	11
第3節 理論的な研究への検討.....	12
3-1. 「プッシュ」と「プル」論、「多文化主義論」.....	12
3-2. トランスナショナル論.....	13
第4節 研究方法と論文構成.....	15
第2章 韓国における受入政策の変遷.....	17
はじめに.....	17
第1節 韓国における朝鮮族の滞在の状況.....	19
第2節 不法滞在の時期.....	20
2-1. 政策不在の時期(1987年～1991年).....	20
2-2. 産業研修制度と就業管理制度(1991年～2003年).....	20
第3節 合法滞在の道へ(2002年～現在).....	22
3-1. 在外同胞制度の改正と特例雇用許可制.....	22
3-2. 訪問就業制の導入.....	23
3-3. 訪問就業制以降、在外同胞ビザの拡大実施に至るまで.....	24
第4節 韓国政府の定住化防止原則.....	25
4-1. 不法滞在者への救済政策と年齢制限の緩和.....	25
4-2. 受け入れ政策の限界点.....	27
本章のまとめ.....	28

第3章 韓国における出稼ぎの変容－韓国ソウルでの実態調査	31
はじめに.....	31
第1節 調査の概要.....	32
第2節 出稼ぎの形態の変容.....	33
2-1. 長期化する出稼ぎ－資格取得ブームと問題点.....	33
2-2. 長期滞在の原因.....	34
2-2-1. 不法滞在時期の長期滞在.....	35
2-2-2. 訪問就業制以降の長期滞在.....	36
2-2-3. 帰郷できない現実.....	36
2-3. 出稼ぎの恒常化.....	37
2-4. 定住化する滞在.....	38
2-4-1. 若い世代の流入.....	39
2-4-2. なかなか定住が決められない理由.....	41
2-5. 副業としての短期型出稼ぎ.....	43
第3節 出稼ぎの変容.....	43
3-1. 経済活動の変容.....	43
3-1-1. 職業の変化.....	45
3-2. 在韓朝鮮族の階層分化.....	46
3-3. 生活の変容.....	48
第4節 家族生活と子どもの教育.....	49
4-1. 家族生活.....	49
4-2. 子どもの教育について.....	52
4-2-1. 子どもの教育への考え－親へのインタビューから.....	52
4-2-2. 逆帰省ラッシュ.....	54
本章のまとめ.....	54
第4章 子どもの教育への影響－延辺州龍井市での実態調査	59
はじめに.....	59
第1節 人口減少と教育を取り巻く環境の変化.....	60
1-1. 人口減少.....	60
1-2. 教育環境の変化.....	61

1-2-1. 学校数、学生数の減少	61
1-2-2. 教師の流失と教師陣の不安定.....	62
1-2-3. 漢族学校の選択.....	63
第2節 留守児童の問題発生	64
2-1. 留守児童の発生経緯.....	64
2-1-1. 中国の「留守児童」と日本の「留守家庭児童」.....	64
2-1-2. 朝鮮族の「留守児童」	65
第3節 調査の概要.....	66
3-1. 調査地の特徴.....	66
3-2. 調査対象者と調査方法	68
第4節 留守児童の現状	69
4-1. 回答者の属性.....	69
4-2. 出稼ぎ経験、出稼ぎ先、離散年数.....	72
4-3. 親との連絡.....	73
4-4. 同居人との関係.....	76
4-5. 非留守児童への質問	78
4-6. 日常生活と学校生活	79
4-6-1. 家庭の経済水準、小遣い、小遣いの用途等	79
4-6-2. 学校の勉強等について	80
4-7. 周囲との関係.....	80
4-8. 自由回答.....	83
4-8-1. 夢中になっていること	83
4-8-2. 親の出稼ぎへの考え	83
4-8-3. 困っていることと必要な助け.....	85
4-9. 韓国に対する考え	86
第5節 留守児童生徒の特徴と問題点.....	87
5-1. 留守児童の特徴.....	87
5-2. 留守児童の問題点.....	88
5-3. 子ども達が抱えている問題点.....	89
本章のまとめ.....	91

第5章 留守児童の対策と家族の再発見 — 送り出し社会の取り組み	95
はじめに.....	95
第1節 国と地方政府の対策.....	95
1-1. 中国政府の留守児童政策.....	95
1-2. 延辺州による制定法規.....	97
第2節 龍井市の教育改革と教育現場の取り組み.....	97
2-1. 学校教育の現場から.....	98
2-2. ‘学生の家’の設立と運営.....	99
2-3. ‘結対子’活動と‘愛のチーム’設立.....	101
2-4. 良質な教師陣の確保.....	102
第3節 社会・家庭との取り組み.....	103
3-1. 同居人の努力.....	103
3-2. 韓国社会での取り組み.....	104
本章のまとめ—家族の「再発見」.....	104
第6章 終章	107
第1節 本論文のまとめ.....	107
1-1. 朝鮮族にとって韓国という国が持つ意味.....	107
1-2. 政策の変遷.....	108
1-3. 出稼ぎの展開.....	110
1-4. 留守児童の現状.....	111
1-5. 子どもの教育をめぐる戦略.....	112
1-5-1. 親の越境に対応する教育の可能性.....	112
1-5-2. 子どもの移動を念頭においた教育.....	114
1-6. 国を跨る生活.....	114
第2節 出稼ぎがもたらした課題と理論への検証.....	115
2-1. 残された課題と本論文の主張点.....	115
2-2. トランスナショナルな生活と課題.....	116
参考文献	120
初出一覧	124
謝辞	125
付録：中国延辺州龍井市アンケート調査票(日本語、朝鮮語)	

図リスト

【図1-1】 分析の構想図.....	16
【図2-1】 韓国における中国朝鮮族の人口推移.....	19
【図2-2】 在外同胞ビザ者数.....	25
【図4-1】 回答者の年齢.....	70
【図4-2】 家族構成.....	71
【図4-3】 同居人.....	71
【図4-4】 住まい.....	71
【図4-5】 出稼ぎ経験.....	72
【図4-6】 出稼ぎ先.....	72
【図4-7】 離散状態.....	72
【図4-8】 連絡時の主要話題.....	74
【図4-9】 親と会う回数.....	75
【図4-10】 親と会う方法.....	76
【図4-11】 親との同行希望.....	76
【図4-12】 同居人との関係.....	77
【図4-13】 同居人の理解度.....	77
【図4-14】 トラブル発生時の態度.....	77
【図4-15】 同居人とのトラブル有無.....	77
【図4-16】 出稼ぎに行っていない理由.....	78
【図4-17】 出稼ぎに行っていないことへの考え.....	78

表リスト

【表3-1】 回答者の属性.....	32
【表4-1】 龍井市年度別学生数推移統計.....	62
【表4-2】 龍井市朝鮮族教員流失統計数値.....	62
【表4-3】 学年と性別.....	70
【表4-4】 連絡頻度.....	73
【表4-5】 連絡方法.....	74
【表4-6】 主に受ける支援.....	81
【表4-7】 ストレス解消方法.....	82
【表4-8】 悩み解決方法.....	82
【表4-9】 韓国へのイメージ.....	86
【表4-10】 韓国へのイメージが作られた動機(複数回答).....	87
【表5-1】 2007年 ‘学生の家’ 現状.....	99

凡例

- ・ 論理の展開過程において、とりわけ注目を要する文句、命題などは「 」で表した。
- ・ 朝鮮語・中国語の言葉を引用する時は ‘ ’ で表した。

第1章 問題の所在と研究の枠組み

第1節 問題の所在と研究目的

1-1. 朝鮮族の移動と出稼ぎブーム

約100年に及ぶ長い歴史的経過の中で、朝鮮半島から中国へ渡り、中国の国籍を持つに至った朝鮮の人々は、中国少数民族の1つである「朝鮮族」としてコミュニティの中で安定した生活をして来た。彼らの生活は少なくとも1990年代までは比較的安定で、閉鎖された集団の特徴を見せていた。民族教育や文化が定着した地域は彼らの生活にとって居心地がよい地域であったと言える(李鋼哲、2006:13¹)。しかし、おおよそ過去20年の歴史を遡って見ると、極めて大規模な人の移動の事例として、中国朝鮮族の移動があげられる。1990年代に入り朝鮮族社会は大きな変化の波に見舞われ、しかもその波に乗り今までは経験のない全方位的な、大規模の移動をし始めた。この移動はそれまでの中国の定着地から離れて、国内の経済発達地への移動と海外への移動という二つの流れが同時進行的に進んでいるのが特徴である。

1980年代後半から始まり、90年代にその勢いを増した移動は吉林省、遼寧省、黒龍江省などの東北の集居地から北京、上海、青島、深圳などの大都市、沿岸部に進出し、その数が約40～50万と予測される(朴光星、2008:27²)。なお、集居地内部でも農村または郷鎮から東北地方の大都会への移動者も大勢見られる。朝鮮族の移動は国内に止まらず、海外への進出も急速に拡大し、韓国や日本を始め、ロシア、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ、中東にまで進出し、その数も約50万以上と推測される。国内・海外移動を合わせると約半数の朝鮮族は地元から離れ、移動していることになる。

移動の目的は主に親戚訪問、国際結婚、出稼ぎ、留学、観光であるが、圧倒的に

¹ 李鋼哲「グローバル化時代の朝鮮族社会構図—重層的なアプローチ」、中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済研究所、2006年、pp3-19.

² 朴光星『世界時代中国朝鮮族の超国家的に移動と社会変化』、韓国学術情報、2008年.

多いのは出稼ぎ等による移動である。その背景には中国の改革・開放政策(先富論)³という時代的な背景と1992年の韓中両国の国交樹立という政治的な要素が潜在している。内部の要因としては、市場経済化により、地域間、階層間の所得格差の急激な拡大である。元々稲作を生業としていた中国朝鮮族が離農するきっかけとなったのは1980年代に入ってからで、集団農業から請負制農業への移行により、農業だけの収入では生活が困難となったためである(韓景旭、2001:227⁴)。出稼ぎがブームとなり始めた1980年代は国内の大都市へ行くことが主流であり、海外、特に韓国へ出稼ぎに行くようになったのは1990年代のことである。1992年の韓国と中国の国交回復が中国朝鮮族の韓国への道を開いた。そして、この時期から韓国企業の中国進出や、韓国への出稼ぎ者が急増したのである(韓景旭、同上:303)。特に韓国経済が上昇した2000年初頭は中国への景気拡大を背景として中国へ進出した韓国企業も少なくなかった。韓国経済の変化は直接中国朝鮮族の出稼ぎにも影響を及ぼしていると言われるが、それでも韓国への出稼ぎを希望する中国朝鮮族は多い。これに近年の韓国政府の一連の受け入れ政策の規制緩和は韓国での自由な就労が可能となり、出稼ぎブームに更に拍車をかけている。とりわけ、2012年韓国滞在朝鮮族は約470,570人⁵で、中国朝鮮族総人口200万人の約25%を占めている。

中国朝鮮族が韓国に出稼ぎに行く直接的な理由は、より豊かな生活に対する憧れから始まる。中国では得ることのできない高収入を得、中国国内に住む他の人たちよりも良い暮らしをするためである。1ヶ月の収入は日本円にして20万円弱であるが、韓国での生活費を除いた分は中国へ仕送りする。子供の学費、家の購入、そして基本的な生活費を稼ぐことを目的としており、さらに余裕ができた場合、車の免許を取得し、車を購入することを考える者もいる。中国朝鮮族がこのような韓国への出稼ぎを可能にした理由は、朝鮮語が使えることである。移動の目的と結果は多様であっても、その背景には韓国という「民族的な要素」が深く内在されている。人の移動においてもっとも重要な社会経済的な要素も「韓国」という起爆剤となる存在と深く関わっているといえる。韓国への出稼ぎ生活はビザを取得し、出国し、仕

³ 1978年中国は開放改革政策を実施。鄧小平の有名な講話で「白い猫でも黒い猫でも鼠を捕る猫がよい猫だ」「先に豊かになれる者から、まず豊かになろう」という路線である。

⁴ 韓景旭『韓国・朝鮮系中国人—朝鮮族』、中国書店、2001年

⁵ 出所：大韓民国法務部出入国外国人政策本部統計資料、2012年。

事を探し、そして働き始めることにより始まる。しかし、それ以前の生活もまた、出稼ぎに行くための長い待ち時間である。出稼ぎから戻った人の話を聞き、情報収集をする。出稼ぎ経験の豊富な人を囲み、どうすればビザがおりるか、韓国ではどのような仕事につけるか、韓国の生活はどうか、そこに行くことになったら何を持っていくべきか、などという話やアドバイスをうける。出稼ぎに行っている、出稼ぎに行っていない、出稼ぎから帰ってきて、日々の暮らしは出稼ぎと切り離すことはできず、どうすれば韓国へ行けるか、いくら稼ぐことができるかについて毎日語られているのが現状である。研究者が帰省したり、親に安否の連絡をする度に周辺の親族の家族構成が変化していることや知り合いの故郷離れの話ばかりで驚くばかりである。朝鮮族の出稼ぎはもはや選択ではなく、必然的なことになっているのである。

1-2. 家族分散と留守児童

朝鮮族の移動は送り出し社会にも様々な影響を与えている。大量の出稼ぎは朝鮮族地域の経済発展を促進しただけでなく、家庭の経済収入の増加と朝鮮族自身の意識変化や素質水準の向上にもつながった。海外進出により農村の過剰労働力の就職難問題も多少解決することができた。しかしながら、一方では多年間の人口流失による朝鮮族社会の崩壊と農村の過疎化による朝鮮族自治州の存続すら危うくなることを心配する声も出始めた。更には長期滞在による家族間ディアポラスが加速化している。「家族分散」は、その社会において通念上当然同居しているべきと考えられる世帯成員の一部が欠けている状態を指す。そもそも出稼ぎ労働者は家族を本国に残して送金する形をとるので、残された子どもたちの養育や高齢化による老後介護問題が浮上している。朴光星(2002、2008年⁶)によれば出稼ぎ当初は3年ほど稼いで帰国しようとした人が多かったが、韓国経済の弱化によるウォン安で、稼ぎが以前のようにでないことと、韓国での生活の適応と、受入政策の緩和、豊かな生活への憧れ、本国での経済活動場の不足により、長期間滞在と出国の繰り返しが続いている。また一部の人は現地定住志向を強めており、帰国又は帰郷する人はわずかな比率にとどまっていると推測される(李鋼哲、同上:14)。

⁶ 朴光星「韓国の朝鮮族労働者の流入と定着、適応に関する研究」ソウル大学社会学科修士論文、2002年；朴光星、注2前掲論文、2008年。

朝鮮族の韓国への出稼ぎのもう一つの動機として子どもの教育と成功が重要な要素としてあげられる。子どもの教育に対する強調は韓国と朝鮮族が共有した文化的な資産として知られている(グオン・テファン、2005:35⁷)。移動の条件や中国と韓国の制度上の制約、出稼ぎという個人の事情などにより、子どもの教育への重視と移動の関係はより複雑な様相を見せている。親は出稼ぎに行き、子どもは里に残る。朝鮮族の伝統的な家族生活の変化の最も著しい特徴として親子の分離による家族分散であるとも言える。親の不在により残された子どもの教育に否定的な影響を与えているとの指摘が出ているが、親の移動と子どもの教育の関係は朝鮮族の現在の移動のブームにおいて重要な研究課題である。送り出し地域である中国延辺では常に変化する不安定な家族構成の中、自身の置かれている状況への様々な不安を抱えながら、何年も親と離れて生活している留守児童⁸の問題が深刻である。中国の学界では「単親家庭子女=片親家庭」、「無親家庭子女=両親ともいない家庭」、又は「欠損家庭の子女」とも呼ばれたりするが、いずれも両親の離婚、親との離散などにより、成長期の子どもが片親と生活している、あるいは両親がいずれもおらず、祖父母と生活したり、子どもが完全に放置された状態で生活している家庭に対する総称である。親の出稼ぎは家庭構造に大きな影響を与え、それはまた直接残された子どもたちの日常生活と学校生活の環境にも大きな変化を招来している。

2009年の延辺教育部門の統計資料によると延辺朝鮮族自治州の両親不在又は、片親家庭の学生数は約54%である。成長の重要な時期にある留守児童は、成長に必要な親からの関心や保護を受けられず、物事に対する見方、価値観における逸脱や、個性・心理の発展の異常が起きやすいと言われる⁹。また教育に携わる教員たちは、留守児童達は一般的に自立性と独立性が不足しており、感情表現が反抗的で、学習習慣も身につけておらず、他の学生と比べて不良行為に走りやすく、多くの学生が学校で勉強することを嫌い、問題を起こす学生に転落していると指摘している。父母の出稼ぎの目的は子どもの教育費のためである。自分の子どもたちに自分たちと

⁷ グオン・テファン『中国朝鮮族社会の変化—1990年以降を中心に』ソウル大学出版社、2005年。

⁸ 留守児童：本論文では中国語語源通り、小学校から高校までの片親、又は両親不在の家庭の子どもを留守児童と称する。

⁹ 中国民族報電子版「留守児童心理問題需要“三位一体”来解决 —訪延辺大学心理諮問研究中心主任朴婷姫」、4面、銭麗華記者、2007年8月17日版。

は同じ苦勞をさせたくなくて、より良い教育環境を与えるために出稼ぎに出るのである。矛盾なのはこの出稼ぎによって、子どもへの教育費の割合は増えたが、その一面には親との分離で、親の帰国を待ちかねて、日々悩んでいる子ども達の姿が隠されている。ここに出稼ぎのジレンマが存在するのである。

1-3. 研究目的と課題

朝鮮族の出稼ぎは、20年を経て量的にも質的にも大きな転換を迎えており、これまでのように受入国と送出国といった二分法では語れない現状にある。韓国への移動も韓国政府の受入れ政策や移動の性格と人数によって1992年の国交樹立による一次ブームから、2007年の訪問就業制¹⁰による2次ブーム、2008年から現在に至るまでの在外同胞ビザの漸進的な実施による3次ブームにまで来ている。また家族という概念もこれまで以上に複雑で多岐にわたる形態を見せている。一部の地域では海外出稼ぎ者の存在する家族の比率が非常に高く、移動がもたらす家族構造の変化が、残された家族や子どもへの影響が極めて大きくなっているものと推測される。当然その分離の形態も多様であり、従ってそれがもたらす問題への対処や適応の過程もさまざまである。それは一部の地域の問題に留まらず、朝鮮族の家族のあり方に根本的な変容をもたらす可能性も否定できない。

それでは20年経っている現在の彼らの出稼ぎはどのような展開をみせているのか。それは残された家族、特に子どもの教育にどのような影響と結果を及ぼしているのか。家族の生活にはどういう変化が現れているか。朝鮮族自身と社会は家族分散に向けてどのような戦略と対応に迫られているか。これらの質問に対する論議は中国朝鮮族社会の未来の家族像を展望するのに重要な意味を持つ。こうした質問から出発して、本論文では出稼ぎ先での朝鮮族の現状と送り出し社会での残された家族(主に留守児童)の現状を把握し、その実態と与えた影響を明らかにすることで、子どもの教育をめぐる家族や社会の戦略を浮彫りにし、更にそれを通じて朝鮮族が経験している家族の変容と複雑なライフスタイルの一側面を捉える上で糧となる研究成果の獲得を目指す。

¹⁰ 訪問就業制、在外同胞ビザ等の政策については第2章の受入れ政策の部分で説明する。

第2節 先行研究への検討と本研究の意義

現在、朝鮮族社会が経験している様々な変化において、人口移動はもっとも重要な要因である。それ故に近年注目を浴びている朝鮮族をテーマとする研究も移動をめぐる議論が多く行われている。主に中国、韓国、日本を中心に研究者による専門的な研究から、行政や民間の支援団体による報告書、新聞やマスコミによる取材や報道等、各界の立場の違う人々による議論が活発に行われている。更には若手朝鮮族の研究者による朝鮮族自身の立場から、民族の将来を憂える論文や文学集も出始めている。その中で、本論文では朝鮮族の移動に伴う留守児童の問題と直接関わりのある先行研究2本と家族の変容に関する議論の中、もっとも代表的と称される先行研究2本を取り上げて、整理・検討しておきたい。

2-1. 朝鮮族の留守児童の研究

朝鮮族の留守児童の問題は、中国国内では、農民工と呼ばれる農村部から都市部への出稼ぎに伴う問題の一つとして提起されることが多い。これまでに主に朝鮮族に関する研究の中で人口移動による家族の解体と民族コミュニティの崩壊論、危機論という形で多く取り上げられている。朝鮮族の移動による社会変化を扱ったグォン・テファン(2005)と朴光星(2008)の著書¹¹でもそれぞれ「残された子女」と「欠損家庭の子女」という名前で挙げられている。子どもの教育について、その問題点を最も頻繁に取り扱ったのが、2000年半ばからの延辺州の新聞やニュースの記事である。2004年頃からは、残された子ども達の問題の受け皿である中国の地方自治体が問題解決にむけて調査を始めたことをきっかけに「単親・無親家庭子女」という名称や「欠損家庭の子女問題」という名称で調査報告書が出されるようになった。ただこれはあくまでも中国全体の農村地域の留守児童の問題の一環としての政策的なアプローチが多い現実である。学界で単独に「留守児童」という名前で朝鮮族の子どもの教育を取り上げて、研究結果を発表したのは、2012年10月発表された延辺大学朴今海教授の「朝鮮族の国を跨る人口移動と留守児童の教育問題¹²」、日本では 尹秀一の

¹¹ 注6;注7、前掲載論文

¹² 朴今海 『社会転型と民族発展』、延辺大学出版社、2012年、pp122-139

(2010)「中国における海外出稼ぎにともなう留守子女¹³の問題—延辺朝鮮族自治州を中心に—¹⁴」がある。いずれも延辺州を中心に留守児童の問題を述べたものである。

まず、朴今海は、朝鮮族の移動がもたらした正の面と負の面を取り上げながら朝鮮族社会が直面している留守児童の教育問題を論じている。論文では朝鮮族の海外への移動がもはや普遍的な現象となっている現在、その移動の形態は主に親戚訪問、出稼ぎ、国際結婚、留学と進学による移動があり、特徴としては韓国への移動が主流であること、その中で出稼ぎが約80%を占めていること、移動の人口が多くて、移動の時間が長い、帰郷者が少なく、家族との分離が長い等を挙げている。

移動が朝鮮族社会に与えた影響としては、過剰労働力の解消、個人の経済収入ばかりでなく、地域全体の経済的発展につながったこと、朝鮮族自身の教養を高め、中国の対外との交流や開放改革政策に積極的な貢献を行ったこと等があると述べている。他方で、朝鮮族の移動は光と影の面があり、一連のマイナス的な影響の中でももっとも深刻なのが大量の留守児童という‘群体’¹⁵を生じ、社会的な問題となっていると指摘している。

朴今海は延吉市と瀋陽市の小学校2校でサンプル調査を行い、次のような結果を出している。朝鮮族の留守児童は中国の他民族に比べて違う特徴を見せているが、数が多い、大多数が海外への出稼ぎによるもので、親子の分離の時間が長い、母親の出稼ぎが多い、出稼ぎによる離婚家庭の子どもが一定の比率を占めている、保護者の構成が複雑である¹⁶、都市部の留守児童の比率が多い¹⁷、経済的に割りと豊かである等と分析している。なお、留守児童は心身とも様々な問題を抱えているが、家庭教育の不在による人格発展の不均衡や(例えば、内向で、偏屈で、劣等感がある、感情が弱く、衝動的であり、反抗心理が強く、人となじめない、約20%の子どもが誰とも心の中を打ち明けない等)、学業への怠慢、道徳の欠如による犯罪などを挙げている。

¹³ 尹の論文では「留守子女」と称されているため、この部分ではそのまま引用する。

¹⁴ 『創価大学別科紀要』20、2010年、pp15-31。

¹⁵ 群体：中国語、グループという意味

¹⁶ 朴今海の論文では留守児童の保護者は片親、祖父母等、親戚、全託(子どもの全てを託するという意味。4章で説明する)施設などに分けている。

¹⁷ 中国農民工による留守児童問題は大多数が農村地域で発生するが、朝鮮族の場合は都市部の数と農村部の数がほぼ5:5であると記述している。

なお、朝鮮族の留守児童の全体的な比率が高く、50%を超えているが、韓国経済との格差が存在する限り、親の出稼ぎはまだまだ続く傾向を見せていると、朝鮮族の留守児童が‘特殊な群体’から‘主流群体’への転換し、一世代の成長を妨げ、朝鮮族共同体への発展にまで影響を与える可能性があるかと憂慮を示している。

最後に、朴今海は家庭、教育、社会の対応の落とし穴を指摘しながら、父母の子育てへの認識の改善、盲目的な出稼ぎへの自制、教育現場での心理教師の設置、留守児童の収容施設の確保、居場所作り、社会の注目と関心を呼びかける等を通じて、その対策と発展方案を提起している。

次に、尹秀一は、朝鮮族地区の日本語教育の現状を調査しながら、学校教育関係者から幾度も留守子女の話を聞いたことがきっかけで関心を寄せることになり、延辺での2回の調査を経て、延辺地区の留守子女の現状と行政側の対応策について考察している。尹は教育関係者や政府の関係者、保護者、留守子女への聞き取り調査を通じて資料を収集している。留守子女の現状については、子どもの言葉を引用して、祖父母を親代わりに思っていることや、不法滞在による親子長期離散などを描いている。尹が使用しているデータは延辺大学女性研究所が2004年実施した小中学生を対象とした家庭状況調査と延辺州教育局(2006)の資料を参考にしているが、留守子女の数は55.3%となっている。

留守子女の問題としては、学校の先生の話を用いて、「学習意欲の低下、情緒不安定、学校生活における不適合、学業への怠慢、非行、更には犯罪など深刻な問題が指摘されると、親が身近にいないため生活管理が届かない環境にあり、具体的にはインターネット・カフェやゲームセンターなどへの出入りが多くなり、次第に学校への関心が薄くなってゆく」と述べている。なお、親の送金と金銭で愛を埋めようとする盲目的な愛により、子ども達の過剰消費と贅沢による問題が発生していると、放任状態の子どもが多いと指摘している。

延辺州政府や市県単位の行政からの対応策としては、主に‘学生の家’について詳細に説明をしている。‘学生の家’は自治体が設置した留守子女のための寄宿舎で教職員が常勤する家庭教育の補い場とも言える。延辺州に9ヵ所設置され、定員は1,000人であるが、留守子女が5万人を超える現状では十分とは言えない。にもかかわらず、利用者数が定員に満たない点に注目しながら、その原因を子ども達の施設内での上下関係への抵抗、親の送金によって、施設よりはより良い環境で生活させた

いという親の願望が強く、子どもも規則を嫌がる等から敬遠の対象になっていると分析している。尹は、人口移動による流出によって、朝鮮族コミュニティの存続を憂慮しながら、今後の継続した考察を呼びかけている。

留守児童への先行研究を通じて、1990年代以降、大量の出稼ぎによって突出した社会的問題、留守児童をめぐる論争は多く行われていて、一部の研究では詳細な現状への実態把握が出来ていることが分かった。朴今海の研究では初めて移動と留守児童の関係の中で、移動の種類や社会に与えた影響、そして朝鮮族の留守児童を農民工の留守児童と比較しながらその特徴を分類し、提示した。また、尹秀一は行政側の対応を中心に留守児童の施設である‘学生の家’の運営について、詳細に記述している。なかなか情報が得がたい中国国内の事情を考えると、二人の研究は現場での調査に基づいて、貴重なデータを集め、留守児童の存在とその現状を明らかにすることが出来たと評価できる。しかし、様々な制約の中で行った調査である上、限界も見えてくる。まず、表面的な現象に焦点を当てる研究に留まっている。調査地域は異なるものの、留守児童の現状、即ちどれぐらいの数の留守児童がいるかは明らかになっているが、それを理解するための、留守児童の発生背景や発生要因、子ども達をめぐる教育環境の変化など全般的な現象については十分に説明されていない。なお、その現状の明らかにするためのデータの提示も十分ではなく、ただ結果を示す形を取っている。更に、留守児童という現象だけに注目していて、当事者である子ども達はどういう生活を送っているか、対応策においても離れている家族はどのような形で親子分離の危機を乗り越えようとしているか、などについても十分解釈されていない。

次に、海外へのお出稼ぎという国を跨る移動ということもあり、留守児童の問題を送り出し社会だけの問題に捉えていて、残された地域社会での対応策にだけ目を向けているが、そのままでは親が帰国しない限り、問題解決策は展望しにくい。2本とも親と子どもの長期離散が問題になっていると指摘しながらも、その原因を十分に示していない。親子の長期分離で起きる留守児童のもっとも根本的な原因となる出稼ぎ先での親達の長期滞在の背景や原因を探ることは留守児童の現象を説明する上で一番重要な手がかりになると考える。出稼ぎ者の絶えない移動と長期滞在の原因を追究するためには、当然韓国側の受け入れ政策への検討も必要となるものである。

以上のように、留守児童と家族分散に関する議論は問題意識としてたくさん提起

されてはいるが、まだ専門的な研究よりは家族生活に対する新聞やマスコミを通じて、そして行政側の報告書から出ているデータを引用するのが多く、社会的問題として認識していながらも、様々な角度からの十分な研究が蓄積されていないため、適切な対応策や、その行方を展望することが難しいのが現実である。

2-2. 家族の変容に関する研究

朝鮮族の社会変化に関する研究の中で、共通に指摘しているのが人口減少の問題であり、その原因を人口流出と低出産から探している。家族の変容に関する議論の研究の中で代表的なのはグォン・テェファン(2005)編著の『中国朝鮮族社会の変化』と朴光星(2008)著の『世界化時代中国朝鮮族の超国家的な移動と社会変化』がある。

グォンは著書で「家族の分散と解体」という概念を使って、中国黒龍江省の村で行った調査に基づいて、農村家族の分散の現況を調べている。主に世帯数、世帯構成員の居住現況を分析し、年齢別の居住地域分布や夫婦の離婚などによる家族解体について論じている。グォンは調査を通じて、移動者と残された家族間のやむをえない長期間の離散によって、家族間の絆が損なわれ、結果的に夫婦間、親子間の家族分散は家族間の解体につながる傾向があると憂慮を示している。更には家族間の再結合においても事実上、未来が不透明なまま長期間離れて過ごしていることは、きっと朝鮮族自身の家族と婚姻に対する価値観への変化なしでは不可能なものだと指摘している。

一方で、朴光星は2008年の著書で朝鮮族の社会変化の1つのカテゴリーとして家族生活を取り上げている。グォンと同じく朴光星も朝鮮族の家族は安定した伝統的な家族像から移動による家族分散を経験していると指摘している。朴光星は国内に移動している家族と海外に移動している家族を分けて分析している。国内の場合は先に移動している人が、移動先で定着後、残りの家族の連鎖移動によって家族の再結合する形を取っている反面、韓国への移動の場合はまずは夫婦間の韓国での再結合が行われ、続いて子どもの国際結婚による父母との合流によって、韓国での家族の結合を果たすと、そして、それによって韓国での滞在も更に伸びていると分析している。しかし、未成年の子どもとの分離は子育てに対する親の価値観の変化によって、親子の関係も共に暮らすよりは、経済的な論理がより重要視されるようになったと述べている。更に核家族は危機に置かれているが、先に進出した家族・親戚を

通じて移住するため現地で親戚関係が復縁し、相互協力体制が形成され、それによって‘家族共同体’が再結成されるという側面から、親族を重要視する‘家族共同体’は移動によって更に強まっていると強調している。朴光星によると朝鮮族の家族分散は「脱地域化」と「多元化」された家族生活世界であり、それぞれ違う文化の中で生活しながら、違う気質を発展させていく現象であるが、その構成員の間では「脱地域的連結網」が形成されて、助け合ったり、協力し合ったりしながらつながっている。つまり今の朝鮮族において家族という概念は「共に生活する血縁集団」ではなくなって、家族の概念に対する認識の変化が見られると解釈している。

以上のように今まで朝鮮族の家族に対する議論の中で、グオン(2005)の夫婦間の離散、親子分離という視点からの家族解体論、教育危機論と、朴光星(2008)の伝統的な家族生活¹⁸から超国家的家族生活への移行論が挙げられる。解釈は多少違うものの、いずれも「家族は一緒に生活しなければならない」という考えから、「必要に応じて離れて生活することもある」という家族の概念の変化を表しているという面では二人とも意見が一致している。朝鮮族の出稼ぎによる移動は今もなお進行中にある。コリアンドリームから20年経っている今、彼らを取り巻く周辺の環境も背景もまた随分変わっている。今後も朝鮮族の家族の変容とあり方について継続的に考察し、検証していくことは必要である。

2-3. 本論文の研究意義

以上の先行研究の成果と課題を踏まえつつ、本論文で朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育を論じる意義として、以下の点をあげたい。①朝鮮族の子どもの教育について送り出し社会での移動と現状だけでなく、その原因を受け入れ先の出稼ぎ者の長期滞在にまで注目して、留守児童という現象に対して全体的な枠内で、家族機能や分散両方からの相互関連性の中で、生活世界の次元の変化を考察し、明瞭な説明を追究しようと試みたこと、②その背景となる韓国政府の出稼ぎ労働者受け入れ政策をごく近年の動向を含め丁寧に検討したこと、③直接留守児童生徒に対してアンケート調査を実施することで子どもたちの目線からその実態と問題点を把握し、危機を乗り越えようとする家族と社会の戦略を把握しようと試みたことである。更

¹⁸ 血縁関係によって、共に生活する集団

には、これらの変容の過程を通じて、家族のあり方と彼らの国を跨る生活世界の実相を究明できると期待する。

第3節 理論的な研究への検討

朝鮮族の研究において、社会調査の技法を使っての実証的な研究が主流であるため、理論的な根拠を提示した論文はその数が極限られている。それで大きく分類して「移民¹⁹研究」という枠内で考えると主に取り扱う論点は次のいくつかの理論的モデルが挙げられる。一つは、国境を越える人々は、なぜ住んでいる土地を離れ、移動をするのだろうか、という点を問題にするものである。そして、もう一つは、移動先で、どのような存在として生活していくのか、というものである。三つ目は移動が持つ送り出し先と受け入れ先でのネットワークを考慮した理論である。以下では、朝鮮族研究においてそれぞれの論点について、どのような議論がなされているかを展開してみる。

3-1. 「プッシュ」と「プル」論、「多文化主義論」

まず、朝鮮族の移動を説明する上で、労働力の移動という観点から出発して国際労働力の移動の原因を説明する上でプルとプッシュ論が用いられている。このモデルでは、送出国における人口増加、及び高失業率などの「プッシュ要因」と、受け入れ国における労働需要、さらには受入社会の存在などの「プル要因」という2つの要素により移動が発生すると説明される。多くの論文で朝鮮族の移動の要因を延辺の過剰労働力の発生と韓国の経済発展による労働力の需要発生、中国国内の開放改革による社会的背景と韓国との国交正常化、そして民族という概念などを用いて、この理論を説明している。

次に、移動と社会との関係、即ち移住先での居住局面「どのようにして社会との関係を作っていくのか」ということである。現在まで3つのモデル「同化」、「分離」

¹⁹ 移民の概念:定住を想定した移動が「移民」と呼ばれる。従来は、一定期間後に本国に帰国する「出稼ぎ型」あるいは「還流型」の移動と「移民」は区別される。しかし、定住予定だったが本国に帰国する「還流型」移民になるケース、出稼ぎの予定だったのに定住してしまうケース等のように、移民の概念にはグレーゾーンが生じやすい。こうしたことを踏まえて、従来の「移民」に加えて、「還流型」移民や「出稼ぎ型」移民も広義に「移民」あるいは「国際労働力移動」と呼ぶこともある(国際移住機構、東洋経済新聞社)。

「多文化主義」の中で、受入国韓国では外国人との統合において最も提唱しているのが「サラダボウル理論」とも言われる「多文化主義」である。つまり、一つひとつの野菜の個性をそのまま残しながら、いろいろな種類のナマの野菜をサラダの入れ物（ボウル）に盛りつけることで、別の味覚を創造する。そんな社会をイメージした理論で「多文化主義」である。これは、文化的な多様性に力点が置かれていて、カナダやオーストラリアといった国がこれにあたる。しかし、朝鮮族の立場を外国人としてみるべきかという議論の中、韓国の場合どちらかといえば、国際結婚による外国人女性との「多文化家庭」を中心に多文化政策を広げているため、朝鮮族はこの理論の対象者の範疇には含まれず、これを用いた研究もあまり見かけたことがない。

3-2. トランスナショナル論

最近の研究での移民の持つネットワークや能動性といったミクロ構造に着目する傾向が強い。こうした研究は、移民が出身国と、移民先双方の国家に社会的・経済的基盤を持つとする、「トランスナショナリズム」などの考え方に代表される。1990年代から新しい移民現象が浮上した。既存の移民集団は居住国と移住国という単一方向の移住パターンを見せているが、新移民集団は居住国と移住国をつなぐ、国を跨る政治、経済、社会、家族関係を形成し、適応、定着しようとするのが特徴である。こうした移民現象を分析するためにトランスナショナル論が研究に取り入れ始めたのである。

トランスナショナルな生活世界は、政治・経済・社会のグローバリゼーションによって生み出された。グローバリゼーションがトランスナショナルな現実をもたらしたといってもよい。そのため、国境を越える人々の動きは、国境を越えるモノ、カネあるいは情報の動きとともに、グローバリゼーションの一つの側面としてとらえられることが多い。しかし、グローバリゼーションは、企業を始めとする経済機構、国連等の政治機構、スポーツ・宗教等の各種国際団体の世界的な展開によって生じる現象である。社会の中心的で支配的な諸機構・諸組織・諸機関が主体となって生み出した現実である。これに対し、トランスナショナルな現実とは、人々の労働や生活の営みが生み出す現象である。しかも、多くの場合、エリートとは異なる、「普通の」人々がその中心となる。「普通の」人々が仕事を求め、時には政治的迫害を恐れ、国境を越え、新たな生活の場を確保する。なお、母国とは異なる異国の

地で生活を始めたにもかかわらず、母国との絆を断とうとしない場合が増えている。国を越えた家族との経済的、精神的なつながり、同国人との国を越えたコミュニティやネットワーク、国境の枠を乗り越えた情報の共有といった様々なトランスナショナルな絆が増大している。母国と異国の地を定期的に行き来する還流型の出稼ぎを行う人々もいる。こうした現象をトランスナショナルな生活世界の成立と呼ぶ(小内、2007:1²⁰)。

朝鮮族の国際的な移動を説明する上でも、このトランスナショナルな理論を用いて行った研究がある。朴光星(2008²¹)は「超国家的モデル」と名づけて、朝鮮族の国を跨る移動と社会変化について解釈している。彼は論文で地域構造の変化と労働市場の構造変化は移動による朝鮮族社会の構造変化の核心的な内容となると論じながら、こうした構造変化は生活世界の変化とも密接なつながりがあると、更に、生活世界のもっとも重要な部分である生活場所と経済活動の性格の変化により、朝鮮族の社会変化が起こると分析している。そのために、朴光星は「経済活動」、「家族生活」、「共同体生活」、「他集団との相互関係」など、4つの要因をこの生活世界の分析指標として選択して、朝鮮族のトランスナショナルな生活世界、延いては国際的な移動による社会変化を捉え、解釈しようと試みている。朴光星は朝鮮族の生活世界の変化と社会構造の変化はもっとも密接な関係にあり、互いに影響を与えていると論じながら、他の問題意識の議論においても、この家族生活の変化やコミュニティ(社会構造変化)との関係の枠の中で分析するのは、現在の朝鮮族の社会を照らす上でもっとも有効になると展望している。

朴光星の研究の対象者は中国国内と海外の移動集団についての全般的な検討であって、マクロ的な視点から、朝鮮族の移動と変化を捉えて、理論且つ実証的な研究を行っている代表的な論文であると高く評価されている。しかし、朝鮮族の生活を単に物理的な距離を視野に入れて解釈するだけで、彼らのトランスナショナルな生活世界が十分説明されるとはかぎらない。トランスナショナルな生活は単に物理的な距離よりは、もっと様々な問題と可能性が内在されていると考える。従って、その実態を把握するには、ミクロ的な視点からより具体的な事例に即しながら、その

²⁰ 小内 透「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」、北海道大学、『調査と社会理論』研究報告書24、2007年、pp1-11.

²¹ 注6、前掲載論文

トランスナショナルな生活世界の実相を明らかにすることが求められている。

第4節 研究方法と論文構成

本論文では大きくはトランスナショナル論の概念を視野に入れて研究を進める。1990年以降の朝鮮族の移動の特徴は国外への移動であり、従って、国内の移動と社会的な変化もそれと密接につながっている。朝鮮族の国境を越える彼らの生活の営みを通じて、母国や現に生活を営む社会に与える様々な影響、送り出し社会に与える様々な問題の中でも残された子ども達の問題を捉えて研究したいと考える。同じ絆で結ばれた者たちが、遠く離れた地で暮らすことは、多くのリスクを伴わざるをえない。教育の側面の実態と具体的な事例に即しながら、トランスナショナルな家族生活世界の実相を明らかにしたい。トランスナショナル論モデルは朝鮮族の国際的な移動と子どもの教育を説明するうえで適切な理論的な資源になれることを示唆する。

移動と出稼ぎに関する諸条件については、ある程度、国勢調査、人口動態統計、在留外国人統計など客観的なデータを収集し、分析することができた。しかし、移動と子どもの教育、特に留守児童に関する公式データや社会調査の資料は収集の限界を感じた。子どもの教育をめぐり、そこに作用している各要素、その中でも朝鮮族のトランスナショナルな生活を究明する研究は独自の資料収集に依存するしかない状況であった。中国の体制上、包括的な社会調査は大変難しい現実であるが、そういう中でも故郷という人脈を利用して、政府や自治体などの実施した調査のデータを少しずつ集めることができた。把握を目指す最も中心的な対象、すなわち当事者である出稼ぎ者、留守児童、及び支援者、教育関係者、保護者の家族観、子ども観、教育観、取ろうとする行為と戦略などを明瞭につかむため、現地訪問観察とアンケートとインタビューを実施し、これを本研究の研究方法の中心に置くことにした。既存の研究資料が大変制限されている中、探索的な研究にならざるをえなく、中国と韓国での現地調査は各2回ずつ4回に分けて行った。また受入制度や留守児童への対応策の不足な部分については、韓国政策関係者にメールや電話、又は電子政府のパブリックコメントを通じての問い合わせなどを通じて、継続的に収集を行った。

論文の構成は以下の通りである。第1章では、研究の目的とその意義について、先

行研究を見ていく中で提起した。第2章では、先行研究と韓国調査で得た資料に基づいて、1990年代から今日に至るまでの韓国政府の受入政策の変遷を概観する。第3章では、出稼ぎ先での親の就労状況と生活に着目して、受入政策に伴う出稼ぎの変容を捉える。第4章では、出稼ぎによる子どもの教育への影響について、中国延辺州龍井市のアンケート調査を中心に、留守児童の現状と問題点、子ども達の出稼ぎに対する考えなどを通じて家族の戦略を導き出す。第5章では、一連の変化と影響を受けて、送り先の行政と社会は教育の危機にどのように向き合ってきたかを論じる。第6章では、調査結果について分析を行いながら、全体をまとめ、朝鮮族の家族のあり様の変容について提示する。最後に今後の課題と展望を提示する。

図1-1は、本研究全体を貫く分析の構成図である。韓国政府の受入政策の変容は在韓出稼ぎ者の生活に変容を与え、それはまた直接残された子ども達の置かれている環境に影響を与え、変容を引き起こす。それを受け、送り先では直面した問題に向け、様々な取り組みを行う。この一連のカテゴリーはお互いに影響し合いながら出稼ぎの現在に至っている。その結果、家族の変容をもたらし、トランスナショナルな生活へとつながっていく。

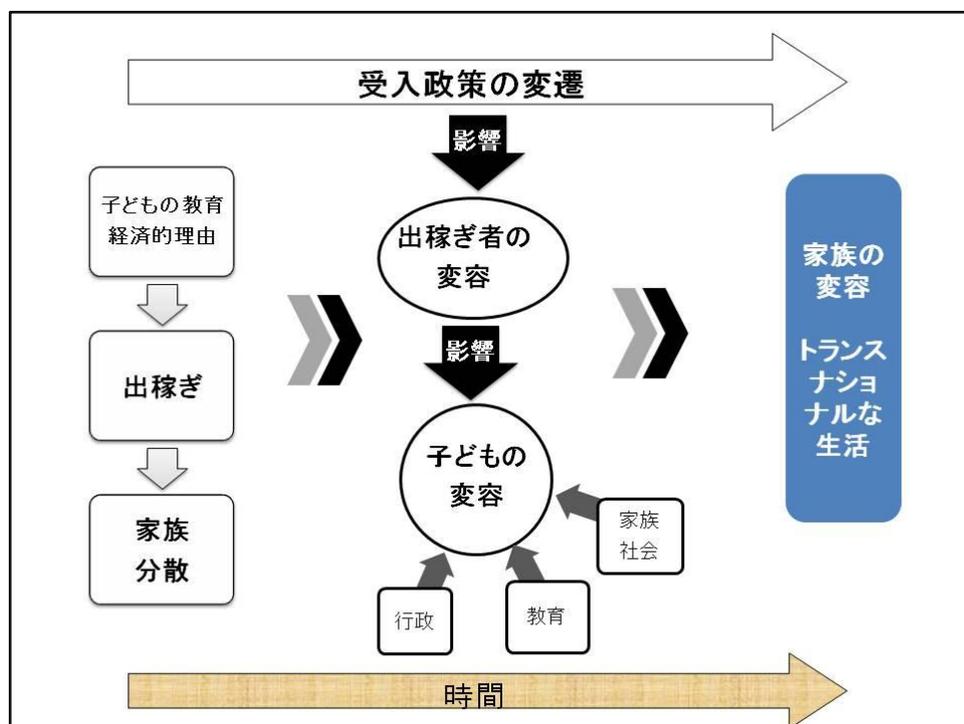


図1-1 分析の構成図

第2章 韓国における受入政策の変遷²²

はじめに

朝鮮族のコリアンドリームによる移動を説明する上で、両国の経済的な格差以外にも時代的な背景と政治的な要因、そして何よりも民族的な要素が欠かせない。そして、もう一つの重要な要素として、朝鮮族に対する韓国の受入政策が挙げられる。最初の移動のきっかけは、経済的な要因が最も大きく働いたかもしれないが、それ以降の20年間におよび移動は韓国政府の受入制度の変化とともに変わって来たと言っても過言ではない。

朝鮮族に対する韓国政府の受入政策は「政策不在の時期」から、「外国人労働者」としての管理中心の時期、そして「在外同胞」としての配慮に基づく現在の政策まで大きく3つの段階に分けることができる。特徴としては、規制から緩和へ、拒絶から受入へ、管理から包容へと変わりつつある。

これによって、韓国への朝鮮族の移動も1992年、2007年、2008年の3回の出稼ぎブームに分けることができる。政策不在時期である1980年代から1992年前は主に親戚訪問が主流であり、入国者数もわずか数百名に過ぎなかった。1980年代後半からは親戚訪問よりは出稼ぎへと変わり始めたが、当時は親戚招請ビザでしか入国することが出来ないことから、この時期も親戚訪問の範疇にいれられる。当時韓国と中国はまだ国交断絶時期であるゆえに、韓国へ入国するためには必ず香港を通らなければならないなど、入国手続きも複雑でまだ大量の移動が出来なかった時期でもある。第1次ブームは、1992年韓中修交によって直行航路が開通され、本格的な移動が始まった時期である。しかし、1992年から2002年までは在韓朝鮮族の殆どが不法滞在身分であったため、この時期は「不法滞在朝鮮族の歴史」とも言える。2002年に韓国政府の不法滞在者に対する救済政策により、多くの在韓朝鮮族の滞在が合法化され、2002年は朝鮮族にとって、不法滞在から合法滞在へと変わった分水嶺とも言える。親戚訪問に関する政策も緩和され、年齢制限も老年層から2003年には30歳以上、2004年には25歳までに下がり、中・老年一色だった在韓朝鮮族にも多様な年齢層が現

²²本章は2013年8月韓国法務部での政策担当者との面談内容と韓国電子政府のパブリックコメントシステムを通じて答弁してもらった内容等を参考にしてまとめたものである。

れ、平均年齢も若くなった。第3次ブームは、2007年の訪問就業制である。訪問就業制は朝鮮族が韓国で合法的に就労できる道を開き、制約はあるが、無縁故の人にも韓国での就労が可能になり、更なる出稼ぎブームを引き起こした。なお、2008年から現在に至るまでの在外同胞ビザの漸進的な実施は、高学歴の朝鮮族の流入等、多様な階層へと分化するに至る。

韓国政府の受入政策の変遷は常に朝鮮族の「合法的に滞在し、自由な行き来ができる」という願望との対立によって尖鋭化してきた。

一つは、労働需要があるにもかかわらず、国益の観点から国境を越える人の移動を制限、管理、または黙認しているという、需要と政策の「ズレ」であり、これが移動初期の不法滞在者の形成と増大の最大の理由になっていたのである(田巻、2005：4²³)。二つは、厳然たる「在外同胞²⁴」でありながらも、制度上では在日コリアンや在米コリアンのような完全な在外同胞の範疇に含まれないことから、出入国や経済活動における法的地位が十分保障されていないところに矛盾を見出すことができる。

国際労働力の移動が政治的な管理の枠を超える複雑かつダイナミックな動きを見せる現象であるにもかかわらず、制度の外に置かれている人々の仕事や生活の実態が注視されず(田巻、同上：16)、制度と現実とのズレから派生する様々な問題の対応に迫られているのである。一言で言えば、国益と経済的要因だけを想定した政策が初期の成果を得られないのは、経済的要因以外の要因の多様性や複雑化を見逃していることに原因があると思われる。

とりわけ、一連の受入政策の変遷により、現在の在韓朝鮮族の移動の形態は滞在の長期化の一方で、「還流」と称され、来韓と帰国を繰り返す傾向が強い。更には、家族の呼び寄せによる定住化傾向も見せている。これはまた送り出し地域の残された家族にも直接影響を与え、国を跨る生活によって、家族の変容までもたらしているとも言える。表面から見ると、移動による様々な課題を朝鮮族自身の自己責任に

²³ 田巻松雄「アジア域内の労働力移動と非合法移民」、奥山、田巻、北川編著『階層・移動と社会・文化変容』文化書房博文社、2005年、pp15-39。

²⁴ 韓国は人口対比海外に居住する在外同胞の比率が非常に高い国の一つである。韓国籍を持ちながら外国の永住権を取得したか、永住を目的に居住している「在外国民」(韓国籍を持つ「在外国民」は約300万人。在外同胞全体で700万人。)と韓国の国籍を保有したことがあるか、あるいはその直系として外国籍を取得した「外国籍同胞」で構成される。在外同胞数は韓国人口の約15%を占めている。その中、朝鮮族は約193万人いる。

帰すことが解決への有効な手立てになると考えがちであるが、本章では彼らの移動と国を跨る生活の背景には韓国政府の受入政策とそれを支える社会のあり方が深く関わっていることを視野に入れながら、今日のトランスナショナルな生活に至るまでの受入政策の変遷について概観する。

第1節 韓国における朝鮮族の滞在の状況

朝鮮族の韓国での在留の特徴をみると、初期の不法滞在から合法滞在へと変わっていくことがわかる。

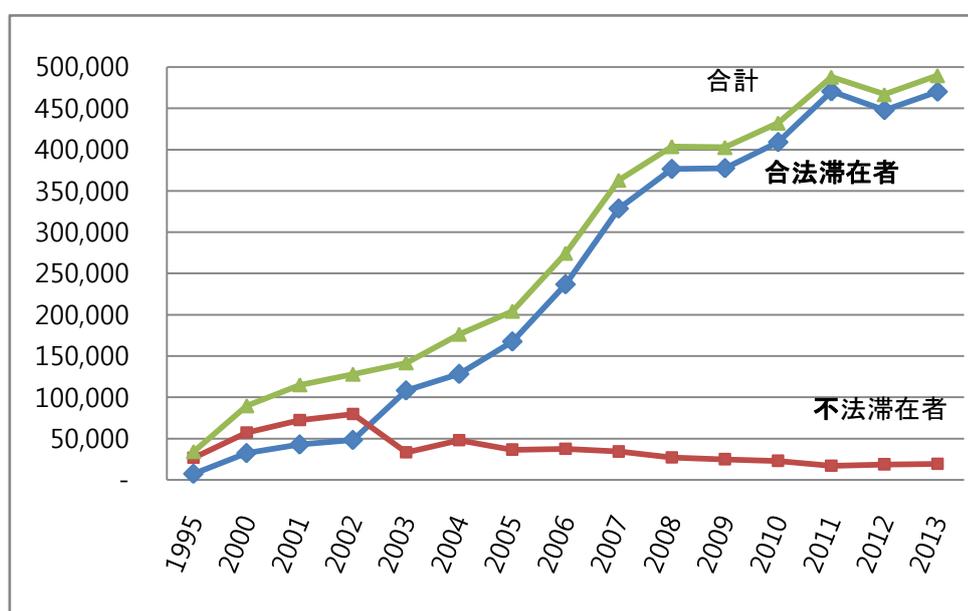


図2-1 韓国における中国朝鮮族の人口推移

* 出所：大韓民法務部「出入国管理統計年報」各年度版の統計資料により作成

【図2-1】は、1995年から2013年6月までの、韓国に在留する中国朝鮮族の推移である。1995年に34,287人しかいなかったが、2013年6月には489,760人に達している。これは韓国の外国人総数の32.1%を占め、在中朝鮮族の約23%に相当する人が韓国に在留していることになる。特に2007年の訪問就業制度を実施する前後の2005年から2008年の間の増加が著しいが、この3年間で約21万人も増えている。一方で不法滞在者数は2002年までは合法滞在者数を上回っており、2002年の合法滞在数は48,293人であるのに対し、不法滞在者数は79,737人であった。2003年になると不法滞在者数は大幅に減少して33,546人になるが、合法滞在者数は108,283人に達する。こうした変化は、韓国政府の中国朝鮮族に対する受入政策と深く関係している。

第2節 不法滞在の時期

2-1. 政策不在の時期(1987年～1991年)

韓国において1989年以降、経済界・労働界・政府・学界では、外国人労働者の受入に関する議論が本格的に始まったが、韓国政府は1990年末まで外国人労働者を受け入れないことを原則としていた。当時、韓国政府は「観光」や「親族訪問」という形で入国した外国人の中で未登録労働者が不法に就労をしていた現状について、国民経済に大きな害悪はないとして放置していた(イ・ヘキョン、1994²⁵)。いわばこの時期は外国人労働者政策が存在していなかった時期とも言える。朝鮮族の韓国進出の始まりもちょうどこの時期であり、1988年ソウルオリンピック大会の頃まで遡る。1986年のKBS国営放送ラジオ番組「朝鮮族離散家族探し」を契機とし、中国朝鮮族は韓国内に親族の確認ができれば、親戚訪問のため6ヶ月間の韓国内在留を認める旅行証明書を受けることができるようになった。更に1988年のソウルオリンピックの開催は多くの在中朝鮮族に強烈なインパクトを与えた。1992年韓国と中国の国交樹立以降、更に韓国への親戚訪問が増加していた。韓国への入国の目的は、中国国内から持参する漢方薬を韓国で販売し、高価で売られ、より多くの利益を得られるためであった。これが‘コリアンドリーム’に火をつけたのである。

当初、中国朝鮮族は韓国に長期滞在するより漢方薬の「担ぎ屋」的商法を目的にした短期滞在の傾向が強かった。しかし、漢方薬市場の混乱を憂慮した韓国政府の厳しい取り締まり等によって、より効率的に収入を得るために韓国の労働現場に就労するケースも増え始めた。親戚訪問を事由として朝鮮族に発給される旅行証明書は韓国国内での就業を認めておらず、また建設現場や食堂などでの就労は許可された滞在期間を超えて長期化するため、必然的に朝鮮族の韓国在留は「不法滞在者」的なものにならざるを得なくなった(鄭 雅英、2008:79²⁶)。

2-2. 産業研修制度と就業管理制度(1991年～2003年)

²⁵ イ・ヘキョン「外国人労働者雇用に関する研究:国内労働市場に及ぼす影響」『韓国社会学』28号、ソウル:韓国社会学会、1994年、pp89-113。

²⁶ 鄭 雅英「韓国の在外同胞移住労働者—中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析」『立命館国際地域研究』第26号、2008年2月、pp78-95。

1990年から韓国政府は朝鮮族への旅行証明書発給を停止し、一般外国人並に中国籍外国人としてのビザ発給を行うことになった。1992年8月の中韓外交樹立を前に朝鮮族入国に関するビザ発給の部署は外務省から法務部に移管され、管理中心の政策に取り組んだ。入国条件は更に厳格になり、親戚訪問資格は60歳以上の者に限って認められることになり、59歳以下の朝鮮族の通常入国はほぼ封鎖された(鄭、同上:81)。

一方で、韓国では日本と同様、1990年代初頭から外国人非熟練労働者を事実上受け入れてきた。韓国における労働力不足の問題は1988年のソウル・オリンピックを前後に表面化し、その後の経済発展と教育水準の向上に伴う若者の3K労働忌避傾向によって、主に製造業を中心に空洞化していった。もっとも早くからその穴を埋めていたのは中国や旧ソ連居住の在外同胞であり、国内の企業は安い賃金で彼らを雇い、労働力不足を解消して、政府も朝鮮族が「不法滞在者」として定着していくのを見てみないふりをした。

1980年代の韓国経済の発展とソウル周辺の新都市住宅建設ブームにともない、建設業や製造業企業では恒常的な労働力不足に直面することになり、朝鮮族の働き口が易くやすくなったことも影響している。短期間で高収入を得た朝鮮族の成功例は、中国朝鮮族社会に出国労働＝豊かさへの近道という希望を与えた。しかし、親族がいないと韓国入国のためのビザが出ないため、高額な手数料を払って親戚訪問ビザを偽造するケースや、安心して移住できる韓国人との国際結婚も増えていた。韓国政府も産業界の求めに応じて、1991年産業研修制度を政令で定めたが、基本的な労働権、生存権は保障されなかったため、きわめて劣悪な状況下で、外国人研修生の職場離脱率も激しくなっていた。朝鮮族の離脱率はミャンマー人に次いで59.5%に至った(鄭、同上:81)。親戚訪問ビザの発給条件も常時変わったが、主に中高年層を対象に発給した²⁷。

一方、在外同胞に対しては、2002年12月に「就業管理制²⁸」が導入された。韓国語能

²⁷ 1992年当時は60歳以上、1994年には55歳以上、1999年からは50歳以上(法務部「在外同胞法」参照)

²⁸ 就業管理制：中国・ロシア等の在外同胞に対しての就業優遇政策の一つで、飲食店、看病人、清掃業など、韓国人忌避のサービス分野で一定期間就労できるように許可した政策で、2002年12月から導入された制度である。2006年には製造業、農畜産業、漁業を追加する。

力に長けた朝鮮族が中心となって不法滞在をしつつ、サービス業に従事していたことから、従来外国人には禁止されていたサービス業への就労が最長3年間許可されるようになった(白井、2007:33²⁹)。

第3節 合法滞在の道へ(2002年～現在)

3-1. 在外同胞制度の改正と特例雇用許可制

約10年間苦難の連続であった在韓朝鮮族の生活は2002年日韓ワールドカップを契機に光が見えてきた。ワールドカップを目前に韓国政府は密入国者を含め、全ての不法滞在者に自己申告する場合、出国猶予期間を設け、2003年9月1日から2004年2月29日の期間中、自己申告によって帰国した朝鮮族には再入国できる方針を発表した。2002年の韓国政府のこの措置は大多数の在韓朝鮮族の不法滞在者身分を払拭してくれたのである。これ以来在韓朝鮮族の親戚招請の条件も徐々に緩和され、2003年には30歳以上に、2004年には25歳以上と下げられた。在韓朝鮮族の構成も多様な年齢層が滞在することになり、平均年齢も若くなり始めた。

1998年金大中政府は、700万人の韓国系同胞の経済力、及び影響力を活用することを目指し、「在外同胞の出入国と法的地位に関する法律」(以下在外同胞法)の政府立案を公表した。「在外同胞法」は、出入国及び在留において、韓国系同胞も韓国国民と同じ待遇を受けられるという法律であるが、内外に大きな波紋を招き、中国政府との外交摩擦や、韓国への大量流入とそれともなう労働市場の混乱を考慮し、大韓民国政府樹立前に海外に移住した中国朝鮮族とCIS地域(旧ソ連)のコリアンはこの法律から除外された。2001年11月韓国憲法裁判所は、海外に進出した同胞を政府樹立前と樹立後にわけるのは、平等原則に違反するとし、「在外同胞法」を憲法違反であるとの判断を下した。それに従い2004年3月に在外同胞法の改正がなされるが、下位法の施行令と施行規則上の制限措置により、中国朝鮮族と旧ソ連コリアンは事実上在外同胞としての権利が制限された(張、2010:6³⁰)。即ち、韓国政府は在外同胞法の

²⁹ 「韓国の外国人労働者政策と関連法制」『外国の立法』通巻231号(東京:国立国会図書館調査及び立法考査局、2007年)

³⁰ 張京花「中国延辺地域における朝鮮族社会の変容－韓国への出稼ぎを中心に」宇都宮大学国際学研究科修士論文、2010年。

違憲審判の決定に対し、中国等との外交問題を考慮した上で、在外同胞法自体の根本改訂ではなく、在外同胞の出入国や就業に関する制度改訂で対処する方策を採った。従来、中国朝鮮族と旧ソ連コリアンの移住労働者は事実上一般外国人と同じ制度下で管理されていたものを、在外同胞労働者には一定の優遇を与える方向に徐々に転じた(鄭、同上:84)。

中国朝鮮族と旧ソ連のコリアンには、2004年から特例雇用許可制が導入された。雇用管理制は、訪問同居ビザ(F-1-4)資格で入国した後、一定の条件を満たせば、就業資格(E-9)に変更され、製造業、建設業以外に6種類のサービス業等決められている職種で就業可能な3年ビザが与えられる。しかし、就業するまでの手続きが煩雑で、無縁故の(韓国に親族を持たない)朝鮮族は対象外であるという問題があった。

3-2. 訪問就業制の導入

韓国政府は以上の問題点を検討した上で、2007年3月に韓国内での自由な就業を認める訪問就業制(H-2ビザ)を施行するに至る。訪問就業制度は中国及び旧ソ連地域に居住する満25歳以上の外国籍同胞についてより簡単に故国で就業できるように定めたビザ制度(H-2ビザ)である。これにより有効期間5年間の複数ビザとして一回の入国によって、最長3年間滞在できるし、5年という滞在期間中は再入国手続きなしで自由に行き来できる。従来の韓国に縁故のある者ばかりでなく、無縁故の者も韓国語試験や抽選などを通じて入国することができた。既存の訪問同居ビザと非専門就業ビザの所持者も訪問就業ビザと分類され、最長3年まで滞在できる。法務部の資料によると、対象者を25歳以上としたのは25歳未満の若者が韓国内就業のため大学進学を放棄するのを防ぐためであり、滞在期間を3年に限定したのは長期出稼ぎによる中国での家族離散を防止し、「中国内の定着」を誘導するためとしている。韓国移住労働による中国朝鮮族社会への影響と中国政府の懸念に配慮していることが窺える(鄭、同上:85)。2007年から実施された訪問就業制(以下H-2ビザ)は、韓国における朝鮮族の立場を一変させるほど、大きな影響を与えるものであった。なぜなら、25歳以上なら韓国内に縁故のある者ばかりでなく、無縁故者の場合にもクォーター制をかけてビザを取得し、5年という期間内の出国と再入国が自由になったからである。なお、韓国においての就業手続きも簡略化され、滞在期間内の職場異動も自由になった。その結果、在韓朝鮮族の数が更に急増することになった。

訪問就業制は朝鮮族の韓国滞在の合法化への道を開き、今まで疎外化されていた無縁故の者にも入国の機会を拡大し、入国過程でのブローカーと詐欺を根絶し、自由に就業できるという面では高く評価されている。実際法務部が2007年実施した質問調査では合法滞在者の80%、不法滞在者の56%の朝鮮族が良い政策として評価していた³¹。特に「在外同胞の枠から排除されている中国同胞に対する差別の解消」を通じて同胞を包容し、韓民族ネットワークを強化する上では画期的な効果をもたらしたという。

3-3. 訪問就業制以降、在外同胞ビザの拡大実施に至るまで

2011年9月9日韓国政府は訪問就業制5年の期限が近づくにつれ、大量の出稼ぎ労働者の満期帰国による韓国国内労働力市場の空洞化を憂慮し、訪問就業制を更に延長する法案を発表するに至る。法務部の発表によると満55歳未満の者が満期帰国した場合は、出国1年後に再度4年10ヶ月という滞在ビザを取得し、再入国できるということである。しかし、1年という期間は長いという雇用主達の意見もあり、地方製造業又は農畜水産業分野に1年以上就業中の場合は、55歳未満でも満期出国後6ヶ月が過ぎれば、再び訪問就業ビザを申請して入国できるようになった。55歳以上の者に対しては、もはや訪問就業ビザで入国する事はできないが、満期で自己申告して帰国した場合は、回数の制限と猶予期間がなく、自由に往来できる短期ビザを発給するとの方針である。60歳以上の者に対しては、2013年9月1日から申請さえすれば、在外同胞ビザを付与する方針である(以前は60歳以上でも訪問就業ビザを持っている者だけが在外同胞ビザに変えられる)。

更に、その後の2012年4月10日、法務部は「外国籍同胞制度変更改善案内文」を発表する。それによると「国家公認技術資格証(技能士資格証)を取得した者には在外同胞ビザ(以下F-4ビザ)を付与する」ということである。そもそも在外同胞ビザというのは1998年に就任した金大中大統領が国外に永住する韓国民や外国籍を取得している全韓国系同胞の経済力、技術力その他、社会文化的影響力を韓国社会に活用することを目指し、在外同胞に内国人同様の諸権利を与えることを主旨とする「在外同胞法」によるものである。施行初期には企業家、大学教授、弁護士、医師、記者、韓国で

³¹ イ・ジンヨン「韓国で生活している中国同胞」在外同胞財団、2010年。

修士・博士課程で留学する朝鮮族の留学生に限って発給したため、ごく限られた同胞だけに該当することとなった。およそ2010年からは4年制大学卒業生、公務員及びその家族にまで発給することとなり、2011年には対象者を拡大し、訪問就業ビザのうち、地方製造業、農畜産業・漁業、家事、看病人に従事する一部の同胞が、在外同胞ビザに変更された。更に、2012年の在外同胞ビザの拡大実施により(「外国籍同胞制度変更改善案内文」によるもの)、国内で情報処理、美容、洗濯(クリーニング)、ボイラー、溶接、皮膚管理、料理、自動車整備、金属扉などの383分野³²で公認技能士以上の国家技術資格を取得した者は、在外同胞ビザに変更することができるようになった。ただ単純労務には従事することを禁止している。【図2-2】を見ると、資格を取得してビザを変更する朝鮮族数が年々増加して、2013年7月末在外同胞ビザ数21万人の内、在中朝鮮族の数は約14万人で、60.6%を占めていることが分かる。

は約14万人で、60.6%を占めていることが分かる。

第4節 韓国政府の定住化防止原則

4-1. 不法滞在者への救済政策と年齢制限の緩和

中国朝鮮族を含め、外国からの単純技能労働に従事する出稼ぎ労働者に対して韓国政府は一貫して定住化防止原則の立場を固守して来た。定住化防止原則とは外国人労働者が経済的な目的を達成でき

る十分な期間を設定はするが、長期滞在による定住化問題が発生しないよう数年以内の就業期間を定める原則を指す(イ・ドンフン、キム・ナムウ、2009: 3³³)。理由としては、韓国国内の労働市場への保護と韓国社会での単一民族として維持して来た国民の感情への考慮、国政運営上でのコストの負担増加などが挙げられる。

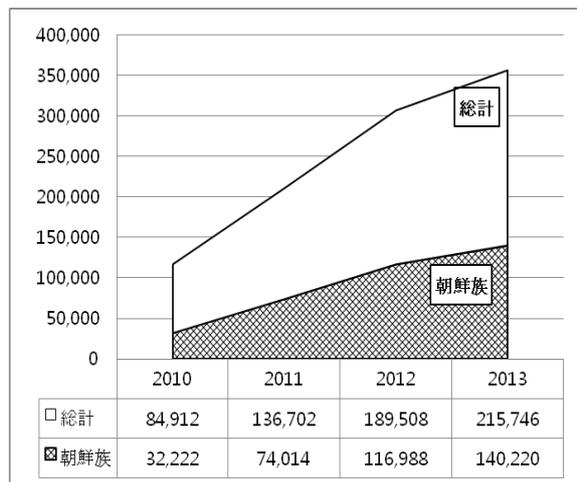


図2-2 在外同胞ビザ者数

* 出所：大韓民法務部出入国外国人政策本部各年度統計年報により作成

³² 韓国国内人の人気職種である建設業、食堂業など58の単純労働は除かれている。

³³ イ・ドンフン、キム・ナムウ「多文化社会進展による移民政策の正しい方向—段階的定住化体系の導入」大韓民法務部移民政策分野優秀論文、2009年。

これまでの朝鮮族の韓国への入国経路を辿ってみると、1980年代の親族訪問から、1991年の産業技術研修、1998年の在外同胞法定と雇用管理制、2004年3月の在外同胞法の改正と2004年の特例雇用許可制、そして2007年の訪問就業制度、2011年の訪問就業制度の延長実施、更には2012年の在外同胞ビザの拡大実施にまでいたる。規制から緩和へと変遷を重ねてきたが、いずれもビザ資格条件、就業年数や職種の制限等の制約条件が置いてある。一方、不法滞在者に対する取り組みをみると、2002年3月には「不法滞在者総合防止対策」を打出し、3月31日までを出国猶予期間を設けることで、およそ10万人の朝鮮族が自主帰国した。2003年から2004年までの就業管理制により、約7万2千人が合法化された(キム・フム、2012:30-31³⁴)。また、訪問就業制に先立ち、2005年、2006年に中国同胞自主帰国プログラムを施行した。期間内に自主帰国した場合、出国後6ヶ月または1年後に再入国を許可するというものであった。更には、2010年から2011年には10年以上の不法滞在者に対する救済政策、2012年から現在に至るまでは偽名旅券利用者、身元不一致者に対する一部救済などを行っている。2013年6月末、韓国に滞在する朝鮮族総数は489,760人で、合法滞在者数は470,225人、不法滞在者数19,535人である³⁵。

年齢制限をみると親族訪問から始まった韓国への入国は1992年の韓中国交樹立を前に、親族訪問資格を満60歳以上の者に限定し、その後、年齢制限は段階的に下げられ、1994年には満55歳以上、1999年には満50歳以上、2002年には満40歳以上、2003年には満30歳以上、2004年には制限年齢を満25歳以上にまで下げられている。19歳以上25歳以下の子どもの場合、大学への留学か、90日の短期ビザでの入国後、特定技術資格証を履修して、自由に行き来できる在外同胞ビザに変えることが韓国で長期滞在するための唯一の方法であった。未成年者の場合、ようやく2010年4月から訪問就業ビザ所持者に限って、18歳以下の子どもには親の滞在期間まで滞在可能な訪問同居ビザ(F-1)を付与し、2012年4月からは親が就業可能な資格で滞在している場合、19歳以下の子どもはF-1ビザで親と一緒に滞在できることになった。

このように韓国政府は、朝鮮族の出稼ぎ者に対して、母国でお金を稼げるよう配慮はしているものの、常に滞在期間と制約条件を設け、家族の同伴滞在や連続しての長

³⁴ キム・フム「在韓朝鮮族の生活の変化に関する研究—1990年代と2002年以降の在韓朝鮮族の生活の差についての比較」ソウル大学修士論、2012年。

³⁵ 出所:大韓民国法務部出入国管理外国人政策本部統計資料室

期滞在、定住化を防ぎ、本国に帰す方針をとってきた。

4-2. 受け入れ政策の限界点

「なかなか全面開放しない」韓国政府の受け入れ政策と「合法的に、自由な行き来を望む」朝鮮族の願望との対立から受け入れ政策の限界点が見えてくる。

2007年から施行された訪問就業制度は5年満期の規定と、再入国までの1年という猶予期間が設けられており、また満55歳から60歳までの同胞は実際韓国で長期滞在ができなくなっていた。1年という期間は決して短い期間ではないので、訪問就業制のビザ満期者たちは韓国での生活を整理して帰国し、帰国しても1年という期間内に新たな事業の開始や職場探しを行うのは現実的には難しいことである。しかしながら、片方では、1年という期間は長いという韓国内の雇用主達の意見は受け入れられて、地方製造業又は農畜水産業分野に1年以上就業中の場合は、55歳未満なら満期出国後6ヶ月が過ぎれば、再び訪問就業制度を申請して入国できるようにした。国益の観点から朝鮮族の効率的な利用を図る韓国政府の受け入れ政策と、彼らが置かれている仕事や生活の実態を考慮しなかった政策に多くの朝鮮族から「何とか帰国せず韓国に残りたい、不法でもかまわない」という声が高まり、新たな不法滞在者の集団を生み出す可能性は十分ある。

2008年からの在外同胞ビザの拡大実施は、韓国滞在中出稼ぎ労働者でも国家公認資格証さえ取れば、自由往来が保障できる在外同胞ビザの取得が可能になることを意味する。制約はあるが、訪問就業制ビザや在外同胞ビザの所持者は親戚や家族の招請も可能になる。筆者が調査を行っていた2012年末から2013年は初め頃は、韓国における朝鮮族社会は資格証を取るための、異例的な勉強ブームが起きていた。ガリボンドン³⁶地域の至るところに各種資格取得という塾の広告チラシがあふれていた。猶予期間1年という空白が耐えられず満期帰国を控えた朝鮮族や、55歳以上の者等、もはや訪問修業ビザの年齢制限から外れた人は、在外同胞ビザに変更するために勉強に熱をあげていた。在外同胞ビザの拡大実施は「単純労務の同胞に専門の技術を習得させ、専門職種に転換させるように誘導し、安定的な滞在を保証するため、そして、帰国後何らかの形で自立させるため」という趣旨からである。しかし、一方では無許可の塾

³⁶ ガリボンドン：ソウルの行政区域名、ソウル市九老区加里峰洞(ガリボンドン)

も乱立して、朝鮮族の切実な状況を悪用する詐欺の被害も相次いでいた。なお、在外同胞ビザは決められた専門職種しか就労することができず、もし単純労務に従事する場合、違法になり取締りにかかってしまうという。長年現場で在韓朝鮮族の相談役をして来た「同胞タウン新聞社」のK氏の話によると、盲目的に資格をとって、在外同胞ビザへの変更後、就職先が見つからず、また訪問就業制への再変更もできず、困っている朝鮮族もかなり見てきたとして、在外同胞ビザへの変更は長い目で考慮すべきだと懸念を表した。55歳に達した者や、1年という猶予期間が耐えられず、そのまま帰国せず新たに不法滞在に転落する者もいるとのことである。

本章のまとめ

本章では1980年代から2012年にいたるまでの韓国政府の朝鮮族に対する受入政策の変遷について論じた。20年の受入政策の変遷は在韓朝鮮族のコリアンドリームの歴史とも言える。受入政策が変わるたびに朝鮮族社会も泣いたり、笑ったり悲喜が交差した。20年の間、在韓朝鮮族の受入政策は目まぐるしく変わってきたが、特徴としては規制から緩和へ、拒絶から受入へ、管理から包容へと変遷を重ねた。それにより、朝鮮族の移動も不法から合法へ、中高年層から若年層へ、低熟練労働から高学歴までと変化して来た。その中でもいくつか画期的な節目となる年がある。2002年は在韓朝鮮族が不法滞在から合法滞在へと転換する分水嶺となった。更に、2007年は縁故・無縁故の両者とも合法的に韓国で就労できる道を開き、入国経路を更に拡大した。2008年から朝鮮族にも在外同胞ビザを適用し始め、2011年には訪問就業制の無縁故抽選の韓国語試験を廃止し、2012年からは無試験で抽選を行った。なお、2010年から未成年者も訪問同居ビザで親の滞在期間まで滞在できるようになった。

韓国政府の一連の受け入れ政策の変遷は、在韓朝鮮族の入国の経路を決める背景となり、出稼ぎの形態にも大きな変化をもたらしている。従来は、一定期間後に本国に帰国する文字通りの「出稼ぎ型」から、出入国を繰り返す「還流型³⁷」の出現、定住を想定した長期滞在まで、多様化されている。勢いづく出稼ぎの波はとどまるどころを知らず、韓国政府の政策に従って動いている。2013年現在在韓朝鮮族数約47万人の

³⁷ 本章では文脈に従い場合によっては「リピーター」または「繰り返し出国」という言葉も並行に使用している。

内、訪問就業制ビザ者数は約24万人、在外同胞ビザ者数約13万人占めている。また韓国滞在在外同胞ビザ者数21万人の中、朝鮮族は13万5千人、在米コリアンは44,000人、在カナダコリアンは約13,000人、在オーストラリアコリアンは約3,700人を占めている³⁸。各自の韓国での滞在プランによって、彼らを取り巻く生活や仕事、家族との今後を計画したりする。2002年の合法滞在化の時には、自主申告すれば再入国できるという法案に従い、約92%の在韓朝鮮族が帰国したということである(朴光星:2002)。出稼ぎ者の大量の帰国は、送り出し地域でも、一時的ではあるが、家族団らんの喜びを味わうことができたと推測される。また、年齢制限への緩和によって、在韓朝鮮族の年齢層も多様化し、若い人の流入によって、韓国での家族の再会の機会も増えているとも言える。

法務部の関係者の話によると、訪問制は在韓朝鮮族の将来数を70万人まで予想して作った制度であるが、あくまで国内の労働市場と国民の感情を考慮した上での政策であるため、今後もこのような事情を考慮しながら、労働部と意見調整し、徐々に朝鮮族のニーズに合わせて入国機会を拡大していく方針であるとのことである。また、訪問就業制の定員のクォーター制を今も毎年303,000人と制限を設けるのは、一回入国すると5年滞在が可能なことから、一斉に受け入れるよりは、帰国者の数等とのバランスもとりながら、中国国内で数多い待機者にも平等に就労の機会を与えるためだと明かしてくれた。いずれにしても、韓国政府としては朝鮮族達が韓国でお金を十分稼いで、技術を身につけ本国に帰国後、韓国での就労経験を生かして自立し、定着に成功させることが方針であることには変わりがないとのことである。

以上のように韓国における朝鮮族の受入政策は、基本的に積極的な受入に向かって変化してきている。今後の政策の展開も益々開放へと向かうと期待できるが、一方で、韓国政府の定住化防止原則とは反する長期滞在や、年齢制限による新たな不法滞在の出現、本国に残された留守児童生徒問題との関係、家族の呼び寄せなどによる定住化傾向もみられることから課題も残している。

受け入れ政策の変遷が朝鮮族の家族変容やトランスナショナルな生活の直接的な原因であるとは言い難いが、少なくともその背景となる環境を整え、契機を提供したことに間違いはない。すなわち、朝鮮族がトランスナショナルな生活を送るための「韓国への移動」という最低限の条件が、この受け入れ政策の緩和によってクリア

³⁸ 2013年8月法務部関係者インタビューによる資料。

されてきたとも言える。この土台を背景に朝鮮族の出稼ぎの様相や国を跨る生活はこれからも益々、多岐にわたり、複雑になると予想される。韓国政府の一貫性のある政策の貫きは朝鮮族の今後の行方を左右するものであり、より安定した生活にもつながると期待できる面はある。

第3章 韓国における出稼ぎの変容 —韓国ソウルでの実態調査—

はじめに

出稼ぎを目的とする中国朝鮮族のコリアンドリーム現象が活発化してから20年になろうとする今日、彼らの滞韓は長期化してしていると言われる³⁹。在韓朝鮮族の数も年々増えて、2013年現在、韓国における外国人の数の中で約3分の1を占める在韓朝鮮族は47万人を超えた。在韓朝鮮族の居住形態は滞韓の長期化の一方で「還流型⁴⁰」と称され、中国への帰国と、韓国への出稼ぎを繰り返す傾向が強い。

出稼ぎ者の就労状況と滞在形態は残された家族、特に子どもの教育と密接な関係がある。在韓朝鮮族の長期滞在について、鄭雅英は韓国社会での移住労働者としての朝鮮族の生き方について2つの可能性を提示している。一つは「還流」しながら中国朝鮮族としての身分やアイデンティティを維持し、韓国社会の中で自由に就業したり経済活動を継続する状況、もう一つは在外同胞への在留条件がより緩和された韓国で家族とともに生活する「永住型」移住労働に転換する可能性である(鄭雅英、2008: 93-94)⁴¹。

2章で述べたように韓国政府の朝鮮族に対する一連の受入政策の緩和、すなわち2007年からの訪問就業制施行と2008年からの在外同胞ビザの漸進的な適用は、在留期間が延長され、その間は自由な出入国もできるということで、正式的に彼らの出稼ぎの長期化と「還流」型出稼ぎに有利な制度上の土台を作った。しかし、それ以前からも朝鮮族の長期滞在はしばしばマスコミや数多い論文で取上げられ、家族間の長期間の離散は家族分散や家族崩壊を招きかねないこと、特に残された子ども達に悪影響を与えて、次世代の成長を妨げるという指摘が行われていた⁴²。

出稼ぎの形態は残された家族及び子どもの教育に大きな影響を与える。ならば朝

³⁹出稼ぎという言葉は「労働力となって働くために一時的に他地域、または外国で定住すること、あるいはその人」を指しているが、本論文では滞在期間に関わらず、主に単純労働者として就労を目的に滞韓している朝鮮族を総称する言葉として使用する。

⁴⁰本章では文脈によって、場合によっては「リピーター」または「繰り返し出国」という言葉も並行に使用している。

⁴¹ 注25、前掲載論文

⁴² 注6；注7；注12；注14；注29の前掲載論文でも長期滞在による家族分散を出稼ぎの問題点として取り上げている。なお、マスコミとしては朝鮮族地域の代表的な新聞である「延辺日報」と「黒龍江新聞」が頻繁に出稼ぎ関連ニュースを発信している。

鮮族の長期滞在の理由は単に経済的な要素だけなのか？彼らの出稼ぎはどのような変化を見せているのか？彼らは自身の置かれている現状と変化の中でどのような戦略を立てて、家族間の絆を維持しようとしているか？こうした事項は、残された家族及び子どもの教育への理解につながる。以上の視点に立ち、本章では韓国における出稼ぎ者の就労をめぐる変化や、彼らの滞在形態、生活、意識、教育戦略、家族との将来設計などを取り上げ、出稼ぎの変容と特徴を明らかにしようとする。

第1節 調査の概要

本章で使用するデータは、主に2012年12月と2013年8月、2回に渡って韓国ソウルで行ったインタビュー調査によるものである。調査の目的の一つは、韓国に在住する朝鮮族の長期滞在はどのように進んでいるか、その原因は何か、二つは、彼らの生活や意識は、韓国での滞在期間が経つにつれ、どのような変化を見せているか、三つは、子どもの教育を含め、家族との生活を維持するための戦略は何か、それぞれ明らかにすることである。

インタビューの対象者は朝鮮族研究者、在韓朝鮮族ジャーナリスト、在韓朝鮮族青年連合会幹部、韓国滞在中の出稼ぎ朝鮮族、韓国法務部出入国管理本部在留管理課事務官など総計11名で延べ10回の聞き取りを行った。インタビュー回答者の属性は【表3-1】に示す。

表 3-1 回答者の属性

事例	年齢	性別	家族	滞在期間	職業	日時	面談場所		回数
A	60代	男性	4人	15年	建設	24-12-28	ソウル 九老区 ガリボン ドン (加里峰 洞)	朝鮮族食堂	1回
B	50代	女性	3人	13年	介護			1回	
C	30代	男性	4人	7年	工場	25-1-2		カフェ	1回
D	40代	女性	5人	6年	家政婦	25-1-3		レストラン	1回
E	50代	女性	3人	5年	日雇い	25-8-14		カフェ	1回
K	50代	男性	ジャーナリスト			25-1-4 25-8-12		新聞社	2回
P	30代	男性	教授			24-12-27	ソウル大入口駅カフェ		1回
L	50代	男性	国家公務員(韓国人)			25-8-14	京畿道果川政府庁舎		1回
K	40代	男性							
G	30代	男性	自営業			25-8-15	ソウル市大林洞カフェ		1回
Y	20代	男性	会社員						

インタビューの形態は、事前に送付した質問項目から、それ以外の話題に至るまで自由に話してもらった。平均1時間30分から2時間程度話してもらった。出稼ぎの調査の対象者には主に韓国での生活と帰国意識、定住意識、家族と子どもの教育に関する考えなどを中心に質問を行った。

第2節 出稼ぎの形態の変容

2-1. 長期化する出稼ぎ—資格取得ブームと問題点

2012年の12月末、筆者が調査のためにソウル市九老区ガリボンドンを訪ねた時には、町の中が在外同胞ビザの拡大実施による資格取得ブームの熱気にあふれていて、至るところに専門学校や資格取得の宣伝チラシが貼ってあるのが印象的であった。2012年4月以来、京畿道をはじめとする首都圏ばかりでなく、地方の専門学校でも情報処理、韓食料理、溶接、美容、金属扉等の資格取得教育課程を相次いで開設し、朝鮮族の受講生を募集し始めた。訪問就業制(以下H-2ビザ)の満期を目前に控えている朝鮮族達が出稼ぎビザを取得するために専門学校に殺到し、関連専門学校は産業技術研修制以来前例のない好況を迎えていた。塾ごとに受講料は異なるが、平均50万ウォンから100万ウォンであり、教材費等の費用を合算すれば、最高150万ウォンを支払うところもある。

「同胞タウン新聞社」K氏⁴³へのインタビュー(2013年1月4日)から判断すると専門技術を習得させるという韓国政府の政策の趣旨が、朝鮮族達にとってはより長く韓国に滞在するためのビザ延長の盲目的な手段に直結してしまい、結果的には在韓朝鮮族社会では「専門学校の受講料イコール韓国滞在延長費」という認識が広がっていることが分かる。

まず、出稼ぎ労働者A氏からのインタビューにより、次のような事例が確認された。

54歳男性がH-2ビザの満期を前にした2012年8月に農機械運転技能士資格を取り、在外同

⁴³ 2回ともインタビューに応じてくれたK氏は元朝鮮族の日本語の教師で、移動初期から長年現場で朝鮮族達をサポートしてきた人である。現在は在外同胞タウン新聞の編集や寄稿などの執筆活動の傍ら、朝鮮族と韓国社会の間で両側のための理解教育の講師としても活躍している。特別な履歴も持っていて、在韓朝鮮族の移動の歴史と共に歩んできたとも言える。

胞ビザに変更した。資格講座を一緒に受講した130人の内、合格者は彼を含めわずか10人で、専門学校での講習は質が低かったと感じた。ビザ変更後、犯罪等の理由以外は韓国で滞在期間を気にせず、自由に就労できるようになったと喜んだが、ビザ変更後は単純労務には従事できないということが分かり、冬にはどこも農機械運転技能士を必要とするところがないので、現在は以前に働いていた土木建設業分野で辛うじて食べている。

このケースのように、在外同胞ビザの所持者が単純労務に従事する場合、摘発されたら罰則を受け、強制送還される可能性もある。盲目的な資格証のブームの中、彼のような困難に陥った朝鮮族達が続出しているのが現実であった。A氏によれば、例えば情報処理資格証をとっても、韓国内での就職先が見つかりにくく、そうかと言って日雇い仕事をしようとしても韓国の雇用主達からF-4には仕事を与えることができないと門前払いされがちであるという。

また資格取得のための専門学校とのトラブルも絶えない。B氏によれば、ある夫婦はH-2ビザ満期に備え、夫は工事場の仕事、妻は食堂の仕事をやめて資格証を取ることに専念した。登録する前に塾側は100%合格を保証すると約束したが、結局夫婦とも不合格になると塾側は待っていたかのように、ビザ満了の前にとらなければならぬと言いながら全然関係のない資格証まで勧められたという。

こうした問題点を受け、法務部はソウル市デリュムドンとガリボンドン一帯を中心に氾濫する技術専門学校による被害事例が相次ぐことを憂慮し、2013年7月1日に傘下の「在外同胞技術教育支援団」にF-4ビザを付与する技術教育登録機関(専門学校)を選定し、発表するに至った。支援団に登録された機関で受講中の同胞が機関の廃業、倒産などにより補償が必要と判断された場合には被害金額の80%範囲内で補償を受けることができる。今までの無差別な教育機関の乱立による詐欺被害を防ごうとするための法務部の対策であった。しかし、一部の朝鮮族達は「自分の通いたい分野の専門学校で、法務部に登録されている学校を探したら、住んでいるところから遠くて、なかなか通えない」との声も高まっている(E氏談)。「在外同胞新聞社」のK氏は「H-2ビザの5年満期を控えていたり、制限年齢の55歳に達した同胞達が、F-4ビザに殺到している。1年間帰国しなければならない人たちがその切実な立場を利用されて、被害を受けている。」と語った。

2-2. 長期滞在の原因

第二章で分かったように韓国土務部出入国管理政策本部職員へのインタビューによると、朝鮮族に対しての政策方針はあくまでも朝鮮族労働者が母国韓国で十分お金を稼ぎ、必要な技術も身につけ、彼らが中国に帰って経済的に豊かに過ごし、中国での定着を成功させることである。

では朝鮮族達はなぜH-2ビザの満期後の帰国1年の猶予期間も待てずに、資格取得に集まるほど韓国での滞在に全力をかけているのか。そこには、単なる経済的な要素だけに限らないいくつかの滞在理由がある。以下、朝鮮族の韓国出稼ぎ20年の歴史をさかのぼり、政策変遷に伴いながら韓国に滞在する朝鮮族の生活様相がどのように変化してきたのか検討する。

2-2-1. 不法滞在時期の長期滞在

韓国での合法的な就労が認められていなかった1990年代から2007年の訪問就業制までの約15年間、多くの朝鮮族は斡旋業者に平均約7万元（100万円相当）の費用を支払って渡韓しており、その費用も月3～5%という高利の借金で賄っていた。7万元は中国在住時の約7年から10年分の年収にあたる。そこで出稼者は韓国に移動後、その返済のために長期にわたって長時間労働を余儀なくされていた。不法滞在の出稼ぎ者の7割はすでに5年以上韓国に滞在していて「借金だけで返済するのに3年かかった。」と語る人もいる。この時期には一時帰国どころか、一旦出稼ぎに行くと、十分に稼げるまで帰国せず、家族は長期に渡って、離れ離れにならざるをえなかった。この時の出稼ぎ労働者は「家族と離れて寂しい」、「故郷の家族のことが心配」、「残した子どもの教育費や教育が心配」といった悩みを抱える人が多かった。そして少しでも早く金を貯めて帰国するため、出稼ぎ先では娯楽などに極力支出せず、安いアパートの地下室を借りて最小限の生活をしていた。また家賃・食費を節約するために住み込みでベビーシッター、介護、家政婦の仕事をする人が多かった。またキリスト教会関連施設に無料で宿泊する人もいた。

上記のように訪問就業制の以前は、経済的な要素が朝鮮族の不法滞在による長期滞在を促す大きな原因になっていたという点については、多くの事例を分析した先行研究でも共通した認識として触れている⁴⁴。

⁴⁴ 注6、前掲載論文

2-2-2. 訪問就業制以降の長期滞在

訪問就業制以降は在韓朝鮮族の構成も多様になり、入国目的や、意識にも変化が現れ、長期滞在の原因もそれぞれ多岐に渡るようになった。韓国で長年滞在した人や、家族や親戚の殆どが韓国に来ている場合は、最後には中国に戻るときは戻るにしても、韓国で生活するのがずっと楽だと感じる者も現れた。かつては韓国は出稼ぎを目的とした一時的な移住のための渡航先だったが、朝鮮族にとっては韓国はもはや仕事場つまり「経済活動の場」と同時に、家族と親戚が集まって暮らす「現在の生活場」であり、「定住を夢見る場所」になりつつある。実際調査でも「知り合いがみんな韓国に出てきているので、中国で会えなかった友人も韓国で会える場合が多い」(G氏談)とのことであり、中には同窓会や結婚式をわざわざ韓国で行う若い世帯の朝鮮族も増えているとのことである。一方で、高学歴の若い世代は親世代と違う考えを持っている人も少なくなかった。

在韓朝鮮族青年連合会⁴⁵会長G氏は次のように語った。

韓国で長く滞在してお金を稼ごうとした親世代には比べ、若い世代の朝鮮族は必ずしも韓国滞りに固執していない。私達の会員の95%は大卒で、ほとんどが自分の専攻を生かして韓国社会で事務職に従事している。もちろん韓国企業では新しい感覚も学べ、それに相当する給与も受け取ることができるが、現在の韓国の物価等を考えると大卒者の給与による生活は中国とそれほど変わりがなくなっている。若い世代は給与より、むしろ夢の実現可能性や充実感、将来性を見て住む場所を選ぶケースが多い。将来的には起業などビジネスを考えている会員もかなりいる。つまりライフチャンスを求めて生活しているのだ。中国であれ、韓国であれ、日本であれ、将来性や充実感を実現できるなら住む国はあまり関係はない。

G氏の話によると高学歴の朝鮮族は平等意識が強く、高いレベルの生活の質を求める。従って、韓国に来てお金を稼ぐよりは、新しいライフスタイルと可能性を発見することに期待を抱くとのことである。

2-2-3. 帰郷できない現実

韓国での生活が長くなればなるほど、帰郷する事は簡単ではなくなるとK氏は言う。

⁴⁵ 在韓朝鮮族青年連合会：2012年10月10日設立。会員数450人、平均年齢20代から30代。設立趣旨は韓国に在住する若層の朝鮮族の青年が増加しているにもかかわらず、これと言ったコミュニティもないことに注目して、情報交換の場、出会いの場、親睦を深める場として立ち上げた。会員の90%以上が大卒以上で、韓国社会の各分野で活躍している。趣味による各分科会もあって、定期的な会合を通じて、相互のネットワークを強めている。

出稼ぎ意識は来韓年数が短ければ短いほど強い。5年も経つとみんな韓国の生活に慣れてしまい、中国に帰っても生活できない。それでも、子どもや家族を残してきた人は両国の間を行き来する渡り鳥の生活をするしかない。

出稼ぎ者にとって、帰郷は都市での生活によって変化した自分達を再適応させることである。実際出稼ぎ者はいつかは故郷で落ち着いて暮らしたいと願いつつ、故郷の中国に帰っても、単純労働の経歴しかないので、ほとんどの場合、帰国後新たな職業展望とはつながらず、またもや韓国へ足を運ぶようになる。更に滞在期間が長くなればなるほど、韓国社会での生活基盤や、仕事探しの連絡網、人とのネットワークなど社会関係が形成されている。更に中国より整っている韓国の社会的秩序や自然環境にすでに慣れてしまっただけで、故郷に帰っても生活に慣れず、1ヶ月もすれば、韓国での生活が恋しくなるという人もかなりいるという。故郷との経済格差、故郷の深刻な失業率を考えると、できれば家族も韓国に呼び寄せ出稼ぎをさせたいと願っている人も多くなっている。

以下はA氏の談である。

私達にとって、延辺は療養する場所である。韓国で骨が砕けるほど熱心に働いて、しばらく中国に戻って体を休ませ、リフレッシュしてきて、また韓国で頑張れる。辛いことも多かったが、中国に帰って出稼ぎの収入で買った広々としたマンションなどを見ると自分に誇りを感じる。政策も良くなって来たし、韓国についてあれこれ悪口を言ったりもするが、結局は朝鮮族は韓国に感謝すべきだ。みんな豊になったし、認識も先進的に変わったのではないか？母国でなければ誰が50万人という大勢の人達を抱えてこういうチャンスを与えてくれるのか？

一方で故郷に帰りたくても帰れない人も珍しくない。それは本国の家族との絆のあり方と密接な関係を持っている。C氏の話によると、韓国に入国してもその労働現場に定着できず低い学歴のため良い職場も見つからないものの、中国の親が死別あるいは離婚・再婚したことで故郷に居場所がなくなり、やむを得ず韓国での不安定な生活を続けている朝鮮族青年のケースもある。先のG氏の話に出てくるような大卒者の成功事例だけではないことを改めて確認する必要がある

2-3. 出稼ぎの恒常化

20年近くに及ぶ韓国での生活経験を経ても中国朝鮮族出稼ぎ労働者の大半は単身で滞在し、何年かの韓国での労働の後、中国に残した家族のもとに戻るケースである。これは外国人労働者の家族呼び寄せを韓国政府が厳しく制限していることにも

原因をもとめられようが、多くの朝鮮族は韓国への出稼ぎを2回、3回繰り返して行うリピーターが多い(鄭雅英、2008:94)。2007年の訪問就業制と2011年の訪問就業制の延長、更に2012年の在外同胞ビザの拡大実施は韓国への自由な行き来と法的な滞在、長期滞在の土台を作ったとも言える。

インタビューに応じた5人とも意識上では中国への強い帰国志向を持っていないながらも、「年取って、働くことが出来なくなったら」、「もう少しお金が貯まったら」と条件付の帰国志望であって、「今しばらくは帰る気はない。やっと政策が少しずつ良くなってきたのに」と答えた。

「5年韓国で奴隷として生活し、1年中国で皇帝のように過ごす」—これは2012年延辺で漢族のタクシー運転手が教えてくれた当時延辺で流行っていた言葉である。まさに、朝鮮族にとっての韓国と中国の持つ意味を圧縮して表現した言葉である。韓国は経済活動を行う場として、中国は永遠の家として、どちらにも定着できないまま、両国間を往復するトランスナショナルな生活へとつながる可能性は十分ある。ここに韓国政府の一連の受け入れ政策の緩和は更に彼らの滞在に拍車をかけている。自由な往来ができ、健康状態が悪化すると帰国して療養して、回復するとまた出稼ぎに出かけることが繰り返されている。彼・彼女らは中国での滞在期間を「金を使う時間」、「健康回復の時間」と表現している(イジンヨン・イヘギョン・キムヘンミ:2008)⁴⁶。入国時の費用がかからないこと、滞在期間中は自由に行き来できること、合法的に長期間滞在できるという面である程度出稼ぎ者に心理的な余裕を持たせ、彼らの出稼ぎに対する切実感や緊迫感は過去のほどではなくなっている。韓国での生活も、かつての最小限の生活から、給料は低くてもより人間らしい生活すること、少しは楽しみながら仕事をすることを志向する意識転換を引き起こし、その分韓国での滞在は更に長期化し、出稼ぎも生涯に渡って繰り返すスタイルに変わる可能性は十分ありうる。

2-4. 定住化する滞在

1990年代に漢方薬の商売から始まった在韓朝鮮族の韓国滞事も、現在では明らか

⁴⁶ イジンヨン・イヘギョン・キムヘンミ 「訪問就業制に対する実態、及び同胞満足度調査」 法務部、2008年。

に定着型に変わりつつある。それは彼らの韓国での滞在を続けるための様々な努力と最近の若い世代の流入からでも読み取れる。

繰り返しになるが、2007年から施行された訪問就業制度(H-2ビザ)は5年満期の規定と再入国までの1年という猶予期間が設けられており、また満55歳から60歳までの同胞は韓国で長期滞在ができなくなっていた。しかし、在外同胞ビザ(F-4ビザ)の拡大実施により、韓国滞在期間中国国家公認資格証さえ取れば自由な往来ができる在外同胞ビザの取得が可能になることを意味する。制約はあるが、在外同胞ビザの所持者は親戚や家族の招請も可能となる。

すでに述べたように在韓朝鮮族社会では資格取得ブームが急速に広がった。では、中国に戻った人たちはどうしているのだろうか。帰国後すぐ3ヶ月の短期ビザで再入国し、何回か延長しながら1年を過ごすケースがあると聞き、具体的にそれが可能であるかどうか、もし可能だとすれば韓国政府が家族再会を可能にするために設けた1年間という再入国までの猶予期間の意味がなくなるのではないかと質問してみた。

E氏によれば、実際に代行手続きなどの抜け道的方法があるようだ。専門職の資格がとれなかった場合、朝鮮族の間ではその方式が定番であるとのこと。また1年も待てない理由については、せっかく韓国で時間をかけて積み上げた仕事の連絡網や社会的関係が、半年も過ぎないうちにすぐ切れてしまうため、1年という空白期間は出稼ぎ者にとっては長い。中国に小さい子どもを残しているようなケースを除き、若い時にたくさん稼いだほうが良いという認識があるという。さらに政策が再び変わるかもしれないという不安もある。中国に子どもを残してきた場合、女性は特に頻繁に韓国と中国を行き来する生活をするのだそうである。

2-4-1. 若い世代の流入

韓国の調査の中で資格取得ブーム以外にももう一つ印象的だったのが、若い世代の流入である。今までの韓国政府の受入政策を見ると、常に年齢制限を設けていた。1992年の韓中国交樹立を前に、親族訪問資格を満60歳以上の者に限定し、その後、年齢制限は段階的に下げられ、1994年には満55歳以上、1999年には満50歳以上、2002年には満40歳以上、2003年には満30歳以上、2004年には制限年齢を満25歳以上にまで下げている。年齢制限を設けた理由の一つは中国にいる朝鮮族の若年層の現地での学業の放棄を防ぐことであり、もう一つの狙いは家族単位の移住を防ぎ、定住化

を事前に遮断するためであると考えられる。

定住化を判断する上で家族は欠かせない存在である。家族移民が許可された国家で民族集住地が独自の文化を形成すると政府に対して権利を主張するようになり、政府としては社会統合を行うための統治システムの整備の必要性が出てくる。それを事前に防止するために、一部の国では外国人労働者の流入と長期滞在を抑制しながら、家族の移住を許可しないことで民族集住地と相互ネットワークを通じた独自の文化形成の余地を未然に防止する(イ・ドンフン、キム・ナムウ、2009: 9-10⁴⁷)。朝鮮族の場合同じ民族ということもあって、そこまではしていないものの、家族連れはまだ許容範囲内ではなく、特に25歳以下は一部の例外を除き、韓国で長期滞在することができなくなっている。来韓朝鮮族に対する韓国政府の年齢制限政策は、まさにこうした観点から理解することが可能である。

にもかかわらず、2012年4月の在外同胞ビザの拡大実施以来、F-4ビザを取得した朝鮮族達が招請した2世の来往が急増しているのである。連合ニュースによると2世たちは3ヶ月間の短期ビザ(以下C-3ビザ)で入国し、そのままF-4ビザを取得するために専門学校に集まる。特にパソコン、美容、造園、料理などの専門学校は朝鮮族2世で賑わっているとのことである。2世達にとってはH-2ビザを経ないで直接F-4ビザの取れる良いチャンスとして認識されている。2012年1月から11月の間にC-3ビザの入国者数は193万2,634人で、同じ期間の2011年の120万6,662人比べて60.2%増えた。2012年11月末C-3ビザ滞在者数は115,876人で、1年前の同じ時期に比べ80.5%も増加していると述べている。美容学校に通っている50代の女性は「最近では若者まで加わって、競争が益々激しくなっている。みんな深く考えずにとりあえず在外同胞ビザを取得しておこうという考えが広がっている」と伝えた⁴⁸。

在韓青年連合会のG氏はこの現象について次のように語った。

今は専門大学(日本の短大相当—筆者注)の卒業生でさえあれば、若い人でも在外同胞ビザ(F-4ビザ)で韓国での生活ができる。専門学校に集まる彼らはおそらくかつて留守児童の経験を持ちながらそのまま成人した19歳から25歳の間の年齢層であると思う。現在の在韓朝鮮族社会で一番憂慮すべき存在でもある。中国で高校を卒業して、大学にいけず、

⁴⁷ 注32、前掲載論文

⁴⁸ 出自:連合ニュース「F-4取得朝鮮族同胞子女の来往急増」2013年1月3日ニュース、{ブログメディア http://blog.zoglo.net/board/read/m_shehui/141790/705/40、2013年9月3日検索}

本国では何もすることがない彼らを、出稼ぎに出ている親達が、頑張ってF-4を取って、やっと自分のもとに連れて来て、資格でも取らせて、将来食べていけるようにさせようと呼び寄せているのである。出稼ぎ1世代は今でも苦勞に耐えながら一生懸命に働いている。大卒で入ってきた人たちは韓国での明確な目的意識を持っている。唯一危険なのは盲目的に韓国に入って来て、親の稼いだお金に頼って生活する彼らである。資格をとっても必ず職に就くとも言えないし、たとえ資格が取れなくてもそのまま25歳まで待っていればH-2ビザの資格の対象者になるので、ひょっとしたら第2、第3の出稼ぎ世代に転落する恐れがある。

小さいときから中国で韓国の放送を身近で視聴し、周辺には韓国に関する話題があふれている環境の中で育てられて来た彼らが、韓国行きを全ての解決口として受け入れていて、親世代の前轍を踏もうとするのではないかという憂慮の声であった。

いずれにしても、定着を果たした一部の朝鮮族の間では、成人した子どもの留学や仕事による韓国への流入、もしくは短期ビザからF-4を取得するなどの手段を用いて、韓国で家族の再結合を果たしている。過去出稼ぎによって離れ離れになっていた家族が、長い歳月の道のりを経て成長した子どもとようやく韓国で再会を果たす。時間をかけた家族移住といえる。中には単に子どもを呼び寄せるために在外同胞ビザをとる人もいるようである。

もし移住労働者の定住化の区分を論じる上で、家族の同伴と移住先での独自の文化とネットワークの形成が判断基準になるとすれば、在韓朝鮮族の場合はこの20年間、ひそかに着実に定住化にむけて歩んできたともいえるだろう。

2-4-2. なかなか定住が決められない理由

出稼ぎ者において、慣れた職場や労働の熟練化は、出稼ぎではなく定住化の傾向をもたらすようになる。出稼ぎ者の増加も、かつての労働力不足から労働力過剰の時代へと変化を促し、出稼ぎ者は一度就業できたらそれを出来る限り維持するようになっている。すなわち頻繁に還流を繰り返すのではなく、制度などの環境が整えば、出稼ぎ先での滞在を長期化させ、従って家族を呼び寄せるということが一般化していく。また、意識的にはなかなか定住が決められず、選択の岐路であいまいな態度を取りながらも、実際は韓国で10年以上も滞在を続けている。その原因は本人の意思よりは韓国での先の生活がどうなるか予測できないことが大きい。

以下はK氏のインタビューからである。

多くの朝鮮族がなかなか自分の居場所が決められないのは、韓国内でまだそれを自分の

希望だけで決定できる立場に置かれてないからである。政策は今も変遷中であるし、今後その動きを見守りながら人生設計をするしかない。在韓朝鮮族の生活ももう‘温飽’から‘小康’時代に⁴⁹変換しているのでお金は十分持っている。お金がなくて、みんな中古の家財道具を買うのではない。ただ韓国における自分達の将来の可能性は今でも変化していて、なかなか予測できない状態である。稼いだお金で中国で高級マンションを購入していても、それは一つの補償心理、保険でもある。いざ韓国で何かがあるときは逃げる場所があるから、安心して韓国で苦勞しながら居られるし、我慢できる。先のことを予測して長いプランが立てないから、答えを待っているうちに子どもの教育も、韓国での滞在もいつの間にか、5年、10年が経っている。

しかし、この変化は人々が帰郷せず、永遠に韓国に永住することを意味するものではない。永住しない最大の理由は退職後の生活保障が出稼ぎ先になくからである。最後に戻る場所は依然として「伝統的」コミュニティーが与えられた土地である。「延辺は自分達の心の故郷であり、なくてはならない存在である。切っても切れない関係である」と朝鮮族達は述べている。2008年法務部が実施した「訪問就業制に対する実態及び同胞満足度調査」でも読み取れる。帰還と定住についての希望を聞く項目では、面接に応じた人たちは「韓国でお金を稼いで中国に家を購入し、将来的には中国で生活するのが第一の目標だ」と言いつつも、「韓国での生活に慣れてしまい、大変便利だから定着したい」という相反する希望を述べている。多くの朝鮮族が切に願っているのは中国朝鮮族としての身分やアイデンティティを維持しつつ、在日コリアンや在米コリアンのように合法的かつ自由に韓国を行き来して自由な経済活動を行うことである。

韓国での永住をしないもう一つの理由としては、韓国で生涯生活するには物価が高く、一生をかけて仕事をしなければならないことである。調査に応じた朝鮮族達も口を揃えて「韓国という国は資本主義だから、お金を稼げないことはイコール死に繋がることだ。年を取ったら動けなくなるので、一生続けて仕事を続けることは難しい。今のうちにたくさん稼いで、老後は故郷でゆっくり過ごしたい」と語る。出稼ぎ第1世代の将来的な中国への帰郷願望は、いずれ親の盛大の世話をしなければならなくなる子ども世代の将来設計にも影響を与える可能性がある⁵⁰。

⁴⁹ 中国政府が改革・開放以降、経済発展の次に来る消費水準を表す目標として大々的に掲げてきた語句である。その典型的な例が「温飽（最低限の生活）」「小康（ある程度の経済成長）」である。前者はまずまず十分な衣食水準、後者はある程度裕福であるとの意味である。

⁵⁰ E氏の娘で、現在日本で修士課程に在籍中のZ氏も「母に何回か会いに行ったが、韓国の労働は体力的にきついことが分かった。母が年を取れば私が面倒を見なければならぬので、出来れば一

以上のように、朝鮮族の韓国生活への認識は可能な限り長期的に韓国で働き暮らすことを望む一方で、老後あるいは緊急避難を要する場合に中国へ帰郷することも想定している。現実性の如何はともかくとしても、現在の朝鮮族の出稼ぎの形態をもっとも良く説明できるパターンでもある。

2-5. 副業としての短期型出稼ぎ

訪問就業制の実施以降は比較的自由な出入国が可能になったため、季節労働をする朝鮮族が増加しているようだ。出稼ぎ者D氏の話によると、普段は幼い子どもと中国で生活している妻が夏休みにだけ夫のいる韓国に来て建設現場の雑業の手伝いをするケース、中国で教師をしながら学校の長期休暇を利用して韓国国籍を取得し食堂を経営している妹の手伝いに往復しているケースがあるという。

訪問就業制の場合は、出入国の制限がないので季節労働は自由にできるが、ビザの有効期限は5年間と定められている。一方観光ビザの場合、滞在期間は3ヶ月以内と決まっているが、回数に制限がないため仕事の確保さえできれば何回でも入国できるという利点がある。航空券などの経費を除いても2か月分の給料(約20万円)は利益として残るので、現実的な方法である。前もって韓国の親戚や有料の職業紹介所を通じて働き口を探しておき、韓国に到着した次の日から働くという。年に2回ほど韓国で働けば国内の収入より多いので、ここ数年はこの方法で出国労働をする人も増えているとのことである。男性の場合は仕事の確保が難しいのに比べ女性は有利であり、普通は中国に仕事場のある人や、子どもや親の面倒のため長期間家から離れられない人、あるいは訪問就業ビザを入手できなかった人などがこの手段を用いている。

第3節 出稼ぎの変容

3-1. 経済活動の変容

2006年朝鮮族の出稼ぎによる延辺州への送金は10億ドルに達したという。これは延辺州のGDPの40%に当たるもので、延辺州では‘出稼ぎ経済’や‘消費経済’と

番慣れている中国で自分の夢を実現してくれる男性と結婚して、家の近いところで母の面倒をみたい。母にはお店を構えさせたい」と出稼ぎと家族の将来像についての考えを明かしてくれた。

いう表現がよく使われる。更に1998年から2007年までの10年間、出稼ぎ労働者たちが延辺に送金した金額は45億ドルであり、延辺の財政収入をはるかに超えることがわかった。これは海外に進出した出稼ぎ労働者が銀行を通じて送金した数字であり、人伝てに送る金額を含めると実際に延辺に流入した金額は、これよりもはるかに多いものと専門家たちは分析している。海外出稼ぎ収入は延辺の経済環境を改変し、市民の生活の質を大きく高めた。資本を蓄積した人々が優先的に家を買うなど、家屋に対する投資で不動産景気が大きく高まり、これはその他の産業の発展を導いた⁵¹。

また、2010年3月29日付吉林新聞は「朝鮮族、韓国からの中国送金を増やす」というタイトルで、中国への送金を急ぐ朝鮮族の様子を伝えた。人民元切り上げが予想されたことと、韓国ウォンの価値が相対的に高まったこと、しばらく上昇していた中国の住宅価格が一段弱まったことで、住宅購入のため大金を送る朝鮮族が増えた。韓国外換銀行によると、朝鮮族顧客の半分ほどは毎月送金することはせず、適切なレートになった時に一度に送る傾向があり、最近3000万～4000万ウォンの大金を送金する顧客も増えているという。朝鮮族の生活はもはや地域経済だけでなく、韓国の経済状況及び為替レートの変動とも緊密に連動するようになった。しかし、延辺州商務局の調査によると、出稼ぎ労働者のうち帰国後創業した人は15%に過ぎないと言う(張:2010⁵²)。この「出稼ぎ経済」により韓国の朝鮮族密集地域での「両替所」などの新職種も現れている

しかし、近年に入り、こうした「出稼ぎ経済」にも変化が現れ始めている。出稼ぎ者の韓国での生活が長引くにつれ、生活パターンが通常の家庭生活に近づき、住居費や各種消費も韓国の生活レベルに合わせるようになるため、なかなかまとまったお金が稼げなくなってきた。また韓国経済の低迷も朝鮮族の収入に影響を与えている。2008年世界金融危機の影響で韓国は不況に陥り、その影響は朝鮮族の出稼ぎ労働者たちをも直撃したのである。韓国ウォンが下落し、為替レートが9.7%暴落、韓国ウォンは1ドル1373ウォンになった。これは過去10年間の最低値で、年初以来50%近く下落した数字だ。韓国の為替レートが大幅に下落したのは、外部の影響からだけではない。統計数字によれば、2008年韓国は国家短期債務だけでも1756億

⁵¹吉林新聞「海外出稼ぎ延辺経済を牽引する基幹産業の役目を十分に果たしている」
2008年7月29日

⁵² 注29、前掲載論文

ドルに達し、短期貸出と長期貸出が4000億ドルに達した。しかし韓国の外貨準備額は約2379億にとどまっている⁵³。それ以来現在に至るまで為替状況は大きな変動はない。過去、人民元1元につき韓国ウォン130ウォンだったときに比べれば、韓国のウォンの価値は60%ほど下落したことになる。出稼ぎ労働者達の平均月給は100万ウォンは以前なら人民元にしたら8000元ほどになったが、現在は5000元ほどにしかない。以前より労働に倍の時間を投資しなければならなくなったのである。稼いだお金を直ちに送金しないで、誰もが為替レートが少しでも上がることを期待して待っているが、いつ上がるか誰もわからない。さらに中国の物価は上昇する一方だ。

近年、一部の朝鮮族団体によって韓国社会で独自の仮称「信用協同組合」を立ち上げようとする動きがある。「在韓朝鮮族連合会」は2006年連合会内に「信用互助部」という組織をつくった。これは会員同士で経済的に余裕のある人がお金を預け、必要な会員に貸出するシステムである。貸出利息は2%で、基金造成のため、お金を預けた会員には1.5%の利息を支給し、残り0.5%は連合会が運営基金としてもらう形を取っている。すでに10億ウォンの基金が集まり、今年は30億ウォンを目標としているという、連合会長U氏は韓国のメディアで「韓国社会で自分の位置を固めるためには経済的な基盤なしでは生きていけない。日本政府が在日同胞にむやみな扱いが出来ないのは銀行を作り、経済的な強さを基盤にしたからである。韓国で朝鮮族は困ってもお金を借りるところがない。私達自身でお互いを助けなければ。朝鮮族は韓国で生活するのが目的ではない。自由な往来ができることを望んでいる。自由な行き来ができてからこそ、離れてきた中国の故郷も守ることができる」と語っている⁵⁴。

3-1-1. 職業の変化

経済活動のもう一つの変化として職業の変化を取り上げることができる。2008年からの在外同胞ビザの段階的实施により、実に多様な職層が現れるようになった。その前までは3D業種などの単純労務が殆どであったが、今は政策の影響もあり美容師、運転代行、飲食店の経営者、宅配会社、家具運搬、販売員など多様な職種へと広がっている。特に2世、3世の高学歴による主流社会の進出も目立ち、まだ数は少

⁵³朝鮮族ネット「韓国不況の中、労務者たち帰国の兆し」2008年11月18日

⁵⁴出自: <http://www.tongilnews.com/news/articleView.html?idxno=975592013>年8月12日検索

ないが、大学教授、弁護士、大手企業のサラリーマン、通訳ガイド、公務員、新聞社、芸能などの分野での活躍も著しく、「朝鮮族3世のソウル物語」など彼らが出版した本も注目を浴びている。55歳以上の朝鮮族の中には自由に往来できる立場を活用して、かつて韓国の華僑達が担っていた中国大連や青島と韓国の仁川港の間で食料品などの荷物を担いで行き来する「担ぎ屋」が出現したりしている。職業に対する認識も、不法滞在時期は仕事さえあれば条件を問わずに駆けつけたが、今は寮提供や、昼食無料提供、週1回は必ず休日をもらう等、職場の環境を重んじるように変わっている。仕事探しも、前職業紹介所に10%の斡旋料を支払って探すのが多数であったが、今はインターネットや親戚、知人等の個人のネットワーク、朝鮮族社会のネットワークに頼ることが多い。それは韓国での滞在期間が長くなればなるほど、在韓社会関係資本がある程度蓄積され、そうした独自のネットワーク資源を利用する生活が窺える。

3-2. 在韓朝鮮族の階層分化

一般に、外国人労働者は、送り出し国での職業や社会的地位に係わりなく、受け入れ国では非熟練あるいは半熟練労働者として下層労働市場に参入する(田巻、2005:16⁵⁵)。朝鮮族も例外ではなく、2008年までは制度上の制約もあり、韓国で働く人の中には、元中国での教師でも、大学を卒業した人も、韓国では出稼ぎ者に過ぎなかった。十数年間韓国社会の底辺で下層労働者としてのイメージが固着されて、朝鮮族の差別問題など韓国社会との摩擦も少なくなかった。これについては朴光星教授(当時ソウル大学研究員)は2006年のKBSラジオインタビューでも「韓国での朝鮮族に対するイメージはあまりにも出稼ぎ労働者に焦点が集中されていて、朝鮮族に対する全面的な理解が不足しているのが問題である」と指摘している。長い間、韓国国内での朝鮮族の社会的な地位が底辺のまま変わらなかった原因については、近年韓国国内で盛んに行われている議論を通じて理解することができる。

朝鮮族の社会主流化をめぐる議論は2008年以降在外同胞ビザの漸進的な実施を契機に活発に行われてきた。韓国社会での中国朝鮮族の主流社会との共生を模索するために2010年4月に開催された「アジア地域対案交流会」と「移住女性フォーラム」で、

⁵⁵ 注22、前掲載論文

ムン・ミン氏は「在韓朝鮮族80%を占める訪問就業制ビザは零細な事業場の3D業種で、人手が足りない、国内人の仕事場の蚕食という世論のなか、限定された単純労務にしか従事できず、専門職への進出は閉ざされている現実である」と指摘している。

韓国社会で朝鮮族社会の最初の階層分化は「出稼ぎ者1世代がお金を稼いで子どもの身分上昇のために重要な経済的な資源を提供することによる、親の下層化と子どもの留学による身分上昇⁵⁶」から始まったとも言える。こうした状況は2008年に入り、在外同胞ビザの漸進的な適用実施によって徐々に変わり始めた。現在は在韓朝鮮族社会にも若い年齢層の流入や、専門職の出現で多様な階層が出ているが、出稼ぎ者の身分上昇はそのチャンスが限られている。まずは、子どもを通じての身分上昇の実現である。稼いだお金で子どもを韓国に留学させ、卒業後韓国で就職することによっての身分上昇である。インタビューに応じてくれたP教授もこのケースである。

2006年、2007年当時は韓国の大学を留学生として卒業しても、韓国で就職できる環境ではなかった。私の場合は在外同胞ビザが適用された時期なので、ソウル大博士卒業後、自分の希望通り韓国の大学に就職することができた。時期的にも合っていたし、運も良かった。現在は多くの朝鮮族の留学生達が親の出稼ぎのおかげで経済的な支援を受けて留学することができ、卒業後は韓国の主流社会に進出し、活躍することもできるようになっている。親は韓国で継続的に出稼ぎの仕事をしながら、子どもは韓国の会社で仕事しているパターンも多い。

次に、自営業を通じての社会的地位上昇である。ソウル市九老区加里峰洞(ガリボンドン)地域は10年前から朝鮮族を対象とする朝鮮族食堂がずらりと密集している。単にガリボンドンだけでも食堂が130店舗、カラオケ30ヶ所、食料店は10店舗あるということである。ガリボンドンの朝鮮族冷麺屋の女将さんは「全ての自営業の人が成功したのではないが、昔の3Dの仕事に比べれば、自分の店だし、収入も良いし、何よりも夢が持てて良い。出稼ぎの日雇い仕事から抜け出すためには相当な覚悟がない限り、成功を手握る人は難しい」と語った。

三つ目に、韓国人との国際結婚を通じての社会的地位上昇である。E氏は日本留学中の1人娘を持っているが、最近結婚適齢期の娘の結婚相手のことが気になっている。娘本人の意思はともあれ、E氏は娘と韓国人との国際結婚が最も望ましいと感じている。韓国人の婿は礼儀正しく義理の親にも優しいだけでなく、何よりも韓国で

⁵⁶ 出自:同上フォーラム、2010年4月 発表者: イェードングン

頼りになってくれるので親としても期待するのだという。国際結婚を通じて身分上昇を夢見erことは若い世代、特に女性出稼ぎ者により多く見られる。昨日まで同じ工場で仕事していた同僚が、突然 工場長と結婚して「サモニム（奥様）」と呼ばなければならなくなったという憧れの混ざった風聞は、在韓朝鮮族社会では良く耳にすることであるようだ

四つ目に、在外同胞ビザの拡大実施による専門職種の登場である。職業の変化と同じであるが、2008年から徐々に高学歴や専門職を中心に在外同胞ビザが発給されるようになり、2012年の在外同胞ビザの拡大実施によって、訪問就業ビザでも韓国国内情報処理、美容、洗濯、ボイラー、溶接、皮膚管理、料理、自動車整備、金属扉などの383分野で公認技能士以上の国家技術資格を取得した者は、在外同胞ビザに変更することができるようになった。こうした社会状況の変化により、近い将来に在韓朝鮮族は更に複雑で多様な階層に細分化されていくことは確実である。

3-3. 生活の変容

出稼ぎ者の送金による「出稼ぎ経済」は朝鮮族の従来の生活様式にも変化をもたらしている。送り出し側の中国では農村部から都市部への人口移動を引き起こし、更なる人口空洞化、学校の統廃合につながった。他方、韓国にいる出稼ぎ者は受入政策の緩和により心理的に余裕ができ、出稼ぎも短期戦略から長期戦略へと変わりつつある。韓国での生活も最小限の生活から、多少稼ぎは落ちても、より人間らしい生活を求めるようになり、楽しみながら生きて行きたいという意識上の転換が現れている。

住居環境でも変化がみられる。不法滞在時は可能なかぎり住居に関わる支出を最大限抑えるため仕事場の住み込みを望むことが多く、あるいは地下部屋や狭苦しい小部屋、長屋などが選択の主流だったが、家族の合流とプライベートの時間重視が進んだことから家賃が高くても、アパートやマンション式の住居を好むようになっていく。ソウル市内における朝鮮族のコミュニティータウンも1990年代の九老区加里峰洞(ガリボンドン)から、2000年代の永登浦区の大林洞(デュリムドン)、2004年からの広津区紫陽洞(ザヤンドン)へと変遷して行く。各タウンは滞在期間と経済的な余裕と正比例するとも言える。その特徴をみると、加里峰洞は韓国の旧工場密集地として昔も今も朝鮮族の第1定着地として賑わっている。狭くて安い部屋が多いが、こ

ここで商売をしてお金を稼いだのち居住地として条件の良い大林洞に移住すると、来たばかりの朝鮮族の出稼ぎ者が加里峰洞の空席を埋める。大林洞はソウル地下鉄2号線と7号線の交差点であり、交通が便利である。オフィスビルや主要放送局から近いことから家賃は加里峰洞の10倍から20倍も高い。広津区紫陽洞は建国大学など大学街と近いことから留学生や高学歴の若い世代の居住が目立ち、江南区⁵⁷に通勤する朝鮮族のサラリーマンのベットタウンとして、生活レベルも高い。また彼らが呼び寄せた別のところに住んでいた出稼ぎ1世代の合流によって、朝鮮族の食堂街などの商圈も形成され、親世代が若い世代を支えている形である⁵⁸。

休日の過ごし方としては、来韓当初は「何もしない」「買い物に行ったりする」という割合が比較的高くなっているのに対して、滞在期間が長くなるに従って「外食に行く」「知り合いに会いに行く」「親族との会合に行く」「会員になっている親睦会へ行く」という答えが多く出ている。日々の過ごし方をみると滞在期間がある程度長くなっている場合、仕事以外にも自分のための時間を持つことが増えている。

第4節 家族生活と子どもの教育

家族の合流は異国での寂しさを紛らし、滞在継続に重要な機能を果たすとも言える。2002年以前の不法滞在が主だった時期には出稼ぎ者が単身で韓国に移動するケースが多かった。当時親族を招請することは、韓国人と国際結婚した子どもが父母や限られた条件のもとで親族を招請することが唯一可能な手段だった。しかし、韓国政府は更に朝鮮族に対する入国門戸を開放したことで、家族が揃って出稼ぎ移住をする様相が見られる。

4-1. 家族生活

被面接者6人に家族との生活についても聞いた。彼らの話をそのまま引用することにする。

⁵⁷ ソウルの高級住宅街である。

⁵⁸ この部分はソウルでの1回目でのインタビューの内容をまとめたものである。

A氏の話

40代から韓国への出入りをずっと繰り返しているが、まだ体力があるのでもうしばらくは韓国で生活する予定である。最初に韓国に来たのは1995年頃。たまたま故郷に歴史探訪に来ていた韓国人中学教師と縁ができ、その先生の招請で、兄と一緒に約3年間その先生の農場で住み込み生活していたのが最初の韓国との出会いである。朝鮮族の中では先駆者グループに属する。その後のことはまさに韓国の受け入れ政策との戦いであって、不法滞在への取締りが最も厳しかった。1990年代の後半には再度入国するために、密入国の地下船倉にまでもぐって渡航し、死にそうな経験までしてきた。現在は不法滞在への圧迫もなく、長年韓国で築き上げた人脈と建設現場の経験から中韓問わずたくさんの友達ができ、大変楽に生活している。その間、稼いだお金で中国延辺の都市地域に立派なマンション一棟を買い、繁華街には門市房(商店街の店舗)も2店舗持っていて、毎月の賃料だけでもかなりの収入を得ている。家族は妻と娘一人であるが、妻も自分と一緒に韓国で出稼ぎに出たり、時には交代で出てきたりしながら、現在は韓国で一緒に暮している。子どもはおらず、一人娘は実は養女であるが、小学校時代からずっと私の姉の家に預かってもらい、送金する形で育てていた。養女は勉強が苦手なので、大金を使い住み込みで教える非正規的な私立塾のようなところにも預けたことがある。今まで一人で育ててくれた娘には大変申し訳ない。現在は延吉に小さなマンションを買い与え、娘も小さな会社で事務をやっていて、何とか食べていけそうだ。娘が望めば私達と一緒に韓国で生活してもいいと思う。本国にある自分の新築のマンションには住んだ期間が合わせて1年足らずだ。

B氏の話

家族の事はあまり話したくない。ただこの前自分の老後のことが気になり、故郷に帰って知人を通じ大金を使って老後の年金がもらえるように手続きをして来た。これで安心して韓国で仕事できる。

C氏の話

両親とも出稼ぎ第1世代で、そのおかげで兄は日本留学ができ現在は日本に定住している。両親が出稼ぎに行った時は兄と二人で両親の送金で暮していた。当時はまだ今のように情報通信が発達していなかったし、自由な行き来が出来なかった時期

なので、親とは週1回の国際電話で近況などを話していた。兄は頑張り屋で勉強もでき、大学を経て日本に留学まで行ったが、自分は勉強が進まず気持ちも落ち着かなかったのが高卒で終わった。母には電話でいつも怒られていやだった。自分も結婚して家族を持ったが、やっと親心が分かってきた。子どもがまだ小さく、妻は子どもの面倒をみている。実家には毎日電話を掛けているし、カカオトーク⁵⁹で妻とも子どもの養育や家のことについて相談するので、寂しい時はあるが、不便は感じない。ただ自分が送金しないと妻と子どもは食べていけないので、今現在は韓国で頑張るしかない。兄がしっかりしているので、親には兄さえいれば十分だと感じている。兄は天津市にマンションを購入し、中国にいる父に毎月定期的に生活費を送金している。自分は幸い兄とも仲が良く、スマートフォンでしょっちゅう通話したりする。兄は常に父のことや、私のことを気にかけてくれているし、定期的に子どもを連れて父のところに里帰りもするが、自分はだめだ。でも親に心配はかけたくないから妻を通じて定期的に連絡は取っている。

D氏の話

夫婦とも出稼ぎに来ていたが、夫は病気で現在丹東市の娘の家に孫の面倒を見ながら一緒に住んでいる。夫婦が稼いだお金を元に息子は丹東市でカラオケや北朝鮮との貿易でお金を儲けたが、どこからバランスが崩れたかは分からないが、麻薬をめぐるトラブルで現在は監獄にいる。中国では麻薬犯罪に対しては厳しいので、最初は死刑を下されたが、何とかコネとお金を使って無期懲役になった。何年も会っていない。幸い娘夫婦が開いた朝鮮族食堂が毎日繁盛で、建物も建てたし、お金には不自由がなく、家族からも早く帰国してほしいといわれているが、冷たい牢にいる息子のことを考えると歯を食いしばって仕事をするしかない。今現在自分ができることは韓国で熱心に骨が砕けるほど仕事をし、お金をもっと稼いで息子を釈放できるようにするしかない。今平気でこういう話をしているが、心の中は焦れ込んで炭になっている。今は涙も出ない。夫が長男なので延辺には義父がいる間はまだ生活拠点を今の丹東市に移さず、夫婦が交代で出稼ぎに出かけながら義父の面倒をみて

⁵⁹ カカオトークは、スマートフォンで世界中の利用者と無料メール・無料電話を楽しむ、コミュニケーションアプリである。韓国のカカオコーポレーションが開発。リアルタイムのテキストの送受信のほか、写真や動画のやり取りも可能。VoIP技術を用いた無料の音声通話サービスもある

いた。今は家族の事情も良くないし、故郷の人に現在の事情が知られるのも恥ずかしいのでめったに帰らない。ただ家と親戚はみんな延辺にいたので、年に1回は帰省することにはしている。

E氏の話

現在の夫が先に出稼ぎに来て滞在期間も長くなる。若い娘もいたし、来るルートもなかったのですが、自分は他の人に比べたら韓国への移動が遅いほうだ。今は娘も大人になったし、訪問就業制の抽選に当たり韓国へ来ることになった。あまり出稼ぎについての願望が強くはなかったが、現在は韓国で夫と一緒に暮らしていて、お金も中国より稼げるので満足している。韓国での仕事は、出来れば夫婦が離れず同じ地域で働けるようしている。今年（在留期間が）5年満期なので、しばらく瀋陽に帰って空いている家も顧み、しばらくは体の療養をして、また出て来たいと考える。

4-2. 子どもの教育について

インタビューに応じてくれた出稼ぎ者たちは一様に「子どもの教育にきりが無い。大学まで行かせたら、留学まで行かせたいし、結婚すれば男の子の場合は家まで買ってやりたいのが朝鮮族ならではの親の気持ちだ」と言ってくれた。

時代が変わり、出稼ぎで価値観は変わっても、高学歴への志向は依然として強い。子どもが勉強が出来なければ、その代り子どもが食べていけるようにするために親として更に責任感を感じる。親は何があっても子どものことを最優先にし、自分自身のことを犠牲にするのは昔も今も変わらない。

しかし、このような目的の変化は更なる長期滞在へとつながる。多くの親は滞在期間が長期化するにつれて、側で愛情を注ぐことが出来ない代償として経済力で子どもに不自由がないようにしてやらねばと強く責任感を感じている。

4-2-1. 子どもの教育への考え－親へのインタビューから－

在韓朝鮮族の就労、生活、意識とも、この20年間大きい変化が見られた。20年前に留守児童生徒だった子ども達も成人している。親達は子どもの教育をどう眺めているか、そのためにどのような戦略をとっているのか、インタビューを通じてその声を聞いてみた。内容は主に「子どもの教育において何を一番優先しているか、子

どもをめぐり悩みは何か、子どもとの同伴について、子どもへの期待と進路」という枠内で、自由に答えてもらった。

まず、離れている子どものために普段最も心がけていることは何かという質問に、C氏は以下のように、電話連絡をこまめにして、年に1回は帰れるよう努力してきたと答えた。

最近ではスマートフォンがあって助かる。お金もかからないし、すぐ連絡もできるし、写真を撮ってファイルで送れるから、お互いにより身近に感じることができる。ただ仕事中の電話はまずいこともあり、出られない時もある。夜は残業があるので、子どもと時間的リズムが合わず、連絡が滞るときはある。子どもが中学生になれば、他の人のように夏休み等を利用して韓国に来てもらいたい。私ばかり故郷に行くより息子にもここに来てもらい、視野を広げ、他の韓国人の家庭のように手をつないでテーマパークなどに連れて行きたい。

制度的に子どもを連れて行くことが可能になったが、子ども同伴で韓国に来ることは考えたかと聞いたところ、D氏は多少高揚した口調で次のとおりに答えてくれた。

それは連れて来るとは思わない。1人ならどんなに苦勞してもなんとかできるが、子どもがいると収入に比べ消費が増え、貯蓄ができない。子どもにとっても、いきなり韓国に来て学校の勉強にもついていけないと思う。学年の問題もある。仕事で忙しくて子どもの面倒が見られないと思う。日雇い仕事や、短期の仕事が多いので、転々と不安定な仕事をしている親がどうやって子どもの面倒が見られるのか。特に私の場合は他人の家の住み込み仕事なのでなおさら難しい。私達の世代ではそれは無理。子ども世代ならそれは可能かもしれないが。

出稼ぎ先で親として最も悩む問題について聞いたところ順番は違うが、4人が「生活、健康、勉強」と答えてくれた。子どもに対する期待と進路について、E氏は次のように語る。

娘とは小さいときからずっと離れて生活していて、娘のことを考えるといつも胸が痛い。今は立派に成長して、日本で留学しているが、いくら時代が変わっても勉強ができれば、自力で食べてはいけるので勉強は大事だと思う。正直もう勉強はほどほどにして、良い男性と結婚して幸せに暮らしてほしい。でも勉強が出来るということほどうれしいことはない。親としても誇りに思う。韓国での生活が苦勞とは一度も思ったことがない。親としては、娘の結婚問題が心配だ。出来れば韓国人か朝鮮族と結婚してほしい。

出稼ぎの経験から子どもの将来と教育方針に変化があったかを聞いて見たところ、おおよそ次のような答えが返ってきた。①韓国に来て中国語と英語の習得の必要性和重要性が分かってきた。②今になって考えると漢族学校に通わせても良かった。

③勉強が出来なくてもIT等専門技術さえ身につければ食べてはいける。④時代がいくら変わっても勉強は大事である。食べては行けても生活の質が変わってくる。親世代のような形ではなく、より人生を楽しみながら生きてほしい。⑤親達が韓国へ来て、お金ばかりでなく、いろいろな面で刺激を受け目覚めて考えが変わったのと同じく、子どもにもたくさん経験して視野を広げてほしい。

4-2-2. 逆帰省ラッシュ

出稼ぎ者は一度職につくと、なかなか長期休暇が取れないことから、最近は冬休みと夏休みを利用して子どもを親元へ呼び寄せることも増えている。旧正月になると以前は親が中国へ移動したが、最近は中国にいる子どもが親元へ訪ねる「逆帰省ラッシュ」も増えつつある。旧正月のチャーター機は毎週土日に出発するが、参加する朝鮮族の青少年は毎回約40人に上るとのことである。理由としては経済的な要素がまずあげられる。出稼ぎ者は中国人民元の価値が高くなる一方、韓国ウォンの価値が落ち、韓国の物価が相対的に安いと認識しており、特に両親が韓国にいる場合は子ども1人が移動したほうが当然経費の節約につながるのである。もう一つの理由は子どもに韓国の先進的なところを体験させたいと親のいう気持ちがあるからである。それに、韓国政府が朝鮮族の子ども達に対して、ビザ発給条件を大幅に緩和し、休み期間中に特別に30日間滞在可能な団体観光を許可していることも大きく作用している⁶⁰。休みを控えて、韓国観光を申請する朝鮮族学生が爆発的に増えたというが、子どもは親と再会できるだけでなく、親の働く現場を直接見ることで親の苦労を知り、さらに勉強に励むことも期待される。ただし、この機会は全ての子どもに与えられるわけではない。

本章のまとめ

本章は韓国における出稼ぎの変容について論じた。そのために出稼ぎの形態の変化、長期滞在の現状を調べその原因を追究した。更に長期滞在によって彼らの韓国での生活はどのように変わっているかについて、そしてそれはまた家族生活と子どもの教育にどのように反映されているかを検証しようと努めた。彼等の韓国での生

⁶⁰ 連合ニュース「旧正月過ぎしに韓国行ー新たな風習」 2010年1月26日

活形態は不法滞在による中長期滞在から、韓国へ出入国を繰り返しながらの長期滞在、そして家族再結合を伴う定住化へと少しずつ進行している。

まず、出稼ぎの形態である。依然として出国と帰国を繰り返す「還流型」出稼ぎが目立つものの、家族の呼び寄せと再結合による定住化傾向も見せている。数は少ないが、副業としての季節型出稼ぎも現れている。

そこにはできれば長く韓国に滞在するための、彼らの様々な努力から読み取ることができる。具体的には2012年から訪問就業ビザ所持者にも適応された在外同胞ビザの取得のために、専門職種資格証取得ブームが挙げられる。しかし、一方では専門学校での詐欺や、盲目的な資格取得ブームによって、単純労務に戻れなくなり却って仕事場が見つからない弊害も生じる。また、長期滞在の原因は受入政策とも密接な関係があるが、不法滞在が主であった時代は、多額の借金をして韓国へ出稼ぎに行くのが一般的であり、借金返済のために多くの労働時間を要し、滞在の長期化を招いていた。しかし、滞在が合法化に転じた2007年以降は、韓国が「経済的な活動の場」から、家族と親戚が集まって暮らす「現在の生活場」あるいは「定住を夢見る場所」に変化したことを理由に、さらに滞在の長期化が進んだ。もう一つの原因として、やむをえない事情で帰りたくても帰れないため、韓国での生活が長引くこともある。この場合の多くは本国にいる家族との関係が要因となり、本国に自分の居場所が見つけられなくなったという心理状態を伴う。

「還流型」出稼ぎによって、生涯に渡って出稼ぎを続ける出稼ぎの恒常化が進んでいる。これは、老後になるまで韓国を「経済活動」の場として認識していることに現れる。仕事のつながり等を考えれば、出来れば空白期間を持たずに韓国で働きたいが、本国に家や家族、生活基盤が残っているために、行ったり来たりしながらの生活が続く。多くの人は出稼ぎで稼いだお金で本国に家を構えており、送り出し地域は永遠なる「心の故郷」として位置づけられている。韓国でお金を稼いで帰国し、また出稼ぎに出るまでは失業者として療養を取る時間であると彼らは表現している。これは送り出し地域に彼らを惹きつける産業や、インフラが構築されていないことも関連する。

定住化傾向については、もし本国に制約的な要因（家族、子供の教育など）がなければ、可能な限り帰国せず長く韓国で居続けたいという願望も見られる。特に子

子どもが成長した場合はこの傾向が強く表出する。せっかく韓国で築き上げた人脈や良い仕事とのつながりを失いたくないことが最大の理由である。被面接者の中には訪問就業制は朝鮮族の各自の立場を考慮しなかった画一的な政策だと批判する人もいた。留学や出稼ぎ、親による招請によって若い世代が韓国に流入し、韓国での家族団らんを叶えた場合は、韓国での定住化志向は益々強くなる。家族が揃って韓国にいる場合は、より安定した生活を願い、在外同胞ビザを取るための努力により力が入る傾向を見せている。

長期滞在や実際は定住に近い生活をしながらも、なかなか定住を決められない理由としては、「先が見えない」状況と置かれている面で共通している。定住できない最大の理由は、退職後の生活保障が出稼ぎ先にはないからである。滞在の不安定さをはじめ、仕事の状況、そして帰国への不安、生活の主要なつながりが韓国側に移りつつあるなどの複雑な要因が複合的に作用して、現在韓国における朝鮮族の出稼ぎ像は「生涯に渡り出稼ぎを続け、老後になったら帰国する」の一言で表現することができる。

次に、上記の一連の出稼ぎの形態の変化は彼らの韓国での生活にも変化を起している。経済活動では「出稼ぎ経済」から「韓国内での資金活用」、職業の変化が見られる。また、直接ではないが、韓国内でも地位向上や、階層分化も少しずつ現れ始めている。生活の変化では何よりも出稼ぎの目的がお金を稼ぐことから、その長期化に伴い、より人間らしくゆとりのある生活、余暇を楽しむ生活に変わりつつあると言える。これは受入政策の緩和による、彼らの認識の変化、価値観の変化にあると考える。

最後に家族との生活と子どもの教育についてであるが、被面接者全員が家族分散を経験しているにも関わらず、現代の発展した通信技術や交通を利用して家族との心の絆を強めていることが分かった。各自の家庭事情の中には、第三者から見れば問題とみなされる事情があるにも関わらず、今現在の状況に合わせて、各自の立場で前向きに生活して行く様子は印象的でもある。朝鮮族の出稼ぎの歴史は20年も経っており、ほとんどの人が送り出し側の地域に家を構えたり、子どもを留学させたり、初期の「故郷に錦を飾る」という夢は実現しているように見えた。

出稼ぎも1世代を経て2世代、3世代まで入ろうとしている。中には、親の前轍をすでに踏む若い出稼ぎ者もいたり、これから出稼ぎの道に進もうとする動きも見えてはいるが、いずれも親よりはより良い仕事に就く為に努力する様子が窺えた。出稼ぎ初期は「経済活動」の場と「生活の場」が分離するケースが多く見られたが、現在は家族揃って韓国に居住していることから、韓国が家族全員の「生活の場」として変わり始めていることも珍しくはない。また、不法滞在時期までは「家族は送り出し地域に残り、一部の人が出稼ぎに出る」パターンが多かったが、1世代の出稼ぎにより、それを土台に残りの家族も第三国に留学に行ったり、又は同じく出稼ぎに行ったり等、更なる分化を遂げ、家族分散も更に広域的な様相を見せるようになっていく。しかし、子どもがまだ小さかったり、高齢者の家族がいる場合は、安定した生活を求め、家族の構成員の一部は送り出し地域に残るパターンが続いている。

子どもの教育については、子どもの成長に伴い、出稼ぎの目標も変わっては来ているものの、当初の親として、経済的に子どもの教育と夢を実現するためのバックアップをしてあげなければならないという考えに変わりはなかった。出稼ぎをしながらも、通信技術を利用して、できる限り子どもとたくさんコミュニケーションを取るなどしながら物理的・心理的な距離を埋めようとしている。場合によっては必要な時期に帰国し子どもの側にいるなどして、限られた条件の中でも出稼ぎと子育てを並行しようとする親達の努力が見える。短期間ではあるが、逆に子どもを招いて親との絆を深めるケースもあった。子どもの教育についての認識では、時代は変わっても子どもの高学歴への志向は変わらないままである。ただ教育方針の面では、時代の流れに沿って中国語や、英語、IT技術の習得させるように努め、そして何よりも子どもにグローバル化に適応し視野を広げて、グローバル人材を目指してほしいという朝鮮族ならではの親の期待が見える。留学まで行かせるためには親の経済的な力が必要となるので、韓国での出稼ぎは必要不可欠だということである。

また韓国での生活形態の変化に留まらず、朝鮮族の移動圏が拡大する傾向も見受けられるのは重要な点である。家族のいずれかが韓国からさらに第3国まで進出した場合、彼らの生活は3つの国境を越えたものとならざるを得ない。親達の子どもへの教育に対する期待と教育方針（海外留学をさせる）から見れば、この現象は子ども達の海外進出をベースにして、更に拡大していくと予想できる。実際E氏の娘である

Z氏は今付き合っている彼氏を親に挨拶させるために、中国ではなく日本から出稼ぎ先の韓国まで行かせる予定であると言っている。世代を重ねるにつれてこの現象は益々多岐にわたり、激しくなると考える。なぜならばそれを支えるための経済的基盤と前世代の蓄積した人的関係によって、新たな国境を超えるネットワークが形成されるからである。

第4章 子どもの教育への影響 —延辺州龍井市での実態調査—

はじめに

20年間にわたる出稼ぎを経て、大半の朝鮮族は何らかの形で家族との分散を経験している。それは出稼ぎ先が海外であることと、国際的な移動者という条件の厳しさが、働き方、住まい方、家族関係の作り方に制約を及ぼし、彼らの自由度を狭めている。出稼ぎ者の家族の呼び寄せを韓国政府が厳しく制限していることにもその要因を見出すことができる。多くの朝鮮族は韓国での出稼ぎを繰り返し、家族の元へ戻ったりするパターンを続ける。

3章でも述べたように、韓国政府の朝鮮族受入政策の変遷に伴い、出稼ぎも変容を重ねて来ている。滞在の長期化や、出稼ぎの恒常化は更に進行しているとも言えるが、韓国政府の‘外国人労働者’から‘在外同胞’としての配慮に基づく政策方針への転換などによって、入国の門戸の段階的な開放と入国可能な年齢制限が次第に下げられて来た。それに合法的な滞在とわりと自由な行き来ができるということも、家族分散から来る様々な問題をある程度和らげることができたとも言えるだろう。

特に、出稼ぎ当初の夫婦の離婚による家族崩壊は2007年の訪問就業制の実施によって、目に見える減少を見せていた。連合ニュース⁶¹によると「改革開放以後、中国の離婚率が急増したのとは反対に延辺州の朝鮮族の離婚率は2006年から激減したと延辺TVが報道した。延辺TVは延吉市婚姻登記処の統計を引用、2004年と2005年には毎年2,400組の朝鮮族が離婚したが、2006年から2009年まで朝鮮族の離婚件数は年平均1,800件に過ぎないと伝えた。これは2004年、2005年に比べて25%急減したのである。延吉市は離婚率の減少の理由を韓国側の訪問就業制の施行から説明した。・・・延吉市婚姻登記処朴主任は‘韓国への渡航が難しかった時期には韓国人と偽装結婚するために、離婚する朝鮮族が多かったが、今はそうする必要がなくなり離婚率も下がった。’と語った。」である。恐らく報道でいう偽装結婚の減少よりは、3章の調査でも明らかになったように単身での出稼ぎから夫婦そろっての韓国行

⁶¹ 連合ニュース「韓国門戸開放に中朝鮮族離婚率激減」2010年11月17日(アクセス：2013年11月29日)

きが増えたため、夫婦別居による離婚が減ったのがもっと大きく作用したのではないかと考えられる。朴光星は「単身出稼ぎ者達が他国での寂しさを紛らわすために、出稼ぎ者同士の同居や、不倫等による夫婦離婚の増加が離婚につながり、家族解体まで行ってしまう」と指摘していた(朴光星、2002)⁶²。

しかし、朝鮮族の家族分散の中で20年経った今も変わらない現象が一つある。それは親子分離による留守児童の問題である。しかもその数は減らないまま今も送り出し地域の社会問題として残っている。朝鮮族の場合、出稼ぎとそれによる家族分散、家族の形態は変容を重ねて来たが、唯一変わらないのが残された子どもの教育の問題である。その原因は出稼ぎが持つ現地での不安定な生活から子どもを連れて行けないことと、出稼ぎの長期化と恒常化、そして、未成年者に対する韓国政府の受け入れ政策の事実上の不在によるものである⁶³。従って、現在の朝鮮族の家族分散は主に、出稼ぎ先にいる親と送り出し地域に残された子どもという形で現れているのが特徴である。

本章の問題意識は以下の点である。①出稼ぎは残された子どもの教育にどのような影響を与えていたのか。②出稼ぎの変容によって、留守児童をめぐる周辺環境はどのように変わって行ったのか。③残された子ども達はどのような戦略によって育てられているのか。④子ども達はどのような悩みと問題を抱えているのか。⑤物理的な距離がある中、家族の生活はどのように変化していき、どのようにして家族間の絆を維持しようとしているのか。これらの問いに向き合いながら朝鮮族の留守児童の現状を探り、明らかにすることで、20年経った今もその数が減らない留守児童の行方と家族のあり方を展望してみたいと考える。なお、本章では2012年8月と同年10月に中国延辺州龍井市で行った2回の調査のデータに基づいて議論を展開する。

第1節 人口減少と教育を取り巻く環境の変化

1-1. 人口減少

1980年代から始まった中国朝鮮族の出稼ぎブームは、龍井市でも例外ではなかった。農村から都市へ、国内から海外へへの出稼ぎにより、龍井市の人口はマイナス成

⁶² 注6、前掲載論文

⁶³ 2010年4月に入り、18歳未満の未成年者に対する訪問同居ビザを導入し始めた。

長を記録している。2000年末の統計資料では全市の人口は261,286人、2007年末には240,500人で、2012年の統計資料では188,000人となり、10年間の間、約7万人減少している。人口減少の原因は主に韓国や中国大都市への出稼ぎと行政区域の再編成、結婚適齢期の女性の流出にある。80年代末から農村地域の若い女性が大量に都市へ進出したのと国際結婚、外国への出稼ぎによる女性人口の流出で、1996年末、龍井市農村地域の結婚適齢期の独身男性と独身女性の割合は20対1と大きく偏り、B村の比率に至っては57対1にまで広がっている。出産率の低下、人口移動による学齢期の子どもへの減少はそのまま教育を取り巻く環境にも様々な影響を与えている。民族学校の減少、優秀教員の下海⁶⁴による大都市と外国への移動はまさに今の朝鮮族教育に大きな影響を与えている。

1-2. 教育環境の変化

1-2-1. 学校数、学生数の減少

1990年代の半ばから農村地域の小規模の朝鮮族学校は学生数の激減による廃校が相次いだ。また、国外に移動した父母は子ども達により良い教育機会を与えるために、都市地域の学校に転学させる。学校の廃校は教育機会を求めての更なる、都市への人口移動に至り、その結果、農村学校の学生数は急激に減り始めて、更なる廃校と合併の過程をもちたした。龍井市の教育局の資料によると、2005年の学生数は19,538人であったが、2007年には19,386人、2008年には15,099人、2009年には10,674人、2010年には9,472人、2011年には更に減って9,021人となっている【表4-1】。学生供給源の減少により、学校も統廃合したりして、現在龍井市の学校数は29校、(教師進修学校1校、高校2校、職業高校1校、中学校7校、小学校11校、小中9年一貫校5校、教学点2校)となっているが、学年と学級が足りなく、過渡期にある教学点2校を考えると、今後も更に減る見込みであるという。

⁶⁴ 元々は海に入るとの意味だが、1978年の改革開放時代に出来た新語で「元々役人や教師など専門的な職業を持った人が、市場経済の波に乗って、ビジネスの経済活動に携わることを指す。」

表4-1 龍井市年度別学生数推移統計 (人)

年 \ 校	高校	職業学校	中学校	小学校
2008年	3,043	376	4,742	6,938
2009年	2,337	843	2,801	4,693
2010年	1,864	626	2,413	4,569

*龍井市教育局統計資料により作成

1-2-2. 教師の流失と教師陣の不安定

市場経済の波と開放改革という時代的な背景は朝鮮族中小学校の教師、特に農村学校の教師の流失を招いている。農村の劣悪な環境、都市には比べ物にもならないほど少ない給料、先の見えない将来、これらは全て農村地域の教師の都市部への流入の原因となっている。また、出国ブームや外資企業、第3次産業の誘惑に耐えられず、教職を捨ててまで、経済的な富、もしくは個人の自己実現を迫及するために、教壇を去る教師の数も少なくない。第13期延辺州人民代表大会で提示された統計資料によると、2005年から2008年までの4年間の間、龍井市朝鮮族教師の流出は351人、補充はわずか15人である【表4-2】。

表4-2 龍井市朝鮮族教員流失統計数値

区 分	2005年	2006年	2007年	2008年
流失教員数	105人	75人	110人	61人
補充教員数	5人	4人	3人	3人

* 龍井市教育局統計資料により作成

特に看過できないのは流失教師の大多数が教育一線で中堅の役割を担っていた正規的な師範専門学校や師範大学の卒業生(流失教師の約54.3%)で、直接的に学校の教育環境と教育の質の低下などに影響を与えていると思われる点である。龍井市教育局キム・ミョンゾン局長の話によると毎年各大学で開催する人材招聘会に参加しているものの、龍井市まで来て先生になろうとする人員は少ない現実である。龍井は元々経済未発達地域で、外地に出かけた大学生達は故郷に戻ろうとしないし、外地の卒業生は尚更龍井まで来ようとするのでない。

龍井市の朝鮮族学校の教師の流出により、教師の年齢構成も若年層に偏っており、

全市35才以下の教師の割合は56%(龍井市教育局:2007)で、教師の「資質」が問題にされることが多いとのことである。予備教師グループの人材の確保困難は教員養成課程を卒業していなくとも所定の学歴を満たせば教員になれるということと関係して、教師の経験不足、心理的な不安定な要素等「教師の資質」、更には民族教育の「質」を制約させる要因となっている。教師の流失は給与待遇の低さや、朝鮮族学校の将来性から来るものが大きい。実際龍井市教師の給与は延辺州8県・市の中で中より下のレベルで、一部の優秀な教師達は社会的地位上昇を求めてより待遇の良い職業へ転職したり、沿海地域や韓国に出稼ぎに行ったりしている。これは民族教育の揺籃の地である龍井市の問題だけでなく、延辺ないし中国全体の朝鮮族社会の教育現場の普遍現象であるのにその深刻性がある。

1-2-3. 漢族学校の選択

農村地域の朝鮮族学校が学生数の不足で門を閉ざすようになり、朝鮮族学校へ通いたくても通えない子どもに加え、都市部でも漢族学校への進学を希望する朝鮮族の子どもが増加している。教師の流失による教育の質の低下も都市部の朝鮮族学生の漢族学校の選択を煽る要因の一つとして作用していた。2007年龍井市全市の漢族小学校に通う朝鮮族学生数は447人で、朝鮮族小学生数の7.24%を占め、中学生は490人(12%)である。ある学区内での漢族小学校における朝鮮族の比率は最高で26.9%、中学校は最高で19.7%のところもある。

漢族学校を選択する理由としては、まず中国の経済発展に伴い、国際社会での中国の役割が益々強まる中で、漢語の重要性が高くなったことにある。朝鮮族学校では上級の中国語の実力を身につけることが難しいという認識が広まり、外国語として英語よりは日本語を教える学校が多いことから漢族学校を選択するとのことである。二つ目は親の認識の変化による希望からである。1992年韓国と中国の修交によって、母国が北朝鮮から韓国へと変わり、韓国を経験し日々の小さな生活から社会全般への激しい変化を経験する。これは国民の問題以前に民族の問題であり、子どもの教育のアイデンティティについても深刻に考える要因となる。一部の親は韓国へ行って韓国での中国語教育熱や韓国での朝鮮族の地位、朝鮮語と韓国語の違いなどの認識から、どうせ教科課程も漢族の教科課程と同じであれば、朝鮮語を習っても将来性がないと考えるようになったという。

第2節 留守児童の問題発生

朝鮮族の出稼ぎによる人口移動が子どもの教育に与えた影響の中で、最も明白なのが、多くの留守児童の存在である。龍井市教育局の2010年の統計資料を見ると、全市留守児童児童の数は3,820人で、全体学生数の65.6%を占める。漢族学校に通う朝鮮族の数も考慮するとその比率は更に伸びる。

2-1. 留守児童の発生経緯

2-1-1. 中国の「留守児童」と日本の「留守家庭児童」

「留守児童」についての研究は、90年代に始まった。1994年、一張氏は『瞭望』の中で、初めて「留守児童」という言葉を使った。その言葉は、当時すでにあった「留守女子」、「留守男子」と「留守老人」というような言葉に倣って作られたものである。当時の「留守児童」とは、両親が留学や仕事で海外へ行き、故郷に残されて、祖父母に預けられた子どもを指す言葉であった(陳、2011:35⁶⁵)。2000年に入ってからこれまで、中国では出稼ぎ農民達が故郷に残してきた「留守児童」の問題が徐々にクローズアップされて行き、留守児童をめぐる生育環境に関する調査が報道され始めた。また学術界でも社会学や心理学、教育学などの分野に関連する論文が発表されるようになった。中でも人民日報のような中国全土に影響力のある党機関紙の報道は、世論形成に大きな影響を与える点で重要である。記事は留守児童の心理傾向に関し3つの点を指摘している。第一に、農村留守児童は父母の愛情を渴望しているということである。第二に、父母との交流の欠如が原因で留守児童の性格及び心理等に好ましくない変化が生じていることである。第三に、留守児童の思想及び道徳の状況に出稼ぎ両親が未だ注意を向けていないことである。このように、留守児童の問題がメディアで採り上げられるとき、実の親と離れて暮す子どもの心理的なマイナス面とそれに起因する不良行為に対する警鐘が鳴らされることが多いのである(登坂、2009 : 69⁶⁶)。

日本には、中国の「留守児童」と似た「留守家庭児童」(俗名:「鍵っ子」という言葉が

⁶⁵陳小君「中国農村における留守児童問題について」『家庭教育研究』16、筑波大学、2011、pp35-41

⁶⁶登坂 学「中国農村における‘留守児童’問題について」九州保健福祉大学研究紀要10、2009、pp67-77

ある。旧厚生省の1971年の「厚生白書」においては「留守家庭児童」という用語が用いられ、「その保護者が月間の大部分(3分の2以上)の日において児童が学校から帰宅した時から夕刻まで不在となっているのが常態となっている者」と定義されている。女性の就業が増えるとともに「鍵っ子」が増加し、その教育が問題視されて「児童教育の危機」とまで言われるようになった。帰宅後に大人の目が届かないことによる情操教育や社会教育の機会喪失、保護者の学校教育参加や対話の欠如による学校教育と家庭教育の乖離が指摘された。また子どもの帰宅時を狙った犯罪(鍵の盗難、窃盗、猥褻事件等)が発生する等安全上の問題も起こったのである。ここからできるだけ子どもを孤立させるべきでないとの認識の上に、学童保育や学校の施設の使用時間延長などが実施されて来た経緯がある。

中国の「留守児童」たちの境遇や背景は日本と大きく異なる。まず、親と離れて会えない期間が非常に長い点である。半年から1年、長い場合は数年にわたる。もちろん全くの1人ではなく祖父母や友人に引き取られ、監護・養育はうけている。しかしながら、実の親と長期間離れて暮すことによるさまざまな問題点が指摘されているのである。

2-1-2.朝鮮族の「留守児童」

朝鮮族の留守児童の現象は1980年代から現れ始めた。しかし、この時期の留守児童は特定の意味を持っていた。つまり、中国の改革開放後に出国留学や海外での仕事等により、親に子どもを預けるケースであり、筆者が高校に通っていた時も友達の姪がずっと祖父母の家で暮していたのを覚えている。これが多分朝鮮族社会での最初の形の「留守児童」である。

次は国際結婚などによる留守児童である。おそらく1990年代後半から始まったと予想されるが、特徴としては学齢期以前の留守児童が多かった。韓国籍をはじめ、外国籍の子どもと祖父母が暮らす「外国籍留守児童」の形である。この2つのケースの留守児童は今も存在すると思うが、正確な統計は難しく、おそらくその数は多くはないと推測される。ここまではまだ社会的な問題となっていなかった。理由は①児童の数が少ない上に、親の社会的地位や経済的優勢から社会のエリート層とも言える親が多くて、子どもを預ける上でも戦略的であり、行き来も自由であったからである。②留守児童のほとんどが市内に住んでおり、生活環境が恵まれていた。反って豊か過ぎで、甘やかされて、我儘な子どもが多い等の問題もあったが、それは許

容範囲内であり、周辺の家庭の憧れの対象にまでなっていたこともある。

「留守児童」が社会的問題となり始めたのは、1990年代後半からの出稼ぎによる残された子ども達で、親の不法滞在、偽装結婚による長期間の離散、学齢期の留守児童の増加である。その数は年々増えて膨大な児童群体を生み出した。

留守児童の発生は大きく二つの時期に分けられるが、受入政策の制約によって韓国での不法滞在がもっとも蔓延した2002年から2003年を境に前期と後期に区分できる。この時期、韓国への合法的な入国、合法的な就労ができなかった多くの朝鮮族達は「コリアンドリーム」を実現するためなら手段と方法を問わなかったとも言える。密入国、氏名と年齢等の戸籍改造と旅券の偽変造⁶⁷、短期ビザからの不法滞在、偽装結婚などの形で入国し、そのまま不法滞在者としての身分でお金が貯まるまで何年も滞在し続けた。予定がはっきりしない親の帰国、家庭の監護の不十分によって、心の置き場所を失った子ども達の心理問題、逸脱行為、青少年犯罪が最も深刻な社会的な問題として急浮上した時期である。

龍井市の教育関係者の話によると留守児童の問題のピークは2003年を峠に次第に落ち着いて来て、今も数の面では変わりはないが、送り先の行政の取り組みや社会の関心、受入政策の緩和により、まだまだ課題は多いものの、子ども達も親を恋しがってはいるが、普段の生活として受けいれて、だいぶ安定してきているとのことだ。以上のように、同じ「留守児童」と言っても、前期と後期では質的な違いがあり、出稼ぎの本格化により、「留守児童」も質的变化を見せてきたとも言える。

第3節 調査の概要

3-1. 調査地の特徴

龍井市は中国東北部にある吉林省延辺朝鮮族自治州の管轄下にあり、州府の延吉市からは車で20分の距離にある。東南は図們江(朝鮮名：豆満江)を隔てて、北朝鮮と向かい合っている。面積は2,581平方kmで、中朝国境線は143kmである。2009年の戸籍人口は18.3万人のうち朝鮮族の割合は約66.4%、中国で朝鮮族が一番多く集中して暮している町である。また‘リンゴ梨の郷’、‘松茸の郷’、‘米の郷’、‘黄牛

⁶⁷不法滞在者数の増加を憂慮し、韓国政府は1992年から年齢制限を設けた。1990年の60歳以上から2002年の40歳、2004年の25歳まで段階的に下げられた。その入国許容の枠内に当てはまろうとまたは、偽の親戚を作ろうと各種書類の偽装、変造が行われたのである。

の郷’ として知られている。主要産業は1980年代までは米やトウモロコシ、大豆、タバコ等の農産業と化学、機械などの産業だったが、今は大都市や外国への出稼ぎと民俗遺跡観光、製紙、小規模な商業が主な収入源となっている。2010年、市の一人当たりの平均収入は農村地域は3,626元、都市部は11,501元に達し、前年比各8%と11.5%の増加を見せている。注目すべき点は龍井市は延辺の文化教育の揺籃であり、中国朝鮮族文化の発祥地でもあることである。教育歴史が長く、旧満州への移住当初に設立された由緒ある小学校と中学校は約100年の歴史を誇る。龍井市教育局の幹部は今でも延辺民族教育の中核的な役割を果たしているという。2007年の時点で、学校数は29校(教師進修学校1校、高校2校、職業高校1校、中学校7校、小学校11校、小中9年一貫校5校、教学点⁶⁸2校)、在校学生総数は19,386人である。その内朝鮮族学生数は9,406人で、全体の48.52%、漢族学生数は9,980人で、全体の51.48%を占める。一言でまとめると龍井市は朝鮮族の人口という面的な面からも、教育的な面からも「朝鮮族の出稼ぎによる留守児童生徒の問題」を研究する上で、フィールドとしてある程度代表性を持つと判断し、調査地として決めた。

海外への出稼ぎブームとの関係の観点から龍井市の地域特性を探して見るには、まずその歴史的な背景から分析してみる。龍井市は19世紀70年代に朝鮮半島からの移住民達が始めて開墾し、定着した開拓地でもあって、長い間朝鮮半島の北の地域からの移住民がその後の延吉、汪清、琿春などの奥地の延辺各地へと移動する交通の要衝地でもあった。それ故に1949年中国政府の成立以前までは「間島」の中心地として、様々な歴史的な事件の舞台として、政治の裏根拠地としてその名を知られてきた。韓国や北朝鮮の有名な文学の中にもその名は多く挙げられている。「海蘭江」、「一松亭」⁶⁹、「龍井市地名起源井戸跡」、「瑞甸書塾」⁷⁰、「土地」⁷¹、「尹東柱詩人と龍井中学」⁷²等は今も韓国や北朝鮮の人の心の中の聖地として慕われている。

⁶⁸ 教学点：学生数の減少により学級数が足りない過渡期の学校

⁶⁹ 海蘭江と一松亭は1933年の韓国の有名な歌曲「先駆者」の中に登場する風景である。日本植民地時代、満州の野原を馬に乗って走り渡る開拓者の精神を謳歌している。

⁷⁰ 1906年に設立された韓国最初の民族教育機関

⁷¹ 韓国を代表する著名女流作家朴景利の大河小説である。1890年から1945年に渡る渦巻きの50年の朝鮮半島の近代歴史をある家庭の朝鮮半島から満州への移住の過程を通じて表現した。約25年かけて5部、16冊にわけて執筆した力作であり、何回もドラマ化されたこともある。主な舞台は龍井市である。

⁷² 3.1運動の時、独立闘士達の求心点となったところ。

また、日本との関わりも深く、「旧朝鮮統監府間島派出所」、「旧間島日本領事館」の所在地として植民地時代日本の延辺進出及び管轄の中心地となった。このような歴史的な背景を持つことから、龍井市に住んでいる人達は延辺の他地域より、普段から韓国、北朝鮮、及び日本との接触が頻繁で容易だった。地理的な優位性もあって、韓国への出稼ぎブームの前には、一時北朝鮮への出稼ぎ(というよりは貿易商売)が流行っていた。筆者の小さいときも周りに日本人の残留孤児や日本にルーツを持つ人と接することも珍しくなかった記憶がある。歴史的な背景とその遺跡を持つことで、いち早くから韓国及び日本からの観光客も訪れ、二つの国と接する機会も他の地域の人たちよりは多かったと思われる。特に1992年の韓中国交樹立以降から現在まで韓国人観光客が後を絶たない現実である。

このような地域特性は龍井市の人達をより早く韓国や、日本という国に目ざめさせ、両国へ繋がる機会も他の地域より多いことから、出稼ぎブームも延辺地域では時間的にも、量的にも先を取っていたと推測できる。筆者の小さい時も周りに、日本や韓国にルーツを持っている家族を多く見かけられ、まだ中国の文化大革命が終わってまもない時期にもかかわらず、「誰々の家の娘が日本留学に行った」とか「誰々の家が香港を通じて韓国に行ってお金持ちの親父に会って、たくさんお金をもらって来た」などの話を聞いたことがある。それに延吉市から20分もかからない距離に位置しているにもかかわらず、これといった産業がなく、常に延吉市の影の中で歴史的な優越感と現実の経済的な格差から来る矛盾さを呑み込みながら、誰もが延吉市に対する憧れみたいなものを持っていた。

これらの多年間抑圧されてきた複雑な市民感情は海外への「出稼ぎ」という道によって、一気に開放されて、他の地域の人はまだ周辺の様子を見ているうちに、何の躊躇もなく、次々と海外への冒険へと進行して行ったのである。学校教育関係者も「朝鮮族の構成比が高いせいか分からないが、親の出稼ぎが他地域より高い。龍井市の親達はとにかく勇敢である。何の迷いもなく出稼ぎに飛び込み、後のことは考えないようだ。」と語ってくれたことを思い出す。

3-2. 調査対象者と調査方法

本調査の対象は主に10才から19才までの小学校5年生から高校2年までの児童生徒である。学校の選定及び学年の選定は龍井市教育局の協力を得て決めた。当地の朝

鮮族学校の中でも代表的と言える北安小学校(在籍学生数650人、学級数25)、龍井市中学校(在籍学生数471人、学級数17)、龍井市高級中学校(高等学校、在籍学生数1,700人、学級数32)を選んだ。次に各学校の授業の時間や放課後の学校行事、自習時間と入試への負担、個人の塾へ通う時間、自分の意思で物事を考えて答えられる年齢などを考慮して、学年を決め、偏差を防ぐために各学校とも同じく100枚ずつ配布し、アンケート調査を行った。北安小学校在校生650人のうち100人、龍井市中学校在校生471人のうち100人、龍井市高校在校生1,700人のうち100人を対象に朝鮮語での調査票を配り、アンケートを実施した結果、配布数300枚で、回数⁷³292枚、回答率97.9%である。

調査方法は300人の児童生徒への質問票によるアンケート調査と一対一のインタビューの形式で(学校の先生1人、教育局の関係者1人、女子中学生1人、保護者1人：計4人)深層面接を行った。調査期間は2012年8月に課題を設定するための予備調査を行い、更に2012年10月29日から11月2日の間、5日間に渡りアンケートによる本調査と資料収集を行った。調査項目は全24項目で、その内、自由記述2項目で大きく以下の4つに分けて実施した。まず、基本情報と離散状況に関する質問である。次は留守児童だけを対象とした項目であり、主に親の不在の中、周りの誰と関係を結びながら生活しているかについての質問である。その次は留守児童でない子どもを対象とした質問であり、出稼ぎに行っていない理由とそれについての子どもの考えを聞く項目である。最後に両方の子どもに対する共通の質問で自由記述も含めて、子ども達の日常生活と教育についての質問である。

第4節 留守児童の現状

4-1. 回答者の属性

【図4-1】は回答者の年齢を示している。回答者の中でもっと多い年齢代は12才で58人(19.9%)、その次が13才で49人(16.8%)である。17才は42人(14.4%)、11才は38人(13%)、14才は28人(9.6%)、18才は26人(8.9%)、10才は20人(6.8%)、16才は15人(5.1%)、19才は9人(3.1%)、15才は4人(1.4%)、無回答2人(0.7%)、9才は1人(0.3%)である。配布した該当学年が6つしかないのに、グラフのように広い年齢代に分布され

⁷³ 内訳：北安小学校99枚；龍井市中学校98枚；龍井市高校95枚

たのは、親の移動による転学によるものと親の勉強への期待から農村から都市の学校へ編入する際に、正規生ではなく、1年、2年浪人したことが考えられる。

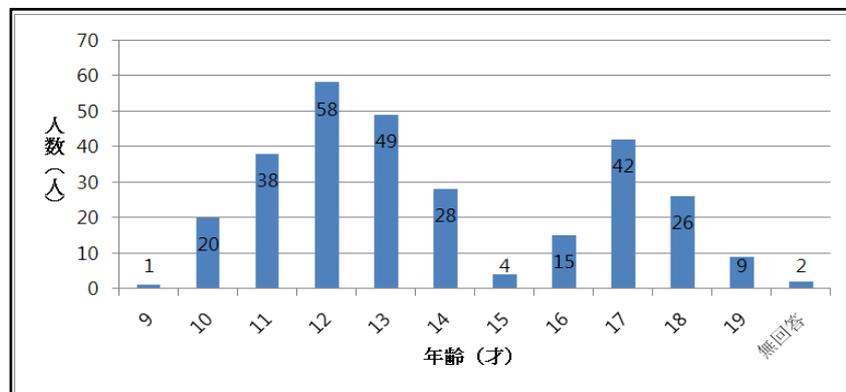


図4-1 回答者の年齢

【表4-3】は回答者の学年と性別のクロス集計である。できれば回答者が偏らないように男女均等に答えてもらいたかったが、回答は授業が終わる午後の自由時間に記入してもらったため、男子は外でのスポーツ活動が多いらしく、女子回答者の方が200人(69.9%)で、男子回答者86人(30.1%)を上回っている。学年は小学校5,6年生、中学校1年、高校2,3年を中心に回答してもらっている。

表 4-3 学年と性別

学 年	男子	女子	合計	%
中学一年生	38	56	94	33.4
中学二年生	0	2	2	0.7
中学校三年生	0	1	1	0.3
高校一年生	0	1	1	0.3
高校二年生	16	39	55	19.0
高校三年生	7	27	34	12.1
小学校 6 年生	13	33	46	15.9
小学校 5 年生	12	41	53	18.3
合計	86	200	286	100

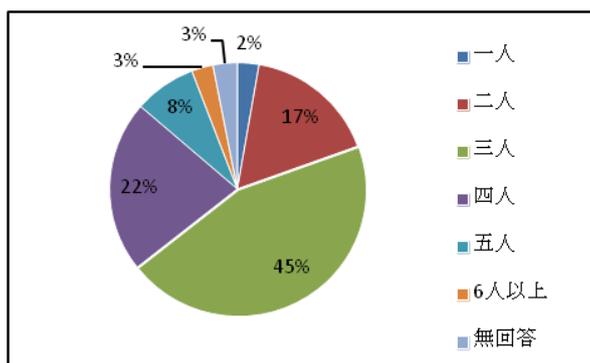


図4-2 家族構成

【図4-2】家族構成で「3人家族」と答えた数が131人(46.3%)でもっとも多かった。次に「4人家族」と答えたのが64人(22.6%)で、「2人家族」と答えた人が49人(17.3%)で3番目である。「5人以上」と答えた人も少なくとも23人(8.1%)である。

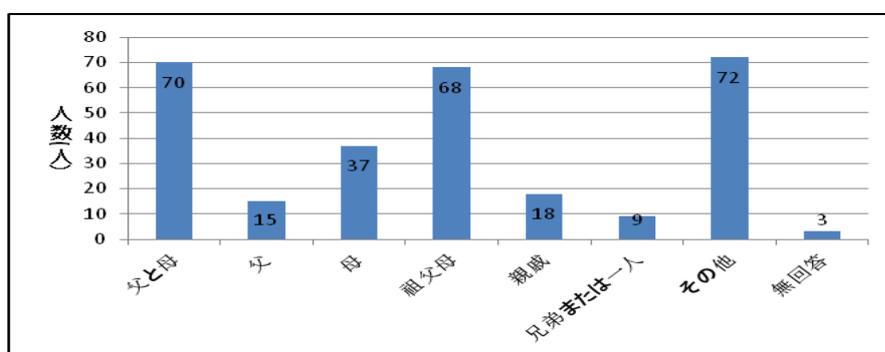


図4-3 同居人

【図4-3】は現在一緒に住んでいる人への質問だが、父と母とが70人(24.2%)、祖父母とが68人(23.3%)、父とが15人(5.1%)、母とが37人(12.7%)、親戚とが18人(6.2%)、兄弟と又は一人暮らしが9人(3.1%)、その他、複数の人との居住が72人(24.7%)である。

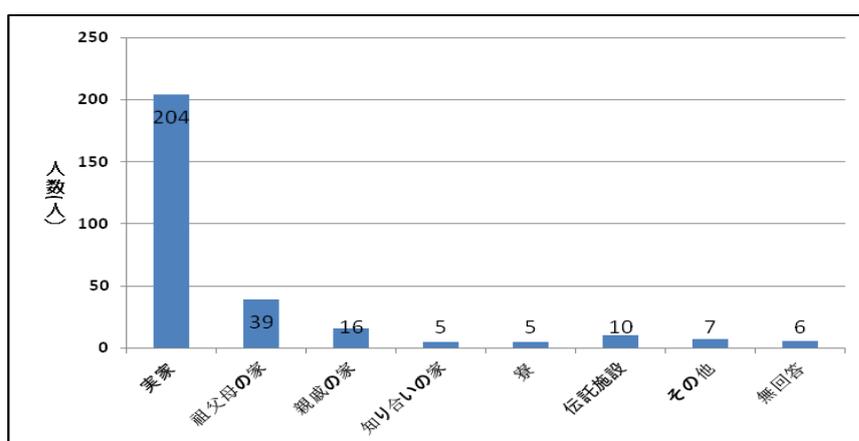


図4-4 住まい

【図4-4】は「現在住んでいるところ」への質問である。「自分の家に住んでいる」

と答えた人が204人(69.9%)、その次が「祖父母の家」39人(13.4%)、「親戚の家」が16人(5.5%)、「全託施設」が10人(3.4%)、「知り合いの家」と「寮暮らし」が各5人(1.7%)、その他「先生の家」とか「住むところがない」と答えた人も7人(2.4%)いることが分かった。

4-2. 出稼ぎ経験、出稼ぎ先、離散年数

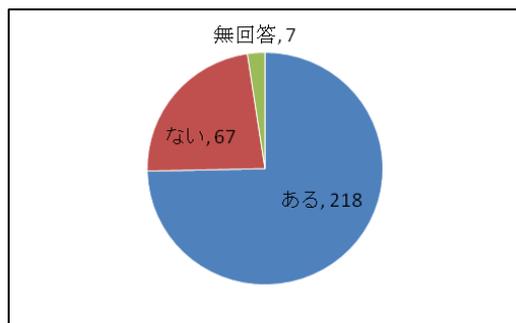


図4-5 出稼ぎ経験

出稼ぎの状況について「両親または片親の一人のうち、出稼ぎ経験があるかどうか」の質問についての回答はグラフ5の通り「ある」と答えた人が292人のうち218人で全体の74.7%を占め、「ない」と答えた人が67人で全体の22.9%と出た。親の中で一人でも出稼ぎに出ている家庭が圧倒的に多いことが明らかになった【図4-5】。

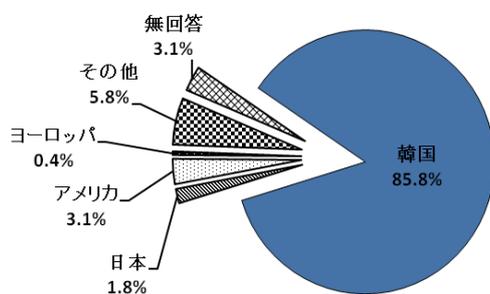


図4-6 出稼ぎ先

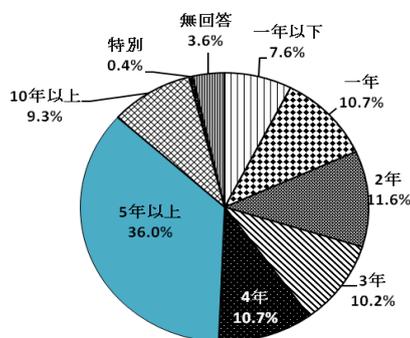


図4-7 離散状態

出稼ぎ経験を持っている家庭の子どもだけを対象に聞いた質問で「出稼ぎ先」を聞いたところ、約194人(85.8%)の人が「韓国」と答えており、その後を「アメリカ」、「日本」、「国内」などの順に続いた。中には両親が別々に違う国へ長期間出稼ぎに出ている特殊な家庭もあった【図4-6】。親と離れた年数は約36%以上の子どもが親との分離が5年以上になり、10年以上の人も9.3%、1年から4年まで離れている子どももいずれも10%以上占めることが分かる。長期滞在による子どもとの長期間にわ

たる分離が目立つ結果である。尚、韓国の受入政策である訪問就業制度が定める在留可能年数の5年を考えると、出稼ぎによる離散は現在も進行中であると言える【図4-7】。

4-3. 親との連絡

留守児童生徒に親との連絡について聞いた質問では【表4-4】と【表4-5】の通りの結果が出た。連絡の回数は「週に数回」が一番多く133人(45.5%)で、「月に数回」が40人(13.7%)、「毎日連絡する」も33人(11.3%)を占めた。「半年に数回連絡する」、「年に数回連絡する」が各5人(1.7%)で、「全く連絡しない」4人(1.4%)を含めると、親子間の通常のコミュニケーションがほぼ断絶されている留守児童生徒の数は14人(5.2%)を占めていることが分かった。

表4-4 連絡頻度

頻度	毎日	週に数回	月に数回	半年に数回	年に数回	連絡なし	複数	無回答	合計
人数	33	133	40	5	5	4	1	71	292
%	11.3	45.5	13.7	1.7	1.7	1.4	0.3	24.3	100

*無回答の中には留守児童生徒ではない子ども22.9%も含まれている。

連絡方法についての答えでは「携帯」と答えた人が最も多く87人(29.8%)を占めた。「パソコンの電子メールやチャット」を通じて連絡する人も31人(10.6%)、「携帯メール」19人(6.5%)で、「複数の方法で連絡する」59人(20.2%)の人も含めたら、留守児童生徒の半数以上が携帯やパソコンなどIT技術に頼って親子の絆を深めていることが分かった。「一般電話で連絡する」人は15人(5.1%)で、「人伝や直接会う」と答えた人も各2人(0.7%)、1人(0.3%)と出た。憂慮されるのは「全く連絡なし」と答えた人も5人(1.7%)もいて、親と連絡のできないまま生活する子どももいることが分かった。実際龍井市で調査を行う時に担任の先生や子ども達の話によると一クラス半数以上の子ども達が携帯を持っていて、所持の比率は小学生の時から持っている子どもがかなりいて、学年が上がるほど高くなっているとのことである。中にはインターネットとWI-FI⁷⁴さえつながればスマートフォンを使ってどこでもカカオトークなどリアルタイムの吹きなどを通じてお互いの連絡をとる子どもいるとのことである。

⁷⁴ WI-FI : アメリカ電気電子学会が開発した高速無線LANのこと。

朝鮮族の家族分散においてはインターネットや通信技術などに頼って、主な連絡手段としている趨勢が見えてきた。

表4-5 連絡方法

手段	携帯	携帯メール	電話	パソコン	人伝	会う	連絡なし	複数連絡	無回答	合計
人数	87	19	15	31	2	1	5	59	73	292
%	29.8	6.5	5.1	10.6	0.7	0.3	1.7	20.2	25.0	100.0

*無回答の中には留守児童生徒ではない子ども22.9%も含まれている。

連絡時の主な話題を聞いた複数回答では【図4-8】のように、勉強135人(39.7%)、健康133人(39.1%)、小遣い等生活の面57人(16.8%)の順の答えが出た。実際子ども達の話によると、毎日の日常の細かいことまでは親と話す時間があまりなく、いつも変わらないパターンで「ご飯は食べたか?体は大丈夫?勉強は頑張っているか?」が毎回の主な電話内容だそうである。電話ではどうしても普段の細かいことや悩み等を相談しづらいと、一人で悩んで決めたり、誰にも言わなかったりする場合もあるとのことである。学校の先生へのインタビューでも出稼ぎ先で忙しく働いている親の都合と、距離の関係もあり、日々の子どものに対するケアは同居人(祖父母が一番多い)と学校の先生に主に頼っていることがあると教えてくれた。中には先生に子どもの生活費を預けて、毎月子どもが必要とするときに小遣いをあげるケースもあり、学校の先生の役割が教えることだけでなく、家庭の生活の面まで面倒を見なければならない、家庭の機能が働いてない分、学校と教師の負担が増えて、学校も新しい対応に追われているとのことである。

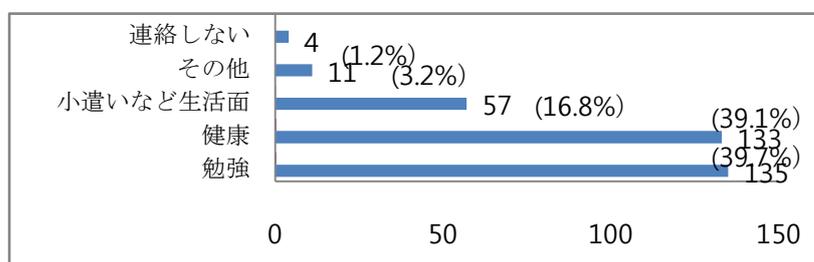


図4-8 連絡時の主要話題

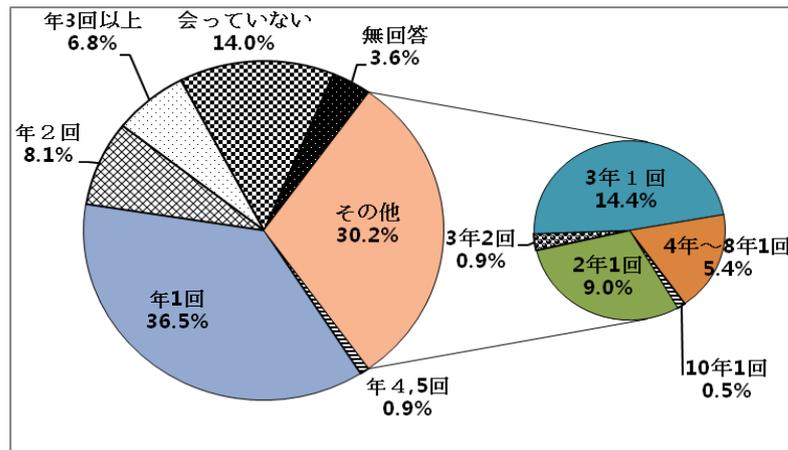


図4-9 親と会う回数

親と会う回数について聞いたところ年1回が81人(36.5%)、年2回が18人(8.1%)、年3回以上が15人(6.8%)であった。その他を見ると、3年に1回が32人(14.4%)で、2年に1回が20人(9.0%)、4年から8年に1回が12人(5.4%)で、3年に2回が2人(0.9%)で、10年に1回も1人(0.5%)を占めた。「全く会っていない」と答えた人も31人(14%)もいた。2年以上出稼ぎに出ている親と会っていない子どもが約34.4%を占め、韓国政府の受入政策の緩和により、制度上本国との自由な行き来ができて、親の仕事の都合と距離、お金の問題でなかなか帰国することが難しく、親子の長期的な家族分散が続いていることが見える。自由回答の部分で「今従姉の家で暮していますが、従姉がまた12月末に韓国へ行き、父が帰ってき、3ヶ月のビザから3年ビザでまた韓国へ行きますので、その3年間自分の居場所がどこか、どこに全託⁷⁵したほうが良いか悩んでいます。経済的に支援をもらいたいです」と答えた子どももいて、出稼ぎ者の大多数が帰国後まもなく、また韓国へ繰り返し渡航するという現実が見える【図4-9】。

親と会う方法としては「親が帰国する」が一番多く116人(51.6%)、「私が行くかそれとも親が来る」が65人(28.9%)、「私が親のところへ行く」が13人(5.8%)、「会ったことがない」と答えた人も(29人)12.9%を占めていた。子どもが親に会うために

⁷⁵ 全托は文字通りすべてを託す、依頼するとの意味である。元々は中国で親たちが何らかの事情で保育園や託児所に「月曜日に子どもを預けて、土曜日の夜に引き取る」との語源だが、今の朝鮮族社会では出稼ぎにより、預け先が見当たらず、一定の料金を支払って、他の家庭や、専用施設に子どもを託して全ての面での面倒を見てもらうことを指す。出稼ぎブーム以来、新聞やテレビの広告で個人や施設の「全托生徒募集」の広告が良く見られるのも時代の産物とも言える。反対語に「日托」がある。

出稼ぎ先へいくケースも5.8%と出ていて、親か私が行くとの答え28.9%も考慮すると、数は少ないが、子どもが親の出稼ぎ先へ会いに行くという新しい趨勢も見える。学校の先生の話によると「親の出稼ぎの長期滞在のこともあり、親が仕事が休めないことや、子どもに親の仕事している様子を見てもらうために、夏休みや冬休みを利用して子どもが親の出稼ぎ先に行くパターンが増えていると、また親元から戻ってきた子ども達には生活や学習面で目に見える肯定的な変化が現れている」のことである【図4-10】。「出稼ぎ中の親との同行を希望するかどうか」を聞いた質問では「行きたい」と答えた人も、「行きたくない」と答えた人も同じく44.0%で、半々を占めていた【図4-11】。

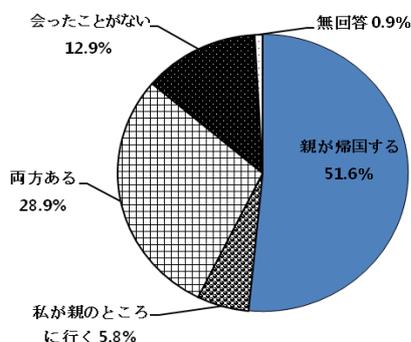


図4-10 親と会う方法

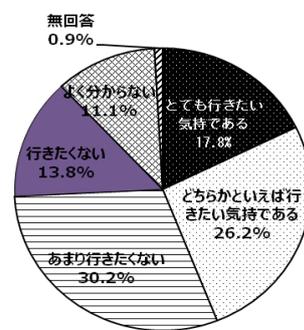


図4-11 親との同行希望

4-4. 同居人との関係

現在一緒に住んでいる人との関係と同居人の子どもに対する理解の程度を聞いた質問では【図4-12】と【図4-13】の結果が出てきた。まず同居人との関係では「非常に仲が良い」が157人(69.8%)で一番多く、「まあまあ仲が良い」の38人(16.9%)と合わせると約86.7%の人が同居人とは関係が良いと答えてくれた。反面「仲が悪い」、「あまり仲が良くない」と答えた人は合わせて9人(2.6%)を占めた。同居人の子どもに対する理解度についても約175人(77.8%)の人が「理解してくれている」と答えた。朝鮮族の留守児童生徒の場合、同居人は片親か祖父母が一番多いことから同居人とは良い関係を維持しているとも言える。

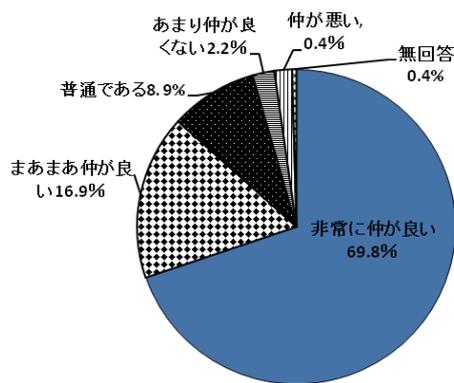


図4-12 同居人との関係

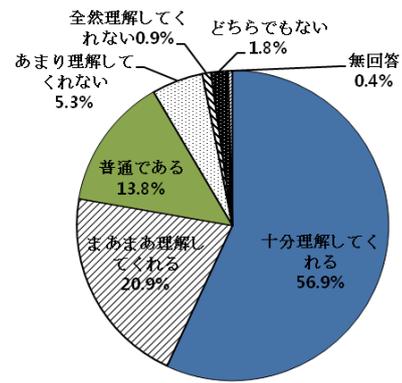


図4-13 同居人の理解度

一方で「同居人とのトラブルがあるかどうか」という質問では113人(50.3%)の人が「良くある」または、「たまにある」と答え、106人(47.1%)の人が「殆どない」または、「ない」と答えてくれた【図4-15】。同居人とのトラブル発生時取る態度への質問では106人(47.1%)のが「怒りを感じるが従うほうだ」と答え、「何も言わず従うほうだ」と答えた人が41人(18.2%)を占め、約65.3%の人がトラブルがあっても、同居している人に従う方だと答え、無視するが14人(6.2%)、喧嘩するが11人(4.9%)で、何かの行動をとって解消するが23人(10.2%)占めた。その他の22人(9.8%)の答えをみると「苛立つが、後で自然に和解する；会話で解ける；私が先に謝る；話し合う」等、大多数の子どもがトラブルがあっても、同居人と仲良くするために努力していることが分かる【図4-14】。

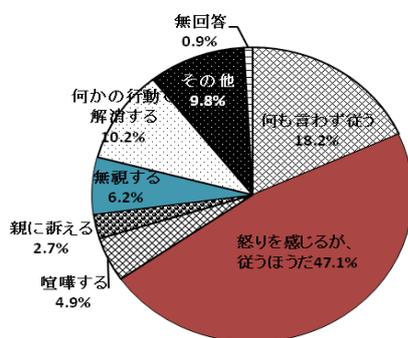


図4-14 トラブル発生時の態度

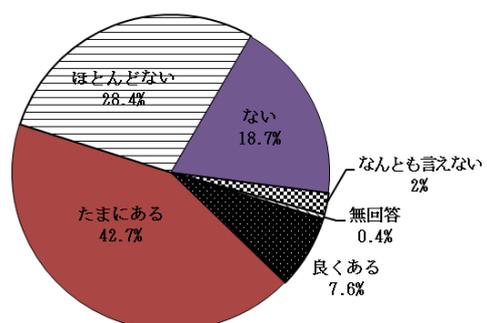


図4-15 同居人とのトラブル有無

4-5. 非留守児童への質問

この項目は留守児童でない子どもへの質問である。

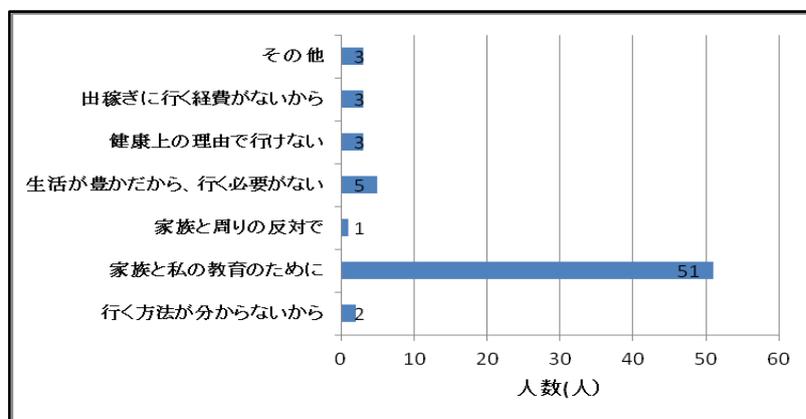


図4-16 出稼ぎに行っていない理由

まず出稼ぎ経験者が「いない」と答えた68人の人にこれまでに「出稼ぎに行かなかった理由」を尋ねたところ、「家族と子どもの教育のために」が51人(75%)と最も多かった。「生活が豊かだから、行く必要がない」との答えた人も5人(7.4%)いて、おそらく経済的余裕のある家庭と考えられる。また「出稼ぎに行く経費がないから」の3人(4.4%)と「健康上の理由で行けない」と答えた3人(4.4%)、そして「行く方法が分からないから」の2人(2.9%)、「家族と周りの反対で」の1人(1.5%)を合わせると、出稼ぎには行けなかったものの、行く意思があった人が9人いる。一方「その他」3人(4.4%)の中には「仕事があるから」、「分からない」との回答もあった【図4-16】。

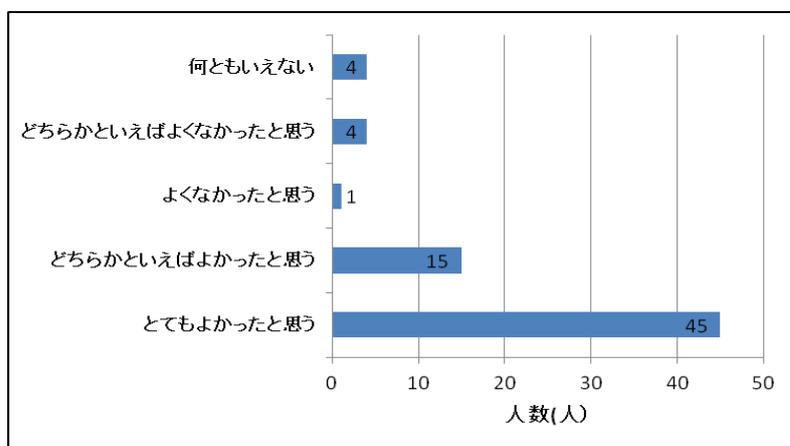


図4-17 出稼ぎに行っていないことへの考え

【図4-17】の出稼ぎに行っていないことへの考えには、「とても良かった」と答えた人が45人(65.2%)で圧倒的に多かった。「どちらかといえばよかったと思う」は15人(21.7%)で、「なんともいえない」が4人(5.8%)であった。また「どちらかといえばよくなかった」も4人(5.8%)で、「よくなかった」と答えた人も1人(1.4%)いた。

4-6. 日常生活と学校生活

この項目では両親、若しくは片親の不在の中、又は激しい出稼ぎのブームの中、子ども達が普段の日常生活と学校生活をどう過ごしているかを調べる内容である。出稼ぎの経験のある家庭が74.7%を占める中、又、ほとんどの朝鮮族の子ども達が日常生活の中で、朝鮮族社会の出稼ぎブームの影響を多からず、少なからず受けているという仮定の下で、あえて留守児童生徒とそうでない子どもをケース分けしないで、全体としての傾向をみた。主に子ども達の日常生活と学校生活を中心に両方の家庭の子ども達を対象に同じく15項目に対して質問した結果、その内、3つの項目だけ有意差が認められて、残りの12の項目では有意差が認められなかった。有意差が認められたのは「主に受ける支援」、「ストレス解消法」、「悩み解決法」の3項目である。ここでは、この3項目を含め、いくつかの側面をみる。

4-6-1. 家庭の経済水準、小遣い、小遣いの用途等

まず家庭の経済水準に関する質問で、「普通」と答えた人が出稼ぎに行っている家庭の子どもも行っていない家庭の子どもも約7割を占め、「豊か」又は「割と豊か」と答えたのは出稼ぎ経験のある家庭が39人(18.6%)で、ない家庭が15人(23.1%)で後者の比率がやや高かった。「貧困」又は「比較的貧困」と答えた数は、出稼ぎ経験のある家庭は18人(8.5%)で、ない家庭は5人(7.7%)である。どれも差はそれほどないが、それでも出稼ぎに行っている家庭の子どもの方が「自分の家庭は貧困である」と考える割合がやや高く、反面出稼ぎに行っていない家庭の子どもの方が「自分の家庭は豊かである」と考える割合が高い結果が出た。

一ヶ月の小遣いについての質問では出稼ぎに出ている家庭の子どもも、そうでない子どもも「100元から500元」の間が一番多く、約5割ぐらいを占めた。「100元以下」と答えたのも両方とも3割ぐらい占めてそれほど差がなかった。しかし、1000元以上になると出稼ぎに出ている家庭の子どもの方は3.3%で、行っていない家庭の子どもは1.

5%より倍の数値が出た。これは出稼ぎに行っていない家庭では子供は主に身の回り品などは親に買ってもらう場合が多いが、出稼ぎに行っている家庭の子どもの一部には自分で衣服や身の回りのものとかを買う子どももいることから(全託施設暮らしや、寮暮らしをする子ども達)小遣いと生活費の一部だと考えれば理解できる。小遣いの用途に関する質問でも両方の家庭とも半数以上が食料品と答え、その次が衣服、勉強の順に答えが出て、それほどの差は見られなかった。

4-6-2. 学校の勉強等について

学校の成績について質問では、成績が「中」と答えた子どもが出稼ぎに出ている家庭と出していない家庭の子どもとも回答数が最も多く、各37.2%と30.3%を占めた。しかし「中より上」、「優秀」と答えたのは出稼ぎに行っていない家庭の子どものほうが50%で、出稼ぎに行っている家庭の子どもの40.9%より約10%ほど高かった。「中より下」と「良くない」の答えも出稼ぎに出していない子どものほうが18.1%で、出ている家庭の子どもの20.4%よりわずかだが、低く出ている。

子どもの勉強への親の期待についての質問では、出稼ぎに出ている家庭も、行っていない家庭も「大学卒」と「大学卒以上」と答えた回答が各90.7%と89.3%という高い数値が出て、朝鮮族の父母の高い教育熱を反映した。「勉強は楽しいかどうか」、「通学態度はどうか」の質問でも両方の子どもとも「楽しい」が60%以上と「まじめに通っている」が90%以上と高い数値が出た。

家族の経済状況や学校での勉強では殆どの項目で両方に有意差が見られなかった。おそらく、留守児童の数が70%以上を超えていて、逆に留守児童でない子どもの方が少数であり、留守児童と言うのが普通の学校の生活にはそれほど影響はないのではと推測してみる。もう一つの原因として、朝鮮族の子ども達は親の出稼ぎにより、経済的に裕福であることにありと予測される。全体的に割と豊かな生活をしていて、経済に困っている子は殆どいないというのが特徴でもあった。

4-7. 周囲との関係

出稼ぎブームの中、多くの子ども達が家族分散を経験している中、家庭の機能が正常に働いてないところを、周囲とどういった関係を結びながら適応しているかを知るために5つの項目に分けて質問した。まず「子ども達と最も密接な関係を結んで支

援し、助けてくれる人は何人いるか」という質問では、「1人から5人以上」と答えた人が239人(81.8%)で、殆どの子ども達が必ず誰かと密接な関係を持ちながら生活していることが分かった。しかし、1人もいないと答えた子どもも23人(7.9%)があって、憂慮の部分も少なくなかった。また、「困っている時、助けをくれる人はどうい方ですか」という複数回答の質問では、出稼ぎ経験のある家庭の子どもは「両親、友達、家族と親戚、先生、その他」の順に、出稼ぎ経験のない家庭の子どもは「両親、友達、先生、家族と親戚、その他」の順に答えが多かった。いずれも両親以外に友達に一番頼っていることと、周りの行政機関や、学生団体、隣人などの社会の支援にあまり関わっていないことが見える。

表4-6 主に受ける支援

受ける支援 出稼ぎ経験	人(%)					
	経済的な支援	悩み相談など精神的支援	日常生活の面での支援	学校生活の面での支援	法律的な面での支援	該当なし
ある	59 (20.3)	46 (15.8)	64 (22)	56 (19.2)	9 (3.1)	57 (19.6)
ない	14 (14.9)	15 (16)	26 (27.7)	18 (19.1)	3 (3.2)	18 (19.1)

(P=0.0039 <0.05 有意差ある)

主に受ける支援では【表4-6】出稼ぎに出ている家庭の子どもも、そうでない子どもも「日常生活の面での支援」が一番多く、それぞれ22%と27.7%を占めた。しかし、2番目に多い答えでは出稼ぎに行っている家庭の子どもは「経済的な支援」が20.3%を占めている中、出稼ぎに行っていない家庭の子どもは「学校生活の面で」と「該当なし=特に支援がない」が19.1%を占めて、多少の違いを見せた。その次の答えの順は出稼ぎに行っている家庭の子どもは「該当なし=特に支援がない」19.6%、「学校生活の面で」が19.2%、「精神的な面」が15.8%、「法律などの面で」が3.1%の順であった。一方、出稼ぎに出していない家庭の子どもは「精神的な面」が16%、「経済的な支援」が14.9%、「法律などの面」が3.2%の順であった。

【表4-7】は家庭のストレスの解消方法についての複数回答のクロス集計である。出稼ぎ家庭の子どもは「音楽や散歩を通じて解消する」のが一番多く、全体の21%を占めた。その次が「友達とおしゃべりして解消する」との答えが15%を占め、「おいしい物を食べて解消する」との答えが12.6%、「スポーツ等を通じて解消する」が11.

5%、「親や先生に訴えて解消する」が9.9%、「ゲームなどの娯楽を通じて」が9.7%、「たくさん泣いて」が5.8%、「日記等をつけて」が4.9%、「一人で悶々する」と「買い物等お金を使って」が同じく3.4%で、「周辺に怒ったりして解消する」が2.5%の順に表れた。一方で、出稼ぎに行っていない家庭の児童生徒の答えは「音楽や散歩を通じて」が21.2%、「友達とおしゃべりを通じて」が13.1%、「スポーツを通じて」と「ゲームや娯楽を通じて」と「おいしい物を食べて」が同じく10.8%、「たくさん泣いて」が8.6%、「親と先生に訴えて」が8.1%、「日記等をつけて」が6.3%、「一人で悶々する」と「買い物等お金を使って」が3.6%、「周辺に怒って」が3.2%の順に結果が出た。

表4-7 ストレス解消方法

		人(%)									
ストレス 解消 出稼ぎ 経験	スポーツ を通じて	親と 先生に 訴えて	友達と おしゃ べり して	一人で 悶々 して	日記 など つけて	ゲーム 娯楽	買い物 など お金で	おいしい 物 食べて	たくさん 泣いて	音楽や 散歩を 通じて	周辺に 怒って
ある	77 (11.5)	66 (9.9)	100 (15)	23 (3.4)	33 (4.9)	65 (9.7)	23 (3.4)	84 (12.6)	39 (5.8)	140 (21)	17 (2.5)
ない	24 (10.8)	18 (8.1)	29 (13.1)	8 (3.6)	14 (6.3)	24 (10.8)	8 (3.6)	24 (10.8)	19 (8.6)	47 (21.2)	7 (3.2)

(P=0.0031 <0.05 有意差ある)

【表4-8】は子どもに悩みの解決の方法について質問したものである。出稼ぎに出していない家庭の子どもは29.5%が「積極的に周りに助けを求める」と答えが一番多く、その次が「たまに周りに助けを求める」との答えが18.1%であることに対して、出稼ぎに出ている家庭の子どもは「たまに周りに助けを求める」が一番多く30.4%、その次が「積極的に助けを求める」が27.6%と出ている。また出稼ぎに出ている家庭の子どもは「一人で悩む」との答えが20.1%で3番目に多い順であったが、出稼ぎに出していない家庭の子どもは「一人で悩む」が19.1%で、4番目の順であった。

表4-8 悩み解決方法

		人(%)			
悩み解決 方法 出稼ぎ経験	一人で悩 む	聞かれたら 話す方だ	積極的に 助けを 求める	たまに 周りに助けを 求める	その他
ある	43(20.1)	41(19.2)	59(27.6)	65(30.4)	6(2.8)
ない	53(19.1)	54(19.4)	82(29.5)	81(29.1)	7(2.5)

(P=0.024 <0.05 有意差ある)

日常生活と学校生活の面で両方の家庭の子どもに対し、質問した結果の中で3項目でしか有意差が見られなかった原因はまず教育を何よりも重視する朝鮮族社会において、いくら何があっても民族情緒上不登校や学校の生活を怠けることは殆どないことと、日常生活の中では出稼ぎ者の送金によって、経済的には不自由がないことと、調査結果でも出たように監護人も祖父母や親戚が預かることが家庭内でも多くそれほどトラブルがなかったことが推測できる。ただ有意差が認められた3つの項目とも心理的なことと関連ある質問だったので、朝鮮族の留守児童生徒は中国の農民工による留守児童に比べて、目に見える物理的な問題よりは、心の問題を抱えていると考えられる。一人で悩む子が多いことと、家庭と先生以外に行政機関や、学生団体、隣人などの社会の支援にあまり関わっていないことが浮かび上がっている。

4-8. 自由回答⁷⁶

韓国への出稼ぎなど周りの人の移動により、激変する環境の中で育つ子ども達は、今何に一番関心を持っているか？又親の出稼ぎに対して、子ども達はどのように考えているか？子ども達が抱えている悩みは何か？この一連の疑問について直接子ども達の話の聞きたくて、質問紙の中に自由記述の項目を3つ入れて記入してもらった。今回の報告では、その中の留守児童生徒たちの答えだけを下記の通り、まとめてみた。

4-8-1. 「今一番夢中になっていることは何ですか？」の質問に、

大きく分類すると「勉強」、「スポーツ」、「友達」、「芸術」、「読書」、「韓国の芸能」に分かれる。中には「母の帰国を待つこと」、「父が早く帰国すること」、「韓国にいる父と通話すること」など、今の時代の社会の状況を反映する回答もあった。

4-8-2. 「親の韓国への出稼ぎに対してどう考えていますか？」という質問に

まず賛成の意見を見てみると主に次のような答えが出てきた。

- ・朝鮮族の韓国への出稼ぎが良いと思う。私の父は中国で仕事していたが、韓国で仕事することにより、収入が増加し、また韓国に親戚が多くて良いと言う。しかし私は父に会えなくて少し不安である。
- ・私は親の出稼ぎに賛成する。しかし年に2回は必ず帰国しなければならない。

⁷⁶ *子ども達の回答通り日本語に訳したので、丁寧語もあれば、会話体もあることに了解を得たい。

- ・大丈夫。親と離れれば会いたいが、生活レベルが上がるからだ。
- ・中国で働くのが難しいので、韓国に行って仕事しても良いと思う。しかし、なかなか会えないのでそれが短所だ。
- ・同意する。なぜなら朝鮮族は韓国語が通じるし、韓国のほうが給料が高いからだ。

続いて反対の意見には主に次の通り回答が出ていた。

- ・自分たちの娘と息子のために出稼ぎに行くが、お金は重要でないと思う
- ・とても嫌だと思う。なぜかと言えば家族と一緒に仲むつまじく過ごしたいからです。
- ・反対する。お金はたくさん稼げるが、親が懐かしい。
- ・まあ、行かないでお金がなくても家族同士で父、母、私、弟、祖母以外にもたくさんの人たちと仲むつまじく生活できれば良いと思う。なぜなら多くの人はお金が重要だと考えるが、人と人との友情は何よりも大きな力を持っていると考えるからだ。そして祖母の話によると中国人が韓国に行けば韓国人が嫌がる仕事を全部やらなければならない。
- ・中国に働き場が多いが、子どもを置き去りにして、お金を稼ぐために韓国へ行く父母が本当に悪い。
- ・良くないと思う。お金はたくさん稼げるが、子どもをだめにする。親子の感情に罅(ひび)が入る。
- ・家庭破綻、親子関係が遠くなる。
- ・お金を稼ぐために行くのは合っているが、盲目的に行くようで、重苦しい。父母たちが韓国で働くことが安心できなく、いつも心細い。心配。

親の出稼ぎに対して「良い」、「大丈夫」、「悪い」とはっきりした意見も多数あったが、親の出稼ぎは仕方がないことであり、それでも子どもの成長には悪影響を与えると、むやみに行くのは良くないという矛盾を表す回答が最も多かったのである。子ども達の答えを基に親の出稼ぎに対しての子ども達の考えを次のいくつかのタイプに分けて見た。第一に、経済的なことを考えての答えであるが、「韓国の方が中国の一ヶ月の賃金よりはるかに高いので、お金を稼いだら生活が豊かになるし、大学進学のための教育費も稼げて、とてもいい。親は家族のために出稼ぎに行くのである」。第二に、家族関係についての考えであるが、「家族の離散が不安、親と離れることが不安、なかなか会えなくて、親が懐かしい。家族が分裂するという意見である」。第三に、子どもの教育への影響についての回答であるが、「親の出稼ぎにより子どもが悪くなると考える。勉強ができないし、親との絆を失ってしまう。また親と一緒にいる時間が少なくなり、親子の情が薄くなる。愛情をもらえなくて成長に悪い。学校の成績が落ち、心理的に不安な子どもが多い。物質的には豊かに

なっても、‘子農業は凶作’(「子供の教育には良くない」を意味する朝鮮語)だと考えるのである」。第四に、親に対する気持ちを表す回答であるが、「親は子どもの教育のために行くというが、お金はそれほど重要ではない。子どもを置き去りにする親が悪い。お金とは何か。お金の支配され、お金のために生きる世の中がうんざりである」と考える」。第五に、韓国社会に対する意見を見ると、「韓国へ行けば差別を受けるし、奴隷のように働いて、大変苦勞する。親の健康が心配である。一方で韓国社会へ行けば言葉も通じるし、経験を積むことができるし、韓国人の親切さも学び、視野を広げることができる」。第六に、朝鮮族社会に対する考えを見ると、「人口が減少し、朝鮮族の未来が心配である。みんなバラバラになって将来がなくなる。民族社会がなくなる」。

4-8-3. 困っていることと必要な助けは何ですか?」の質問に

「今一番困っていることとか、悩み、不満などがあれば書いてください。又、周りからどういう支援があれば助かるとおもいますか?」と聞いた質問では主に次の通り回答があった。

- ・今従姉の家で暮しているが、従姉がまた12月末に韓国へ行き、父が帰ってき、3ヶ月のビザから3年ビザでまた韓国へ行くので、その3年間自分の居場所がどこか?どこに全託したほうが良いか悩んでいる。経済的に支援をもらいたい。
- ・私は最近ピアノの練習で祖母との不満がある。毎日宿題までして、疲れているのに、祖母はピアノも2時間練習しなければと言うので、不満が多い。祖母にもう少し理解してもらいたい。
- ・私の家には祖母、弟、私が暮しているが、祖母の年齢が高くて、体力も落ち、家事がうまくできないことである。
- ・なぜ親は韓国に出稼ぎに行くのかが悩みである。
- ・母と父が韓国へ行っても喧嘩することと、両親が離婚することへの不安・・・
- ・最近親戚の家で暮しているので、家が懐かしい・・・
- ・大学入試験を控えてみると、何で人生で大多数の生きる道が勉強にだけしなければならぬことに疑問を感じます。ただ勉強ばかりやって、多方面の発展が極めて少ないのが不満です。
- ・勉強がいや。勉強ばかり強調する親がいやになる。
- ・試験、成績、大学、学校で授業だけでなく、課外活動(心理、未来に対する討論など)活動があればと思います。
- ・冬になり、買うべき服と準備すべきことが多い。最近学校に来れば子供同士でブランドに対する競争があまりにも激しい。経済的によく物乞いなる。勉強の面では勉強し

たくても遅いか、どこから始めれば良いか分からない。

回答の中で最も多かったのは「勉強についての各種の悩みであった」。試験、成績、将来についてまじめに深刻に悩んでいる様子が窺える。尚、自分の夢と勉強ばかり強調する現実との間で、悩む姿も見られる。親や親戚の頻繁な出稼ぎにより、家族構成の変化が激しく、子どもの居場所が不安定な状況にいるということも見えてきた。

4-9. 韓国に対する考え

自由回答で出稼ぎに対する子ども達の否定的な意見が多かったのにも関わらず、「韓国へのイメージはどうか」との質問には【表4-9】のように「やや好き」と「とても好き」と答えたのが両方とも割合が高く、出稼ぎに行っている家庭の子どもは36.4%と26.7%、出稼ぎに行っていない家庭の子どもは32.8%と18.8%として、両方とも5割を超えた。反面「嫌い」、「どちらかといえば嫌い」の答えは、出稼ぎに出ている家庭の子どものほうが16.5%で、出していない家庭の子どもの14%より少し高かった。

表4-9 韓国へのイメージ

		人(%)						
イメージ 出稼ぎ 経験		とても 好き	やや好き	どちらか といえば嫌い	嫌い	普通	考えた ことがない	その他
ある		58(26.7)	79(36.4)	27(12.4)	9(4.1)	34(15.7)	4(1.8)	6(2.8)
ない		12(18.8)	21(32.8)	4(6.2)	5(7.8)	19(29.7)	3(4.7)	0(0.0)
合計		70(24.9)	100(35.6)	31(11)	14(5.0)	53(18.9)	7(2.5)	6(2.1)

【表4-10】の「韓国のイメージが作られた動機は何ですか?」という複数回答を要求する質問に対しては、出稼ぎに出ている家庭の子どもも、出していない家庭の子どもも「歌手と芸能番組を通じて」の回答が5割近く、圧倒的に多かった。その他、出稼ぎに出していない家庭の子供は主に韓国へのイメージを「周辺や大人の話」(23.8%)か「韓国企業」(13.8%)に頼っている反面、出稼ぎに出ている家庭の子どもはやはり「親の出稼ぎ」(19.8%)と「周辺や大人の話」(12.1%)に頼る傾向が強く、親の出稼ぎによる影響が大きいことが分かった。

表4-10 韓国へのイメージが作られた動機(複数回答)

動機 出稼ぎ 経験	人(%)					
	歌手芸能	大人の話	親の出稼ぎ	韓国の人 を通じて	韓国企業	その他
ある	109(42.4)	31(12.1)	51(19.8)	29(11.3)	21(8.2)	16(6.2)
ない	38(47.5)	19(23.8)	2(2.5)	7(8.8)	11(13.8)	3(3.8)
合計	147(42.7)	50(14.5)	53(15.7)	36(10.7)	32(9.6)	19(5.5)

第5節 留守児童の特徴と問題点

5-1. 留守児童の特徴

以上の調査の内容に基づいて、龍井市の留守児童の特徴をみると、まず、留守児童の数が多く、「特殊な群体」から「主流群体」へと変わりつつあることが見えてきた。今回のサンプル調査では74.7%という数値が出たが、2012年8月龍井市教育局の関係者の「現在龍井市の留守児童の比率は77.4%を維持している」の話とあわせてみると、いずれも延辺の平均55.4%をずっと上回る高い数値であることが分かった。これは龍井市の地域特徴でも述べたように、歴史的、地理的な背景から他地域より韓国や日本に触れる機会やつながりが多く、そこから形成された勢いを増す出稼ぎブームによるものと分析できる。留守児童は龍井市ではもはや特別な存在よりは普遍的な現象となっていて、言い換えれば家族の形態も親子分離の形が当たり前のこのようになっているとも言えるだろう。

次に、出稼ぎの世代交代による低学年の留守児童の集中である。留守児童がわりと小学校と中学校の子どもの年齢に集中されていることから、出稼ぎ親の年齢帯は大体30代後半から40代の親が多いことと推測される。これは2004年まで韓国政府が入国年齢を25歳まで下げたことにより、出稼ぎ世帯も50代以上の中高年の1世代から幼い学齢期の子どもを持つ若層の世帯へと変わり始めたことと、これからの留守児童の更なる年齢低下を予測してみることができる。

三つ目に、留守児童の大多数が韓国への出稼ぎによるものであり、親子分離の時間も依然として高いことである。今回の調査では85.8%が韓国、離散年数も2年から1

0年以上が合わせて80%と出ている。

四つ目に、隔代教育⁷⁷が目立つ。同居人として「両親と住んでいる人」と「祖父母と住んでいる人」の数が一番多く同じぐらいの数値が出た。朝鮮族の出稼ぎと子どもの教育において祖父母の存在は最も心強い後援者としての役割を果たしていることが分かった。なお、同居人との仲やトラブルについての質問でも多数の子どもが現在の様子に満足しているとの答えが出ている。

五つ目に、韓国の影響を多く受けている。韓国へのイメージについての質問とそのイメージ形成の原因を探る質問では半数以上の子どもが強い関心をみせ、韓国の大衆文化と周辺の話、親の出稼ぎによって韓国と接し、中には韓国という国と自身のライフチャンスをつなげて考える子どももいた。

5-2. 留守児童の問題点

留守児童の問題点を明らかにするために、学校生活と日常生活の面の質問では非留守児童との比較を通じて問題点を浮き彫りにしようとした。しかし、殆どの項目で有意差が見られなかったことから、今回の調査では学校生活も日常生活も表面上では殆ど問題がないという結論が出た。その原因を本文の内容でも述べたとおり、教育熱心な民族的特性と経済面での豊かさ、そして家族間の戦略から探すことができる。ただ有意差が認められた3つの項目とも心理的なことと関連のある質問だったので、現場の教師の話と、自由回答で見られた子どもたちの回答から心の問題を抱えていると推測される。一人で悩む子が多いことと、心を打ち解けるところや人が余りいないことが見えてきた。

アンケート調査の案内をしてくれた教師は留守児童生徒の問題点を次のように話していた。①早熟であり⁷⁸、目端が利く。②現実に敏感に反応し、不安と心配性が多い。③根気がなく、わがママが多く、意地を張る。利己的である。④表では明るい

⁷⁷ 隔代教育:親が子供のめんどうをみるのは当然だが、親がなんらかの理由で子供の面倒をみられないので自分の親に教育を託すこと、つまり孫を祖父母が育てることを意味する言葉である。朝鮮族の場合、経済的な理由から、親が都会や国外に共働きに行ったり、親が離婚したり、育児放棄してしまったりと理由はいろいろあるようだが、複雑な家庭状況が影響していることが多い。

⁷⁸ 思春期が早く到来し、体の変化、美意識、性的関心が早く訪れる現象。早熟さの心理的要因に、バランスの崩れた家庭状況、というのもあげられている。両親が喧嘩がち、共稼ぎや不在がち、病気がち等子どもが本来の子どもらしさで生きていけず、早く大人にならないといけないという本能の力が働いてしまうのだそうである。

が、寂しがり屋で、へこたれる。⑤反抗的である。⑥すぐ怒るし、人の言葉を素直に受け入れず、よく誤解する。⑦何よりも家庭教育の不在から敬愛心がない⁷⁹。無論、留守児童生徒と言っても一人ひとり置かれている状況や背景によって全部違うので一概にこうだそうだとはいにくい。留守児童生徒の中にも早くから物心がついた子どもはしっかりしていて、勉強もできるし、自立心も強い。しかし、これはわずかに一部の子どもに限ることだとしても、留守児童生徒はやはり目に見えない心理的な問題をたくさん抱えていて、この子ども達が大人になったらどうなるかという不安が残るとのことである。

愛情の欠如で、中学、高校のときから恋愛にのめりこむ人もかなり見てきたとのことである。過去留守児童生徒出身で、現在日本の大学院に在籍するZ氏の話は留守児童生徒の現実を象徴的に表している。

振り返ってみれば、親がいなくて、小さいときは日々何かがあったときはどうすれば良いか判断と対応策が分からなくて大変困った。でもいつの間にか自分で世渡りの方法も身につけ、周りにいろんな友達をたくさん作って、その友達の一人ひとりの長所を使い分けて、例えばパソコンに強い人にはパソコン関係を、相談に強い人には相談をなどの形でお願ひしたりする中で、段々と自分で判断し、解決できるようになった。大きくなった今でも何かがあったらすぐさま自分で悩み、解決策を探し始める習慣が身につけて、大変な思いはしたが、そのおかげで自立心は強くなった。でも自分みたいな人はクラスで本当に少なく、周りの多くの留守児童生徒は目標意識をなくし、将来何をしたら良いか分からないまま、韓国でも行くかと漠然とした考えを持った人が多く、実際友達の多くが韓国で仕事したり、留学したりしている。

幼稚園の時から、孫の面倒を見てきた保護者は次のようなことを語った。

孫が小さい時に娘と婿が離婚して、ずっと1人で孫の面倒を見ているが、現在孫娘は中学2年である。娘も婿も韓国に出稼ぎに長年出ているが、1人娘がかわいそうで、韓国から小遣いをたくさんもらっている。私は親と立場が違って、孫娘がかわいしい、親がいなくてかわいそうで、何があってもひどく叱ったりすることはできない。結果、思春期に入った孫娘は言う事は聞かないし、何かを言うとすぐ口答えするし、自分がこの歳で何でこんな子育てのストレスに耐えなければならないか、孫娘と喧嘩した日は涙しか出ない。子どもはやはり親が育てるべきである。祖父母が育てる子どもは寵愛し過ぎて、限界がある。現在の親は何でも物質的なもので親子の情を補おうとするのが良くない。

5-3. 子ども達が抱えている問題点

⁷⁹ 古くから家庭教育を通じて伝承してきた、「父母に孝行し、目上を恭敬する。先生を尊敬し、年寄りを敬う、等の儒教の思想」

自由記述で子ども達に「一番夢中になっていること」と「一番の悩み」について聞いたところ、最も頻繁に出てきた回答が両方とも「勉強」であった。

親の子どもへの勉強に対する期待の調査結果を見ても圧倒的に多かったのが「大学卒」と「大学以上のレベル」の二項目をあわせると257人(89.5%)で9割を占め、子どもへの期待が大きいことが窺える。親は「海外でお前たちのために苦勞しているから、勉強を頑張らなければならない。成績がよくなければならない」と一方的に子どもに押し付け、子どもが何を考えていて、夢は何であり、何が必要か、などの日常の心理的ケアができないまま、そばにいてあげられない分、金銭で補償しようとする。

インタビューに応じてくれた教師も「親の勧めにより子ども本人の意志とは関係なく、平均クラスに約6割の子ども達が各種塾に通ったり又は家庭教師による学習指導を受けている」と語った。朝鮮族の学生へのインタビューの際に、彼女も「自分がいったい何をしたら良いか夢が見つからない。ただ漠然として将来、もしもだめでしたら、親みたいに韓国へ出稼ぎにでも行けば大丈夫だろう」と考える子どもが多いのが現実であると明かしてくれた。

実際中学3年生である彼女の時間割表を見せてもらったが、月曜から日曜までびっしりと時間割が組まれていた。朝6時半から夜の自習時間の9時まで、土、日まで殆どの子どもが学校に出て、目を酷使するのだそうである。時代が経っても子ども達の生活は筆者が中学に通っていた1980年代とあまり変わらないことに気づき、朝鮮族の教育熱は昔も今も変わらないことを、朝鮮族社会ではまだまだ成功の基準がもっぱら勉強一筋であることを改めて感じた。

目の疲れをほぐすために1980年代と変わらず、授業の合間に学生全員が音楽に合わせて約10分間「目の体操」を行うこともそのままだった。唯一違うところは、筆者がいた頃は、いくら勉強で疲れていても、そうした状況を乗り越えるように子ども達のそばで親がいつも温かく見守り、支えてくれたことである。夜の自習から帰宅するときはいくら寒くても、暗くでも道路の入り口まで迎えに出ている親達の姿はもう見られない光景かもしれない。当時は両親の全面的な暖かい支えがあるからこそ、多くの子ども達も中学から高校、高校から大学への激しい受験のプレッシャーを乗り越えることができたのであろう。

子ども達の自由回答の中でも「子ども達の気持ちも分からないまま、一方的に勉強ばかり強調する親に対する寂しさと、人生の選択肢が勉強以外には通じない現実

に対する息苦しさ」の悩みを書いた内容が一番目立った。子ども達により多いライフチャンスの道を開いてあげるのも親の役割であるが、現在の朝鮮族社会の状況ではどうもそれは難しいようだ。

本章のまとめ

本章では朝鮮族の出稼ぎが子どもの教育に与える影響について、留守児童の現状を中心に論じた。長い間、朝鮮族社会は出稼ぎによる家族分散を経験してきたが、20年経った現在は主に親子の分離による形態として現れている。

まず、出稼ぎブームは学校の統廃合と学生数の減少につながり、良質な教師の流失と漢族学校への転校などの教育環境上の変化を招いた。そして、何よりも「留守児童」という大量の群体を生み出した。韓国政府が不法滞在者を合法化した翌年の2003年には多くの朝鮮族が一時帰国したことで留守児童の問題も落ち着いて来ていたというが、その後も数の面では変わりはなく、依然として高い数値を保っている。その原因は出稼ぎの長期化と恒常化、そして龍井市が持つ地域特性からも探ることができる。とりわけ、留守児童はもはや朝鮮族社会の普遍的な現象として、「主流群像」となって朝鮮族の普通の家族の様子として位置づけられている。

一方で、留守児童問題は量から質への転換を見せている。これは現場の先生が語る「留守児童は2003年から安定期に入った。」という表現とも関連ある。出稼ぎの長期化も不法滞在時期と現在の合法滞在時期に分けられるが、不法滞在時期には親の先の見えない長期化と、出稼ぎ先での不安定な身分、制度上の制約により、帰国も子どもとの連絡も思うがままにならなかった時期であった。極端的に言えば「出稼ぎが全てに勝る、出稼ぎに行けるということが全てのことの中で優先順位を占めていた」とも言える。ゆえに、父母から疎外化された子どもも、わけもわからなく父母と離れたまま期し得ない親の帰国をただ待つ子どももいた。子ども達はまだ心身の面で親の出稼ぎを受け入れる準備ができていない中、不安な生活を過ごすしかないことから非行に走る子どもも出た。それに、留守児童のことを個人や家族の責任に帰す風潮もあって、2000年まではまだ行政からも社会からもこれといった対応策も支援策もなかった時期でもあった。その後、留守児童の問題は益々エスカレートして、教師の言うとおりに2002年から2003年にはピークに至ったのである。

ならば、合法滞在が可能となった2003年から現在の訪問就業制の実施後はどう変

わっているのか。調査の結果に出ているように子ども達の学校生活と日常生活では特に乱れた様子が窺えなかった。留守児童として勉強や将来、そして家族のことで様々な悩みを持っているが、それは成長期の子どもなら重さは違っても誰にでも見られる悩みとしてみることもできる。ただ、目に見える問題は見られなくても、家庭教育の欠如による子ども達の心理的な問題は確かにあるように見えた。一人で悩むとか、周りに心を打ち明けられる相手がいないとか、勉強以外に休日の過ごし方も、ライフチャンスにも欠けていることなど、成長期に必要なケアを十分受けてないことが分かってきた。自由回答の中である子どもが「祖父母や親戚は親よりも私に優しくしてくれている。ただ一番違うところは肝心なところで相談相手になれないし、特に役に立たない」と答えたのがとても印象に残っている。

しかし、それにもかかわらず、現在の留守児童の一番変わったところは「親の出稼ぎと現在自分達が置かれている状況について少しずつ理解を深めている」ことである。自由回答で多くの子どもが「出稼ぎは子どもに良くないが、現在の状況下で行かざるを得ない」とか、「親は自分達のために出ている」とか、「可能な限り海外ではなく、いつでも会いに行ける国内にしてほしい」から、「自分は勉強を頑張らなければ」とか「今の状況では朝鮮族社会はずっとこのままである。根本的な問題点は何かを考えるべき」というかなり深いところまで考えている様子が窺えた。子ども達がもう親の出稼ぎを現実として当然のこととして受け入れて、出稼ぎの生活に慣れ始めているとも言える。周りに同じ境遇の友達も多く、みんな同質的な共感を持っていて、学校でも特別扱いされている感じがないと担当の教師も明かしてくれた。

家族との十分なコミュニケーションを通じて、心の準備ができている状態で家族と離れることと、そうでないことでは子ども達の気持ちは天と地の差である。それに、現在は親の随時帰国可能なことと、IT強国韓国の通信技術の発達によって、親子の連絡も容易になってきた。ということは、親子の頻繁なコミュニケーションによって、子ども達に心理的な安定をもたらし、自らも親の出稼ぎの計画によって先の生活が予測でき、将来のための目標や進路も決められることを意味する。

現在、親子間の分離でもっとも大きな役割を果たすのが通信技術の発達とも言える。調査の結果でも親との連絡で携帯電話やスマートフォン、パソコンを通じた最先端の通信技術が使用されていることが理解された。無料国際電話のアプリもたくさん開発されて、長期間分離はしているが、その代わり通信手段に頼って、親子の

きずなを維持することも特徴であった。親との連絡で約51%以上の人が携帯やパソコンのメールなどと答えてくれた。これは出稼ぎ当初「電話房」と言う商売が流行っていて、子ども達が親に国際電話をかけるために出入りした風景とは対照的である。

連絡回数も「毎日、週に数回」という答えが一番多く約57%を占めていた。主な連絡話題は「勉強、健康、日常生活」と普通に親子間の会話を交わしていた。親と会う回数について聞いたところ年1回から3回までが半数以上も占めていて、全く会えなかった不法滞在時期に比べたら驚く結果であった。他方で2年以上親と会っていない子どもや全く親に会っていない子どもも約34.4%を占めていて、出稼ぎ先や、それ以外の原因で今も親子による家族分散は進行中だということが改めて分かってきた。

もう一つ変化しているのが、親と会う方法としては「親が帰国する」が半数以上占める反面、子どもが親元へ行くケースも約6%、両方のケースも約30%と出ていて、子どもが親の出稼ぎ先へ会いに行くという新しい趨勢も見える。

出稼ぎが続く限り、親子による家族分散が存在する限り、親子のコミュニケーションや絆を強めるために、朝鮮族の越境生活は必須不可欠な手段となっている。それは大人の移動にばかりでなく、子どもの移動も引き起こし、短期間ではあるが、子どもの越境にも繋がっている。可能なら親の出稼ぎと一緒にいきたいと答えた子どもも半数占めていて、将来的には家族連れの出稼ぎの可能性も、両国間を跨る子どもの教育の可能性も排除できない。3章でわかって来たようにすでに19歳以上の成人の子ども達の移動は様々な形で始まっている。

子ども達は不安定な家族環境の中でも、現実を受け入れ、できる範囲内で親との絆を深め、いろいろ悩みながら逞しく生きている。実際韓国に住んでいなかったにもかかわらず、日常生活の中で多様なルーツを通じて頻繁に韓国と触れながら成長していく。幼い頃からのこうした経験は彼らの成長や今後の人生をどう変えていくのかは今後とも非常に興味深い研究課題になるに違いない。

かつて留守児童の問題点として「親のせいで自分が置き去りにされている」という指摘を数多く見かけたことがある(グオン・テファン、2005⁸⁰)。今回でも現場の教師が留守児童の問題点として「被害意識が強い」と表現しているが、調査ではかなりの数の子ども達から「親が本当に子どもの成長と将来を考えて思いやった結果として、

⁸⁰ 注7、前掲載論文

出稼ぎという経験をせざるを得なかったということを」納得しているケースが窺えた。親の出稼ぎという経験が、そして韓国という国の影響が子ども自身の人生を確かに多彩で豊かなものにしたということが実感できるようになったのは大きな変化として、残された子ども達の教育に一抹の光を与えてくれている。しかし、そこに至るまでに子ども達が多くの困難に向き合わなければならない、ということも事実だろう。

以上のようにいろいろな形で朝鮮族の子どもの教育の可能性を見出すことができたが、今の段階では子どもが親元へついていくことも、親に子どものために出稼ぎをやめさせることも、現実上可能性としては希薄である。最も有力なのは子どもとの頻繁なコミュニケーションを通じて、子どもに現実の状況を十分理解させることと、漠然とした思いや、一人ぼっちだという思いを意識させないようにすることである。現場の教師の言っていたように、常に親身になって身近で子どもの心理的な問題を真摯に受け止めながら、ケアしてあげる専門的な心理相談教師が今の朝鮮族の子ども達にとっては一番切実な存在であると考えられる。

第5章 留守児童の対策と家族の再発見 ―送り出し社会の取り組み⁸¹―

はじめに

出稼ぎがもたらした留守児童の現象は送り出し社会が直面した一番大きな課題として、今も地域社会と行政を悩ませている。しかも、一時期に終わることがなく、継続的な対応が求められている。子どもの成長に伴い、教育費は益々増えつつあり、出稼ぎが主要収入源になるため、子どもの大学進学までを視野に入れて出稼ぎに出ている人の場合は受け入れ先での事情等も加わり、経済活動が短期間では終わりにくい状態が続く。そして、生涯に渡って出稼ぎを続ける恒常化が定着している。従って、「稼ぎは韓国で、教育は本国」という家族機能の分離による脱地域的家族生活の形成が目立つ。残された子ども達の教育問題も家族の戦略だけで済むことではなくなっている。留守児童の数の多さと、普遍化は送り出し社会にも新たな対策を迫られるようになった。

4章でも触れたように留守児童に対する社会的関心は2000年に入ってからのものである。それまでは家族本人の自己責任として、正式的な対策は行われていなかった。2000年に入って、国の方針や上部機関の指示により、地方政府である龍井市でも本格的に留守児童への対策に取り組み始めた。龍井市教育局の話によると主に、心理面、生活面、学習面、個人へのケア等を通じて施策を広げてきたとのことである。本章では龍井市の行政、教育現場、そして社会がどのようにして、留守児童問題に向き合ってきたか、その対応と取り組みと成果を検証する⁸²。

第1節 国と地方政府の対策

1-1. 中国政府の留守児童政策

延辺州の朝鮮族の留守児童生徒への取り組みは農民工による留守児童の問題とは性格は多少違うものの、大きくは中国政府の農民工の留守児童生徒への政策の枠内

⁸¹ 本章は龍井市での教育関係者と社会の各分野の人に対するインタビューの内容と、収集した資料に基づいてまとめたものである。

⁸² 中国の政治体制上、全ての施策は国から省へ、自治州へ、市へ、県へ示達するシステムである。龍井市の取り組みもあくまでも延辺州の取り組みの枠内で実施されていた。

で進めていた。中国において、初めて全国の「留守児童の現状に関する調査」を行ったのは、2000年の第5回全国人口調査である。調査で「留守児童」を以下のように改めて定義づけられた。「留守児童」は両親のどちらか、または両方が出稼ぎに都市へ行き、故郷に残されて、両親のどちらかまたは祖父母や親戚、あるいは友人に預けられた14歳以下の子どもを指す⁸³、というものである。直近の本格的な調査は2008年全国婦女連合会が発表した「農村留守児童状況の調査報告」である。その調査における留守児童に対する定義は、2000年のものと少し違っていて、14歳以下の子どもから17歳以下の子どもに変わった。この調査は2005年のサンプル調査に基づき、全国農村の留守児童は5800万人で、そのうち14歳以下の留守児童が4000万人に上ると推定した。この調査結果はメディアの報道によって、中国社会に大きなインパクトを与えた。

これらの実態調査のもとで、2003年中国国務院⁸⁴官房が発表した「出稼ぎ農民の雇用管理制度の改善について」の中に、「出稼ぎ農民の子どもの義務教育権利確保に取り組む」という記述がある。2004年2月には未成年者への思想・道徳教育の強化・改善についての「若干の意見」を発表した。内容の中には「流動人口家庭の子どもの義務教育問題を高度に重視する」という記述がある。留守児童の問題を改善するために、2004年5月、中国教育部は「中国農村留守児童問題研究」座談会を開いた。2005年5月、全国婦女連合会と中国家庭文化研究会は「中国農村留守児童の社会的支援行動シンポジウム」を開催した。同年12月、『中国婦女報』とユニセフは、「社会に働きかけ、留守児童と流動児童の権益保護」座談会を開催した。2006年7月、全国婦女連合会は、「農村の留守児童を愛護する行動を展開し、協力するについての意見」を出して、同年9月、全国農村留守児童工作テレビ電話会議を開き、10月には、国務院農民工工作連席会議弁公室や全国婦女連合会など12の部門が共同で「農村留守児童專題工作組」を設立し、全国婦女連合会書記がその座長になった。2007年10月に全国婦女連合会は、「農村留守・流動児童の職務をより一層やり遂げることに関する通知」を発表し、関係部門に留守児童に対する徹底した取り組みを指示した。さらに、2008年教育部「工作要点」の「三」に、「農村義務教育を重点とし、義務教育のバランスのとれた発展を促進する」という部分があり、「流入地の政府、公

⁸³ 本稿では高校までの子どもを対象とする。

⁸⁴ 中国国務院：日本の内閣に該当する国の機関。

立学校が主体となって、都市に移住した出稼ぎ労働者の子女が平等に義務教育をうけられるよう保証する。農村の留守児童の教育交差をしっかりと行う」という記述がある。2009年教育部の「工作要点」には、「農村の中小学校の公用経費の標準を引き上げる。中小学校の予算制度を改善し、出稼ぎ労働者の子女が流入地でも無料で義務教育をうけられることを実行に移す。農村の留守児童に関する研究と仕事を更に重視する」という記載がある(陳：同上、2011、p40)。

1-2. 延辺州による制定法規

中央各省庁の制定された規定に準じ、2001年以降、各地方政府により当該地の状況を考慮した独自の法規を制定する動きが活発化するようになってきた。延辺州政府は留守児童の問題も含めて、朝鮮族教育全般の危機的な状況に直面して、朝鮮族教育の改革に踏み切った。2004年公布された「延辺朝鮮族自治州朝鮮族教育条例」の第19条には以下の内容が含まれている。「自治州の各級人民政府は、朝鮮族学校の小班化教育⁸⁵を積極的に推進し、教員を合理的に配置し、教育費を保障するなど、学校運営を改善すべきである。自治州の各級人民政府は‘学生の家’など各種の有効措置を計画・実施するとともに、片親と暮す学生、あるいは両親とも一緒に暮していない学生の教育及び管理を強化すべきである」。

第2節 龍井市の教育改革と教育現場の取り組み

学生数の減少、漢族学校への就学率増加、留守児童の問題等、民族教育における危機的な状況に直面して、龍井市政府は教育の改革に踏み切った。上部機関である延辺州の上記の留守児童に対する指針に基いて龍井市教育局は、新しい時代の朝鮮族教育の発展方向として、「質+特色」を重視した朝鮮族教育発展モデルを打出した。質とは学生の総資質を高める教育の質のことであり、特色とは朝鮮族文化を柱とする特色ある文化の創造を指す。「まず‘民族人’になること、それから中華民族になる。更に開放的な世界人になる」という目標を掲げて民族教育に取り組んでいる。このモデルは、少人数クラス教育を強化しながら、更に朝鮮語と中国語の二ヶ国語教育、及び民族教育を高めることで、朝鮮族学校教育の質を高め、朝鮮族教育を早

⁸⁵ 少人数クラス教育を指す。

期に国際教育水準に到達させることを目標とする。この節では主に留守児童に関する取り組みを中心に紹介する。

2-1. 学校教育の現場から

①龍井市では市の中心校以上にあたる学校内に「心理健康相談室」を設置し、相談教師を配置する等、専門の教師グループを立ち上げた。2003年まず龍井市高級中学校に延辺大学の心理健康研究所と連携し、教師、特に担任の先生に対する心理健康教育研修を行い、一定の成果をあげている。近年に入り、全ての市内の学校を対象にこうした教師のための心理健康研修を行い、一定の経験を取得した後は、各学校に戻って、教育一線で普及させるとなシステムを作っている。②留守児童の一人一人の個人ファイルを作り、彼らの状況を把握し、具体的な家庭環境を熟知した上で、個人に向けた教育と管理を行う。同じ留守児童と言っても、各自おかれている状況が異なることから、ケース・バイ・ケースで対応できるよう心がけている。個人ファイルには家庭から学校までの全てのことが詳細に記録されていて、教育の状況についても追跡記録を行うことで、担任が変わっても、何かがあるときもその記録を見ればすぐ分かるようにしておいた。③子ども達を対象に父母への感謝を表す活動も行っている。生徒達に親に手紙を書く日を定め、親を慕う気持ちを慰め、親に言いたいことを思いっきり文字の中に書き込むことで、もどかしい気持ちが発散できるようにする。これによって、子ども達の書く力を伸ばすこともでき、親を思う気持ちに耐えることもでき、親子の仲を良くし、感情の飢えを克服するのに顕著な成果を見せているという。④留守児童の教育連絡網を構築しておく。留守児童の生活や教育、成長の環境を改善するために、「五四三二一⁸⁶」運動を展開し、留守児童への関心と愛を呼びかけた。学校、家庭、社会三位一体の連絡網を作り、留守児童の教育への新しいモデルとして打出した。⑤留守児童の問題を重視し、2000年から現在まで約13年間の教育経験を蓄積し、継続して事例研究や現場調査等に基づく議

⁸⁶ 中国の政策名。五つの愛、四つの記録ファイル、三つの予防体系、二つの情報ネットワークを通じて、一つの目的に到達するとの意味。大きな内容は「社会で疎外化されがちな留守老人、留守児童、臨時戸籍の人などのグループに対して、日ごろから愛を差し伸べ、詳細な記録ファイルを通じて、状況把握をし、組織の基礎単位から上へ至るまでの連絡網を作って、随時その動きが分かるようにしておき、孤独死や子ども達の脱線を防ぎ、調和のよれた協調社会を築き上げる目標を達成する」である。

論や研究を重ねてきた。こうした現場での経験を常に共有し、情報発信することで社会の関心と支援を呼びかけている。

2-2. ‘学生の家’ の設立と運営

2003年末に吉林省長、自治州長など政府幹部が出席し、留守児童に関する会議が招集され、重要施策として‘学生の家’建設を決定するとともに、カウンセラーや代理家長を設けるなど対応を促している。翌年2004年には‘自治州教育条例’を改正し、第19条に「‘学生の家’など多種の有効な措置を取り、単親と無親の学生の教育と管理を強める」ことを新たに規定している。‘学生の家’設立の目的は、①専任の教職員が教育と管理に責任を負い、犯罪発生率を抑え社会の安定を促す。②良好な教育環境を整え家庭教育を補う。③農村の経済的貧困な生徒に低廉で良質な宿泊施設を提供し、親の負担を軽減する。④学校教育からのドロップアウトを防ぐ等が挙げられている。行間から自治州における留守児童の問題を端的に伺うことができる。‘学生の家’は市县政府が設置する留守児童のための寄宿舎で、教職員が常勤する形態と定義され、2010年には延吉2カ所、各市県に各1カ所、計9カ所が開設されていた。【表5-1】は延辺州が2007年にまとめた‘学生の家’の現状である。

表5-1 2007年‘学生の家’現状

縣市	名称	定員	居住数	朝鮮族	漢族	留守子女	貧困学生	職員
延吉市	興安小学	105	75	75		24	51	10
	太平小学	100	68	66	2	68		3
龍井市	学生之家	220	160	151	12	146	97	14
和龍市	和龍五中	120	15	15		15		1
	和龍六中		6	3	3	6		1
琿春市	曙光之家	100	30	27	3	30		19
図們市	学生之家	50	46	43	3	36	10	8
汪清市	第二小学	160	9	9		9		5
安図市	第一小学	100	40	38	2	20	20	4
合計		955	452	427	25	354	178	65

*延辺州教育局「全州‘学生之家’基本状況」2008.1. 1. (尹：2010)

‘学生の家’運営方法は2つのタイプがある。日中は各自の学校に通学し、他の時間は施設で生活する方式と学校に宿舍を併設した寄宿制学校の方式である。経費については、職員給与や施設の管理など運営費の多くは自治体が負担し、食費等は地域社会の賛助金で補填している。利用者は食費・管理費(毎月350元～400元)などの一部を負担する。

龍井市は前者の方式であるが、延辺州でも最も早く2003年7月に小学校跡地を利用して開設し、最大規模で他市県のモデルとなっている。留守児童生徒数の割合が最も多い地域の一つで、市は数年かけて200万元を投入して施設を全面改修し、構内に部屋60、図書室、自習室、伝統道徳教育室、パソコン室、カウンセラー室、食堂、洗面室、洗濯室、当直室などがあり、太陽光パネル温熱水器などの設備を充実させている。また、出稼ぎ先の親と直接話せるように生徒の各部屋には電話が付設されている。教師3人(男2、女1)が24時間交替で勤務している。施設には小学校3年から高校3年まで居住しており、運営経費として毎月330元(住居費130元、食費200元)を負担する。利用者は2003年8月開設時に30名、同年11月に122名、2004年220名、2005年180名、2006年160名と推移している。2007年現在、小学生20名、中学生80名、高校生50名で、小中学生は女子生徒が多く、殆どが朝鮮族の子どもである。

最大の施設を誇るにも関わらず定員220名には達していない。しかも、2012年筆者が訪ねた時には、閑散としていた。施設の関係者によると、子どもが学校のような規則を嫌がり、親も子どもに豊かな環境を与えたいとの思いから‘学生の家’を敬遠し、賄つきの個人経営のアパートを利用する傾向があるからだという。同施設が月330元に対して、個人経営の場合は700元～2000元だという。龍井市教育局の担当者はその要因として、‘学生の家’では小学生から高校生まで一緒に生活するため、生徒が施設内での年齢的な上下関係を嫌がり利用したがる点を挙げる。また、出稼ぎに行っている家庭は一律に貧困というわけではなく、海外からの送金により子どもに少しでも良い環境で学ばせたいという要求が高いため、下宿やアパート等を利用しているのではないかという。特に現在は現役または退職した教師の家に子どもを預ける親が増えていたという。お金はかかっても、勉強や道徳面で適切な指導ができるなど、豊かな経験を持っている教師の家に預けることが親にとっては一番安心であるからである。‘学生の家’の中には、留守児童向けではなく、出稼ぎ家庭の中でも経済的貧困層を救済することを主目的として運営されている施設もある。

ることから、社会の底辺というイメージが嫌で忌避する現象もあるようだ。特に夏休みや冬休み中は殆どの子どもが家に帰ったり、親戚の家に行ったりするため、一時閉鎖したりするとのことである。

‘学生の家’の校長は留守児童を‘孤児ではない孤児’と表現する。施設の資料によれば、出稼ぎ家庭の60%が貧困が原因であり、離婚・離散など家族の崩壊が見られる。入所している子どもは95%が出稼ぎが理由であり、両親不在が60%、片親不在が40%、朝鮮族が殆どで、漢族の子どもは10名ほどという。教育局の関係者は「‘孤児院’と‘学生の家’の違いは、前者は生存自体が危ぶまれる子どもの養育が目的で民政局が担当し、‘学生の家’は教育面からの施策で教育部が管掌している」と説明する。施設では生活面だけではなく学習の支援もしており、2003年から4年間に54人が大学に、76人が高校進学している。男子生徒が名門の浙江大学に合格したことが地域でニュースになったという(尹：同上、2010)。

‘学生の家’開設当時の運営を担当した校長は、子どもの心理面での問題が大きいと強調する。①子どもが信念や目標をなかなか持てない。何をするために生きているのか悩むことが少なくない、②一般家庭であれば正月等名節を家族と一緒に過ごす、それが出来ないことも胸を痛める。③親が身近にいないため、様々な誘惑を受け、非行や犯罪に走ることがある。

‘学生の家’は留守児童や都市部での通学に困っている農村部の学生向けの施設である。龍井市は延辺州でももっとも早くこの施設を運営し始め、2010年まで約500人の留守児童の生活管理を行って来た。時代の変化に合わせた留守児童のための新たな特殊教育のモデルとも言える。

2-3. ‘结对子’⁸⁷活動と‘愛のチーム’設立

留守児童生徒に対するもう一つの取り組みとして、龍井市では‘学生の家’運営以外にも、教員と留守児童生徒をペアで対一で組み合わせ、教員に留守児童生徒の生活、感情、心理、悩み等の配慮と指導を与える「代理家長」の役割を担わせた。留守児童生徒一人ひとりの個人ファイルを作成し、学生の管理を強化した。最初に

⁸⁷ 结对子（中国語）対一（一邦一とも称する）のパートナーを連結して、手伝い役をさせ、共に発展させること

調査を徹底し、生徒の情報を把握、各クラスの留守児童生徒の人数と状況を把握した。情報には、生徒の氏名、性別、生年月日、電話番号、監護者の氏名、電話、家長の氏名、勤務先、電話番号が含まれ、留守児童に関する統計表も作成した。また留守児童生徒にも定期的に「代理家長」と思想交流及び学習、生活状況の報告を行わせた。学校は学費面での減免措置を行う以外にも日常生活においても特に留守児童生徒をケアし、間食として牛乳、卵、パンを提供し、農村地域では月300円の補助も行っている。更に、2008年には‘愛のチーム’を設立し、留守児童生徒問題、残された家族に関心を向け、ケアしてあげることで出稼ぎ者の心の負担を軽減した。

2-4. 良質な教師陣の確保

留守児童の背景を述べた部分で、朝鮮族教師の流失と質の低下についてすでに述べた。出稼ぎによる一連の変化は教育現場の先生への負担も加重化させ、昔より更に複雑になってきた教育現場も教師に対して、臨機応変に対応できる能力やそれ以上の多様なニーズに対応できる能力を求めている。一連の過程を経て、教育全体のあり方は、結局、教師のあり方によって決定されると判断し、延辺州や龍井市も教員を取り巻く環境や、良質な教員を確保するための改善策を工夫し、教員の資質を高めるための様々な取り組みを行っている。

まず、優秀な人材を招聘するために、社会的経済的側面から、安定した生活が出来るよう処遇の改善を行っている。また、出稼ぎブームにも関わらず、教育現場に残ってくれた教師には奨励等を通じて貢献を讃え、士気を高めた。その結果、2009年の教師採用では5:1という高い競争率で優秀な人材を確保でき、更に、2011年には公開招聘により219人の教師を採用することができた。また、『龍井市朝鮮族教師養成三年計画』、『龍井市教師研修方案』など、教師の質を高めるための様々な「教師研修プログラム」を設け、若手教師陣が現場と理論の両面から教師としての実力をアップさせ、誇りと自信をもって教壇に立てるよう工夫を重ねている。上級の教育専門機関から講師を招いて、教師達を対象にした「留守児童との触れ合い方、話し方」などをテーマとした講座も定期的で開催した結果、留守児童の各教育現場では様々な特色、創意、テクニックなど個性に満ちた優秀な取り組みが行われている。なお、漢族学校との連携を通じて、漢族教師を朝鮮族学校に派遣し、両民族の教師達の交流を深め、漢語教育と英語教育を強化している。

龍井市教育局長はこの一連の努力により、教師陣のモチベーションが高くなり、「民族教育を立て直す」という一つの目標に向かって、一丸となる転機を迎えたばかりでなく、各教育現場は画一的な対応よりは、教師一人ひとりの裁量と個性に任せてその現場に適切な取り組みを行う姿勢を維持していると明かしてくれた。

第3節 社会・家庭との取り組み

3-1. 同居人の努力

龍井市での調査でも分かるように、留守児童生徒の多くは祖父母または、親戚、そして、状況に応じて再構成された複数の親戚と暮らしている。2010年張⁸⁸の調査によると「同居人として子どものためにすること」の質問に対して、「子どもの健康に良い料理を工夫する」が75%、「なるべく子どもと接する時間を作るようにしている」が55.2%、「子どもの勉強を指導している」が43.8%、「塾に通わせる、家庭教師を雇っている」が33.3%、「先生から子どもの学校での様子を聞く」が25%、「学校行事に参加する」が22.9%と出た。留守児童生徒でない家庭と比べると留守児童家庭の同居人は「健康と勉強の面」を、留守児童生徒でない家庭の同居人は「子どもと接する時間と学校との連携」に力を入れているともいえる。

同居人が監護人としてできることは、限定されていて、親のように躰などで厳しく言ったり、進路や悩み等に対して適切なアドバイスをするうえでは限界があるようである。龍井市での実態調査でも祖父母と一緒に暮らす子どもが主流であると確認できた。体力や知識の限界により、殆どの監護人は子どもを世話するのに苦勞していると龍井の教育関係者が教えてくれた。親と離れて暮らしている孫がかわいそうで、ついつい甘やかしてしまい、放縦に走ってしまう事例も少なくないとのことである。また、学校の行事にも行って聞いても分からないので、参加しないこともしばしばあるようである。ここでインタビューに応じてくれた祖母の声を聞いてみる。

親がこんな老人に子どもを任せて、多分毎日心配だと思う。子どもを考えれば心が痛くてどうしようもないが、出稼ぎによる送金が家計を支えているため、仕方がないことだ。孫が大きくなり、本当に一番良いのは親のそばで育てることだが、韓国で稼ぎも順調でないし、支出も多いだろうし、連れて行ったら、孫も出稼ぎもだめになるから・・・われわれとしては勉強とか指導する事はできなくて、ただただ孫の安全と健康に注意をは

⁸⁸ 注29、前掲載論文

かり、将来親に渡すまで温かく見守ることしかできない。

龍井市と教育行政は学校と連携して、2006年から韓国済州大学を卒業した心理専門家を招いて、監護人を対象とした講座を定期的で開催してきた。参加人数は250人から300人に達し、講座の内容も「どうやって子どもとのトラブルを解決するか、子どもの家出にどのように対応するか、留守児童生徒の対策、賢明な父母、優しい父母、サービス父母」など実生活に必要な内容が多いことから、2009年には参加者数が600人にも達し、熱い反響を起しているとのことである。

3-2. 韓国社会での取り組み

韓国でも朝鮮族の出稼ぎによる留守児童生徒の問題が社会の関心をよび、ロータリークラブ等社会奉仕団体が龍井市の‘学生の家’を訪問し、厨房設備の改修などを支援している。また、親が長期間帰国できない家庭について、子どもを親に合わせるために、韓国のメディアやボランティア団体が航空券と滞在費を負担して夏休み、冬休みを利用して、親の出稼ぎ先へ連れて行く取り組みも行われている。留守児童にとっては貴重な経験であり、親と直接会って、親の韓国生活を目にした子ども達は戻ってきてから、がらっと変わり勉強にも、生活にも力が入ると言われる。

韓国からの支援は中国との外交的な関係があり、公的には行われるものはない。ただ‘在外同胞財団’という外交部傘下の機関で同胞教育プログラムとして、毎年中国の朝鮮族教師を招いて、研修プログラムを運営しているが、その中に教師として子どもの心理的なケアをどう行うかという内容の研修は入っていると関係者が明かしてくれた。

本章のまとめ — 家族の「再発見」

朝鮮族の留守児童への対策は、国と行政が中心となって主に教育現場を中心に行われてきた。子どもに対する心理的な面でのケアをはじめ、留守児童への継続的な関心と管理、親子の絆を深めるための努力、同居人との連携などを通じて進めてきた。そして、もっとも代表的なのが‘学生の家’の運営と‘結対子’という取り組みである。前者は住み込みで子どもの生活面ばかりでなく、学習面での支援を行っているところであり、後者は「代理家長」としての役割を果たしている。形は違ってもいずれも家族を想定した、家族を再現した擬似家族として捉えることができる。

人の社会化に影響を与える3大要素として、家庭・学校・地域社会があり、それぞれは独立ではない。そのバランスのとれた教育の中で、子どもの知的水準に影響を与えるばかりでなく、道徳的な涵養を培い、人格を完成し、人生観と価値観を形成するに大きな影響を与える。その中で家庭は子どものために、監護、保護、教育、扶養等の機能を果たす。家庭では毎日の日々の生活の中で、子どもの生活や物質的な欲求だけでなく、精神的に道徳的に足りない部分を補い、自己統制が出来るよう、自我形成に必要な適切な教育を行うことが普通である。

朝鮮族の場合、大量の出稼ぎは「経済活動」は韓国で、「未成年者の子どもの教育」は本国でという家族機能の分離による脱地域的家族生活が形成されている。しかもこの家族形態と生活は今後も長年続く見込みである。残された子ども達の教育問題もはや私達が常識で認識している伝統的な家族像だけの戦略では済ますことができなくなっている。ここで「家族」ということについて改めて考えてみる必要がある。

朝鮮族の留守児童は親戚の家で、学校で、施設で、そして社会で家族を「再発見」したりする。前章でも取り上げたことのある留守児童出身Z氏の経験を紹介したい。

小さい時に親の出稼ぎとその他の事情があって伯父の家でその家族と祖父母と高校になるまで暮した。二つ年上の従姉がいたが、自分にとっては従姉が真の姉のように思われた。何でも相談し、かわいがってもらった。姉の存在で本当に自分が家にいるように思われた。姉が勉強もできるし、本が好きな影響もあって、自分もたくさん本を読むことができ、そのつながりで現在の日本留学までに来ている。姉がいたおかげで居心地が良く毎日家にいるのが楽しくて充実していた。

彼女のように親子分散による家族を以前に回復させることはすぐには難しいけれども、違う形で「家族」を作ることはできるのだ。現在送り出し地域ではこうした様々な形の「新しい家族」が現れている。「‘婆ちゃんをママと呼びたい’、‘代理父母叔母の愛’、‘愛で育った全託生」⁸⁹などは子ども達や保護者、そして現場の先生の立場から、実際の親のいない中、子ども達がいかに周りの人たちから家族愛を感じながら成長しているかが生々しく綴られている。こうした事例は現在の朝鮮族社会では多すぎて枚挙にいとまがない。

朝鮮族の家族は、核家族の形としては解体されている。しかし、4章の同居人の調査でも分かったように多くの朝鮮族の留守児童達は祖母・伯父・叔母・・・といった大家族によって支えられている。また、学校や地域社会では同じ立場の仲間達

⁸⁹ 出自:『ママが韓国へ行きました—朝鮮族子ども達の手記』2012、吉林新聞・仁川文化財団

や、‘学生の家’のようなところでの出会いを通じて助け合い、認め合いながら「家族」を感じるようになる。いわば想定家族といえるだろうか。もしくは‘結対子’活動を通じて先生という‘代理家長’や、全託施設のおばさんから親代わりになる擬似家族も現れている。

以上のことから朝鮮族の留守児童をめぐる「家族」を回復する方法は少なくとも四つあるということが出来る。第一に、本来の核家族とのコミュニケーションを密にすること。第二に、親戚などの拡大家族を通じて人間関係のネットワークを拡大してサポートを確保すること。第三に、‘学生の家’のように実際の家族とは全く別に、想定家族ともいふべき人間関係を獲得すること。第四に、‘代理家長’のように擬似家族を作ること、である⁹⁰。

子ども達が経験する新しい家族像は複雑で様々であるが、この「家族の再発見」と「家族の回復」によって、朝鮮族社会は学校・家族・社会という子どもの教育の3大要素間のバランスをとろうとしている。この新しい家族はまだその形が多様すぎて、周辺状況に敏感に反応しながら常に変化を遂げているため、全部を捉えることは難しいが、明白なのは20年の間、社会の底辺で出稼ぎによる親の不在を埋めながらも一つの家族として、黙々とその機能を発揮してきたことである。いくら学校教育が優れていても、それだけでは限界があるし、学校教育以外の家族そして、社会集団、組織等による教育機能に欠けていては不具にすぎない。

龍井市での2回の調査で最初から最後まで窓口役をしてくれた教育関係者の話を借りて本章をまとめたい。

現実的なことを考えると、公私⁹¹とも親の出稼ぎをやめさせることはできないし、今の状況に合う生活を送るしかない。今までの親の出稼ぎは農村や都市を問わず数が多い上に、長期間の滞在が多い。多分これからも続きそうだし、大変なことは大変だ。でも残った人たちが力を合わせて各方面から次世代の教育と生活を担うしかない。行政と地域全体が一丸となってできる限りの支援を行いたいと考える。出稼ぎに出ている親には子どもにこまめに連絡をすることと、子どもの全てに常に関心を持って見守ってほしいと伝えたい。

⁹⁰ 拡大家族とは、一組の夫婦と未婚の子だけから成る核家族に対して、祖父母や親戚等複数の核家族から成る家族の形態。想定家族とは、家庭環境の条件や状況を仮に設定して、家族の機能を働かせる形態。擬似家族とは、血縁に頼らず、他人同士があたかも家族のように繋がり、支え合う形態。

⁹¹ 実際延辺地域の経済は‘出稼ぎ経済’だと呼ばれるほど出稼ぎ労働者の送金に大きく頼っている。

第6章—終章

本論文は1990年以降のコリアンドリームが出稼ぎ本人、そして残された子ども達、送り出し社会にどういふ変容と影響を与えたかを考察したものである。出稼ぎ20年経った今も朝鮮族をめぐる送り出し社会と受け入れ先の状況は目まぐるしく変容を重ねている。進行中の現象についてある時点でその変容を捉えるということは容易なことではない。にも関わらず本論文では受入政策と出稼ぎ者と留守児童生徒、そして送り出し地域の取り組み4つの論点から変化の流れの中でもポイントとなるいくつかの時点に焦点を当てて、20年のコリアンドリームの変化を追究し、送り出し社会と受け入れ社会における出稼ぎの現在を明らかにしようと努めた。更にそれを通じて子どもの教育をめぐる家族や社会の戦略を浮彫りにし、出稼ぎを通じて朝鮮族が経験している家族の変容と複雑な家族生活を捉えようと目指した。

出稼ぎによる移動は送り出し社会ばかりでなく、受け入れ社会にも様々な影響を与えている。初期の経済的な豊かさと子どもの教育のためという出稼ぎ者本人の意思によって始まった韓国への移動は時間が経つにつれて、韓国政府の受け入れ政策の影響を受けながら変化を重ねてきた。出稼ぎの長期化や定住化傾向は送り出し地域の残された家族に影響を与え、特に子どもの教育において留守児童という社会的問題が浮上することになった。それを受けて送り出し社会は教育行政を中心に社会全体で留守児童の問題に積極的に向き合ってきた。その結果、家族の変容をもたらし、伝統的な家族の概念を変える多様な家族の形態が現れはじめたのである。家族分散は朝鮮族の中国と韓国を移動するトランスナショナルな生活へとつながる。また、「合法的に滞在し、自分の意思で自由に行き来したい」という朝鮮族の願望は韓国社会の学界や各民間団体の人道主義に立脚した主張を通じて、韓国政府にも強い追い風となり益々門戸の開放へとつながる。この一連のカテゴリーはドミノ現象のようにお互いに影響しあいながら今日まで至っている。

本章ではまず各論点についての総まとめを行い、トランスナショナルな生活の理論的な部分についての検証を行いたいと考える。

第1節 本論文のまとめ

1-1. 朝鮮族にとって韓国という国が持つ意味

まず朝鮮族の移動は「プッシュ」と「プル」理論のとおり、韓国と中国の経済格差によって始まった。中国における都市化の進展は過剰労働力を生み出し、韓国の経済成長は大量の労働力需要を発生させた。そこに中国政府の開放改革政策と1992年の両国の国交樹立は朝鮮族の移動に政治的、時代的背景を提供する。更に、1988年のソウルオリンピックの開催は朝鮮族に「母国」の存在を目ざめさせ、「韓国」という民族的な要素は母国への憧れとコリアンドリームの起爆剤となり、そこから20年の韓国への出稼ぎの歴史が始まったのである。

韓国という国は朝鮮族にとって夢を与える場でもあり、失望を与える場でもあった。20年経った今も韓国は彼らの生活を規定する絶対的な要素として位置づけている。かつては命までかけて渡航し、長期間の不法滞在の場でもあった韓国は現在は「経済活動の場」、「生活の場」、そして「家族揃って将来を夢見る場」に変わりつつある。そして、何よりも朝鮮族の夢を現実として実現してくれる「コリアンドリーム」の憧れの「聖地」でもある。

多くの出稼ぎ1世代は故郷に家を構えたり、子どもを留学させたり、初期の「故郷に錦を飾る」という目標は実現している。朝鮮族は単純労務に従事する一時的な出稼ぎ労働者として過ぎ去っていく立場に満足しない。今、彼らは親世代が構築しておいた資源に頼って、1世代から2世代を経て、3世代までの世代交代を行っている。更に、韓国という舞台を土台に、家族は更なる分化を遂げ、家族分散も更に広域的な様相を見せ、第3国へとその痕跡を拡大しようとする。

その道のりには常に韓国という存在が伴って来た。その中心に立っていたのが韓国政府の受け入れ政策と韓国経済である。受け入れ政策が変わる度に朝鮮族社会も笑ったり泣いたり悲喜が交差した。また、出稼ぎ経済に頼っている朝鮮族の家庭ばかりでなく、送り出し社会も韓国社会の景気の影響を直接受けていた。「韓国ソウルでクシャミすれば、中国延辺で風邪を引く」という流行語は韓国と延辺の関係をもっとも適切に表現した言葉である。

なお、韓国は出稼ぎ1世代ばかりでなく、現在も強力な吸引力を持って若い世代の移動を促している。若い世代の流入は、留学、就職、出稼ぎ、親の招請によるなど様々な形で現れ、それはまた韓国社会で階層分化を引き起こす。

1-2. 政策の変遷

受け入れ政策は益々開放の方向へと向かっているが、その過程は常に国益に立脚した政策の制定と朝鮮族の自由な出入国と滞在への願望との対立によって尖鋭化してきた。また、年齢制限を設けたり、家族同伴の出稼ぎを厳しく制限することで朝鮮族の定住化を防ごうとする韓国政府ともっと長く、安定した身分で滞在したいという朝鮮族との間でいちごっこをしながら、ともに進展してきたとも言える。

朝鮮族に対する韓国政府の受入政策には画期的な変革とも言えるいくつかの区切りがある。一つ目は2002年の不法滞在者に対する救済政策である。これにより約10年間続いた不法滞在身分から多くの在韓朝鮮族が合法滞在者になる変化をもたらした。2002年は朝鮮族に対する受入政策の分水嶺となる年でもある。二つ目は2007年の訪問就業制度である。これによって、無縁故の人でも韓国で合法的に就労できるようになり、本国との自由な往来ができるようになった。三つ目は2008年から現在の在外同胞ビザの漸進的な拡大実施である。これにより、高学歴の朝鮮族の流入等で在韓朝鮮族の階層も多様に発展した。

この三つの区切りによって、筆者は在韓朝鮮族の出稼ぎも第一次ブーム、第二次ブーム、第三次ブームと名づけた。第1次ブームは、1992年韓中修交によって直行航路が開通され、本格的な移動が始まった時期である。しかし、1992年から2002年までは在韓朝鮮族の殆どが不法滞在身分であったため、この時期は‘不法滞在朝鮮族の歴史’とも言える。第2次ブームは、2007年の訪問就業制であり、更なる出稼ぎブームを引き起こした。第3次ブームは、2008年から現在に至るまでの在外同胞ビザの漸進的な実施である。これにより、在韓朝鮮族は定住化傾向を見せているともいえる。受け入れ政策の特徴をみると規制から緩和へ、拒絶から受け入れへ、管理から包容へ、閉鎖から開放へと向かっていることが分かった。朝鮮族の移動も不法から合法へ、中高年層から若年層へ、単純労働から高学歴までと変化してきた。

しかし、韓国政府は朝鮮族の出稼ぎ者に対して、母国でお金を稼げるよう配慮はしているものの、常に滞在期間と制約条件を設け、家族の同伴滞在や連続しての長期滞在、定住化を防ぎ、本国に帰す方針をとってきた。在日コリアンや在米コリアンと同様に文字通りの在外同胞として、「自分の意思で自由に行き来できる」という朝鮮族の願望との対立は今現在も進行中である。にもかかわらず不法滞在時代の過去に比べれば韓国政府の一連の受け入れ政策の変遷は驚くべき進展であり、朝鮮族の国を跨る生活に道を開いてくれた点では高く評価すべきである。

一方で、韓国政府の定住化防止原則とは反する長期滞在や、現在の国益だけを考慮しての天平一律的な帰国期限設定と年齢制限、職種制限などによる新たな不法滞在の出現、資格取得ブームの弊害、本国に残された留守児童問題との関係、家族の呼び寄せなどによる定住化傾向もみられることから、政策の方針と朝鮮族の希望が沿わないなどの課題も残っていて、今後の受入政策の行方が注目される。

1-3. 出稼ぎの展開

不法滞在からの解放は出稼ぎ者の経済活動や生活、家族の形態、意識にも変化を与え、長期滞在や、出入国を繰り返すリピーター型長期滞在、更には家族の呼び寄せ等の定住化傾向まで見せている。韓国は経済活動を行う場として、中国は永遠の家として、どちらにも定着できないまま、両国間を往復する出稼ぎの恒常化が目立つ。副業としての短期型出稼ぎも出現している。長期滞在の原因は①受入政策の変化にある。規制から緩和へと変わったと言っても、変化が早いしまだまだ完全に定住を決めるには制約が多い。韓国での生活の先が予測できないから韓国でも定着できず、本国にかえってもこれと言った仕事場が見つからなく、同じく定着できず、いつかは故郷で落ち着いて暮らしたいと願いつつ、またもや韓国へ足を運ぶようになる。②経済的なことが挙げられる。ウォン安と、韓国での生活になれて支出が増え、出稼ぎも短期戦から長期戦に変わっているのである。韓国はもはや出稼ぎ場ではなく、生活の場になりつつあるのである。これに家族の合流や親戚合流による知り合いとの交際などで朝鮮族タウンを中心に独自の文化を形成しながら会合などの行事への参加も多く、出費も増えつつあり、なかなかお金が貯まらない現状である。特に韓国政府の出稼ぎ者の親族招請を許可することによって、家族との合流は長期滞在に大きく作用しているのである。③合法滞在により、気持ち的に余裕ができ、前のように忍耐しながらお金を稼ぐことだけに全力をかけることよりは、楽しみながら稼ぐという意識転換が見えてきた。出稼ぎ意識は来韓年数が短ければ短いほど強い。数年も経つとみんな韓国の生活に慣れてしまい、中国に帰っても生活できない。それでも、子どもや家族を残してきた人は両国を間を行き来する‘渡り鳥’の生活をするしかない。④更に滞在期間が長くなればなるほど、韓国社会での生活基盤や、仕事探しの連絡網、人とのネットワークなど社会関係が形成されている。それに韓国の本国より整えている社会的秩序や恵まれた気候や環境にすでに慣れて

しまつて、故郷に帰るのは彼らにとって再適応の過程であるとも言える。不便な生活に慣れなくて、1ヶ月もすればまた韓国での生活が恋しくなる。故郷との経済格差、故郷の深刻な失業率を考えると、できれば家族も韓国に呼び寄せ出稼ぎをさせたいと願っている人もいるようだ。

韓国は経済活動を行う場として、中国は永遠の家として、どちらにも定着できないまま、両国間を往復するトランスナショナルな生活へとつながる可能性は十分ある。ここに韓国政府の一連の受け入れ政策の緩和は更に彼らの滞在に拍車をかけている。自由な往来ができ、健康状態が悪化すると帰国して療養して、回復するとまた出稼ぎに出かけることが繰り返されている。彼・彼女らは中国での滞在期間を「金を使う時間」、「健康回復の時間」と表現している。経済活動は韓国で、子育ては中国での様態も明らかになった。

20年という歴史は在韓朝鮮社会にも変化をもたらし、多様な年齢層、多様な階層の出現によって、居住地域も主に3つのタウンに広がり、出稼ぎの目的も多岐に渡るようになっていた。出稼ぎ1世代は主に単純労働に従事したが、2世代、3世代には単純労働だけでなく、専門職から自営業、ホワイトカラーまで職業の分化が見えてきた。更に親世代を土台に子ども世代の第3国への進出も目立ち、朝鮮族の国境を越える移動は出稼ぎによって、益々その範囲を拡大していく。

1-4. 留守児童の現状

出稼ぎ者のこうした「わたり鳥」のような生活はそのまま本国に残された子どもたちに影響を与えるのである。留守児童の問題は、不法滞在から解放された2002年の直後の2003年を境にやや安定期に入ったと言っても、その数は依然として多く、様々な課題があると言える。更に2007年からの韓国への朝鮮族の渡航制限が緩和されたことにより留守児童生徒が増える趨勢にある。具体的な影響としては人口減少による学校数、学生数の減少、教師の流失、漢族学校への転校などが挙げられる。

留守児童の数が減らない原因は親の出稼ぎ先での長期滞在とリピーター、定住化傾向が一番の要因として挙げられる。他に、親の出稼ぎ目的の変容、更には家族形態の変容からでもその要因を見出すことができる。これに韓国政府の未成年者に対する受入政策の遅れにもその原因がある。とりわけ、多くの子どもは親の滞在形態の影響を受け、成長して成人になるまでずっと留守児童生徒のまま「親の経済と生

活の場は韓国、子育ては中国」という環境の中で生活しているのが見えてきた。留守児童はそのまま成長して、韓国で留学、または結婚、出稼ぎ、就職という形で長い道のりを経て親世代と再会し、再結合する形で伝統的な家族を取り戻し、長い時間をかけての家族の韓国への移住を果たしている。また、第3国に進出した子どもとの間でのより複雑な国を跨る移動と、一部ではあるが、未成年者の子どもの短期型移動も見られるようになった。親の移動は子どもの移動も引き起こすという結果を示唆する現象である。

龍井市の留守児童の特徴としては以下の点が浮かび上がった。①留守児童はもはや‘特殊な群体’から‘主流群体’へと転換していて数が多く、普遍的な現象になっている。その原因は龍井市が持つ地域特性と関連があると分析する。②出稼ぎの世代交代による低学年の留守児童の集中が目立つ。③親との分離の時間が長く、殆ど韓国への出稼ぎによるものである。④祖父母による隔代教育が目立ち、家族の出稼ぎパターンにより、未成年の子どもは残された家族構成員が協力しながら面倒をみる。⑤韓国の影響を多く受けている。

一方で留守児童が抱えている問題としては、子どもの勉強に対する親の期待が高く、子どもには勉強に対するプレッシャーとライフチャンスに欠けている。

他方で、子どもへのアンケート調査だけでは留守児童の問題点のはっきり見えてこなかった原因として、留守児童問題の量から質への転換を挙げられる。これは2003年という出稼ぎの合法化とも関連があるが、出稼ぎに対する子どもの認識の転換と子どもの教育についての朝鮮族社会の戦略から解釈することができる。

1-5. 子どもの教育をめぐる戦略

1-5-1. 親の越境に対応する教育の可能性

朝鮮族の場合、出稼ぎ20年を通して変わらないのが、親子間分離による留守児童の問題である。しかも、その数は減るばかりか、出稼ぎブームが続く限り、韓国政府の家族の呼び寄せを厳しく制限している限り、永遠と続くと思われる。留守児童も‘特殊な群体’から‘主流群体’⁹²として、朝鮮族社会の普遍な現象となった。

⁹² ‘主流群体’と‘特殊群体’：語源は中国語。先行研究の朴今海(注12前掲載論文、2012)で使った言葉だが、大体‘主流群体’はマジョリティとして、‘特殊群体’はマイノリティとして理解することができる。

朝鮮族の親は、国境間越境を繰り返すという生活戦略をとっている。その中で、子ども達の教育をめぐる「親の帰国か、子どもの同行か」と議論することは現実に即していない。4章と、5章ですでに出稼ぎの長期化、恒常化が進む中、送り出し地域は留守児童という出口の見えない課題に向き合っており、親の空席を埋めるためにどのように制度を整え、どのように教育を改変してきたかを検討した。その結果、子ども達と、家族と地域社会がそれを現実として受け入れて、子どもは必ず伝統的な家族の中で育てるという認識から脱皮して、各自の立場に立っていかん真剣に取り組んできたかという教育戦略が見えてきた。

まず、子ども達の親の出稼ぎに対する姿勢の変化にある。子ども達が親の出稼ぎについて理解していて、親と離れていることを現実として受け入れ、親のいない生活に慣れ始めたことである。一部の子供は「親が本当に子どもの成長と将来を考えて思いやった結果として、出稼ぎという経験をせざるを得なかったということ」を納得している。これは韓国という国の影響が子ども自身の人生を確かに多彩で豊かなものにしたいということが実感できることにつながり、子ども達を被害意識から救うことができる。そして、子どもが現実から逃避するのではなく、留守児童ということに自信をもって向き合い、それに適応するために自ら心構えをしながら学校生活、日常生活に臨むことができる。そこに至るまでに子ども達自ら多くの困難に向き合わなければならないが、これは周辺の大人の力が必要である。

次に、通信技術の発達に頼って、異国にありながら親子間の絆を回復するためのコミュニケーションの取り方から教育戦略をみる。20世紀から21世紀にかけて飛躍的に進んだ情報・交通網の世界的な普及とそのコストの大衆化は、韓国と中国という二つの国に生活する家族の間でさえも日常的なコミュニケーションを可能にしている。1990年に本格的に出稼ぎが始まった当初の国際電話通話料では、中国国内に電話できるのは月に一度ぐらいが平均的だったのに対し、現在は格安国際電話サービスや、インターネット、スマートフォンの無料アプリまで、ほぼ毎日リアルタイムで家族と会話することが経済的・技術的に可能になっている。特に韓国は金大中政府の1998年のIT強国電子政府の推進によって、どの国よりもインターネットの普及率が高く、どこでも気軽にネットに繋がることができる便利さから、朝鮮族の家族間の電話を通じた密なコミュニケーションを可能にしたといえる。

このように頻繁な情報交換を家族間で行うことによって、異国に家族と切り離さ

れて生活しているという感覚は確実に薄らいでいる。これは新しい家族像ではなく、伝統家族の持続という形態として捉えることができる。

1-5-2. 子どもの移動を念頭においた教育

離れている親子の絆を深めるために、夏休みや冬休みを利用して、本国にいる子どもが親のところに行く「逆帰省」ラッシュの現象が現れた。韓国政府の未成年者に対する配慮により近年から移動可能になったことである。更に2010年からの未成年者に対する受け入れ政策の転換⁹³によって、制度上出稼ぎの親について行く事が可能となった。子どもの短期移動は始まったばかりでその数も少ないが、今後このような移動は十分拡散する可能性がある。その時に備えた受け入れ社会での子どもの移動にとまなう教育システムの構築は、朝鮮族家族個人や送り出し社会だけでは実現できない。韓国社会との連携は不可欠である。

1-6、国を跨る生活

朝鮮族にとって、送り出し地域は「心の故郷」として、癒しの場所、療養する場所、健康回復の場所として認識されている。これに通信技術、交通手段、コミュニケーションの発達によって、本国にいる家族と繋がったまま生活することができる。ここに、未成年者の子女がいる場合は両国間を往復する生活は更に頻繁になる。生涯韓国で働いて、老後になったら帰国するという出稼ぎの恒常化はトランスナショナルな生活へとつながる。

また韓国での生活形態の変化に留まらず、朝鮮族の移動圏が拡大する傾向も見受けられるのは重要な点である。家族のいずれかが韓国からさらに第3国まで進出した場合、彼らの生活は3つの国境を越えたものとならざるを得ない。主に親の出稼ぎによる子どもの第3国への進出が挙げられるが、親達の子どもの教育に対する期待と教育方針（海外留学をさせる）から見れば、この現象は子ども達の海外進出をベースにして、更に拡大していくと予想できる。韓国での世代を重ねるにつれてこの現象は益々多岐にわたり、激しくなると考える。なぜならばそれを支えるための経済的基盤と前世代の蓄積した人的関係によって、新たな国境を超えるネットワークが形

⁹³ 訪問同居ビザF-1によって、出稼ぎ親に同行することが可能となった。

成されるからである。

第2節 出稼ぎがもたらした課題と理論への検証

2-1. 残された課題と本論文の主張点

国境を越えた人々の生活の営みを通じて、母国や現に生活を営む異国の社会に様々な影響を与えているようになっている。受け入れ国韓国政府が抱えている政策の課題、在韓朝鮮族の増加と今後の更なる門戸の開放による社会統合の問題、送り出し地域の数の減らない留守児童の問題など、これらはコリアンドリームがもたらした課題である。

繰り返しになるが、経済的な豊かさと子どもの教育という素朴な夢から始まった朝鮮族の出稼ぎブームは、そのあと韓国の受入政策の波によって大きく変動した。その変動を受け、残された子ども達は留守児童という結果を招来する。留守児童の問題を解決するために、送り先では必死で対応に取り組んでいるが、留守児童の数の面と、家族分散の時間の長さは問題の根本的な解決にまではつながらないままである。出稼ぎ者の殆どは家族のために、子どものために行かざるを得ないという。出稼ぎに行かないと経済的な貧困問題があり、行く家庭には残された留守児童の問題が残る。教育現場でも様々な事情を持っているクラスの複雑な現状への対応に戸惑っている。

現在の朝鮮族家族の形態はこの20年間大きく変わって来ている。一番目立つのが、親の経済活動場所は韓国、子育ての場所は中国という形態である。こうした形態の家族は留守児童が成長し、親が韓国へ呼び寄せたり、もしくは本人が親元へ行ったりする形でやっと韓国で再結合を達成するケースを今回の調査で読み取ることができた。普通先行研究で見る出稼ぎによる家族分散というのは家族の再会によって解消できるか、もしくは再会が出来なくても分散家族が各自の周りの有効資源を利用して適応へと向かうのが一般的であるが、朝鮮族の場合は子どもが成長するまで適応できず、長い道のりを経て親と再会を果たすことでやっと家族分散による危機が解消できる現象が見られる。こうしたことから家族分散による家族の変容はその対象が未成年者である場合は、再結合を果たすまではずっと変容のままいるのではないのではと推察する。

朝鮮族の出稼ぎによる家族の変容は出稼ぎの状況によって、分散して、合流して、

また必要に応じて再構成したりしながら変容を重ねているが、唯一未成年者である子ども達は分散という変容のまま成長していくのが最大の課題として残っている。

送り出し社会の取り組みや、新たな家族の出現等によって、その穴は埋められているように見えるが、その「家族回復」の機能がいつまで続くかは予測できない。伝統的な家族が必ず子どもの教育に良い結果を与え、家族分散は必ず子どもに悪い影響をもたらすとは言い難いが、少なくとも長い間人類が辿ってきた歴史的経験から見る限りでは、今現在の朝鮮族の家族の形態は幼い子どもにとって必ずしも提唱すべき形とは限らない。時代がいくら変わっても子どもの教育において伝統的な家族に勝るものはないと思う。やむをえない事情で、それに似た様子で補うことはまったく無しよりはよっぽど良いとするが、そうかと言ってその「補い」が主流になったかのように新たな形の家族を主張するのには危険が隠れている。筆者が一番憂慮するのもこれである。「国際化、都市化、トランスナショナル化に捉えすぎて、朝鮮族が華僑・華人のように世界で活躍できる国際人になる絶好のチャンスとして捉えすぎて、その背後にあるもっとも肝心な昔ながらの家族間の伝統や、絆、礼儀を強調し、子どもの教育を何よりも重視してきた美德が時代遅れと見なされ、埋もれてしまう」のではないかということである。伝統的な家族の機能を保つことができるような道があれば、その道が険しくてもその方向へ進めるよう朝鮮族自身も送り出し社会も受け入れ社会も努力すべきである。そして、そこからだめなところは各分野で力を合わせて支えあう形が一番理想的である。現在のままでは送り出し社会の残された家族、学校教育、地域社会にかけられた負担があまりにも過重すぎて、何時の時点で、その限界が来るかは分からない状態である。

一言でまとめると、「朝鮮族の親子の家族分散は家族解体にはならない。しかし、普通の家族分散は一時的で終わるのに対し、朝鮮族の家族分散は長期にわたる事が特徴である。そして、その行方は昔の家族分散前の形に戻れなく、再結合が不透明、又は長期間の離散、子どもが成人後の違う形での再結合とつながる」。こうした変化は家族の価値観の変化がなしでは成り立たないことであり、それを探ることは今後のもう一つの研究課題となり得る。

2-2. トランスナショナルな生活と課題

今までの考察を通じて、朝鮮族は子どもの教育、家族間生活を通じて中国と韓国そ

して、第3国を行き来する距離という物理的な面ではトランスナショナルな生活につながっていると解釈できる。しかし、真のトランスナショナルな生活が成り立つにはどのような条件が必要なのかという角度からもう一度顧みる必要がある。朝鮮族の今の移動と彼らが営んでいる生活はトランスナショナルな生活であるかどうかの問いに、今回の調査と研究を通じて研究者はそのトランスナショナルな生活の背景と機能から解釈したい。

まずトランスナショナルな生活に必要な背景として、普通の人の移動であること、交通・輸送手段の発展、通信技術の発達、受け入れ地域での外国人の社会的地位の改善が挙げられる。朝鮮族は国家間の政治・経済・社会のグローバリゼーションとは違う普通の個人が、普通の生活をするための越境による移動である。また、直行便や通信技術の発達によって、国を行き来する条件や家族とのつながりが容易になり、短時間で移動することも、頻繁に本国の家族と国境を越えたコミュニケーションを取ることもできている。つまり、本国と移動先の国は客観的には離れていても、主観的には身近な場所にいると言える。そして、韓国で中国籍を持ちながら、敢えて帰化しなくても、労働の生活上の条件が法律範囲内では生活者としての住民の地位がある程度保たれている。こうした視点から、朝鮮族のトランスナショナルな生活を送るための背景は整ったと言える。

しかし、トランスナショナルな生活が働くべき機能の側面から見ると朝鮮族の今の生活は課題が多く、まだトランスナショナルな生活までには至っていない、その前段階だと言いたい。

なぜなら本当のトランスナショナルな生活は送金を通じた経済的な機能が働いていなければならないことと、トランスナショナルな政治的機能、トランスナショナルアイデンティティの再構成、そして、トランスナショナルな家族生活、最後に彼らのトランスナショナルな生活世界を支えるホスト社会のシステムがなければならないと筆者は認識している。

現在の朝鮮族の場合は本国に送金はしているものの、その金額だけを根拠に開発への効果を論じることは出来ない。彼らの送金は、本国に残してきた家族に対する仕送りが中心で、当然その使い道も「子どもの教育費」や「家の新築」など各家計の事情に応じて異なる。実際延辺州商務局の調査によると、出稼ぎのうち帰国後創業した人は15%に過ぎないという。小規模な送金を元手として、事業への投資や雇用

の創出といった持続的で生産的な開発効果を高めるには、出稼ぎ者とその家族に対する制度的な支援が必要となるが、延辺地域はまだそのようなインフラは構築されていない。

次に在韓朝鮮族にとって、まだホスト社会で政治的な機能を果たせる権利を持っていない。3つ目に、ホスト社会での独自の文化形成であるが、朝鮮族による団体やタウンは形成されているものの、韓国社会で独自の文化を主張する機能が働いているとは限らない。なぜなら韓国政府は家族移民によって独自の文化を形成し、政府に対して権利を主張するようになり、政府としては社会統合を行うための統治システムの整備の必要性が出てくるのを恐れて、それを事前に防止するために、朝鮮族の長期滞在を抑制しながら、家族の移住を許可しないことで民族集住地と相互ネットワークを通じた独自の文化形成の余地を未然に防止しているからである。4つ目にトランスナショナルな家族生活であるが、それはあくまでも自由な意思での移動でなければならないと考える。留守児童生徒の問題等本人の意思とは関係なく離散している形ではまだトランスナショナルな家族生活とは言えない。未成年者ばかりでなく、朝鮮族の韓国滞在期間は韓国政府の政策によって変わるものである。5つ目に、彼らのトランスナショナルな生活世界を支えるホスト社会のシステムの欠如である。特に子どもを伴うトランスナショナルな生活世界に対応できる教育システムの構築が整備されていない。未成年者も同行できる制度が作られている以上は、必ず子どもを同伴する移動が発生するはずだ。

朝鮮族のトランスナショナルな生活をするための条件は整えている。しかし、真のトランスナショナルにつながるためには何よりも彼らの生活世界を支える両社会の様々な制度やシステムが構築されて、国境を越える彼らの現実と対応していかなければならない。

様々な制約があるにもかかわらず、朝鮮族は今この時点でもグローバルの潮流に乗って移動し続けている。しかもその動きはあまりにも力強く、巨大なエネルギーとなって朝鮮族社会全体に影響を与えている。過去の中国への開拓移住が民族的凝集力を持つ閉鎖的な移動だとすれば、今日の彼らの移動は強力なネットワークを持ちながら国と国の間を往来するより複雑で、より多様な開放的な移動に向かっている。朝鮮族の家族関係は、家族の移動に強く規定されている。子どもたちも学校教育などの社会環境によって、その生活が強く規定されるだけでなく、家族構成員の

流動性の高さによっても規定されている。移動によって生活世界が更に拡大して行き、ライフチャンスも更に広がるという環境の中で、子ども達は将来を展望するのである。これらの生活世界を支える制度やシステムは一国単位では解決できない。国家という枠組を超えなければならないより深く、より高い次元の対応が必要となることを示唆する。

朝鮮族の出稼ぎは今後も長く続くと予想される。朝鮮族社会が今後どのように変化していくかその帰趨が注目される。そして、朝鮮族達が家族揃って内外、名実ともに真のトランスナショナルな生活をしながら国際人として活躍できる姿に期待をかける。

参考文献(五十音順)

単行本

日本語文献

- 奥山、田巻、北川編著『階層・移動と社会・文化変容』文化書房博文社、2005年
- 権香淑『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治』彩流石、2011年
- 中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済研究所、2006年
- 戸田郁子『中国朝鮮族を生きる—旧満州の記憶』岩波書店、2011年
- 韓景旭『韓国・朝鮮系中国人—朝鮮族』中国書店、2001年

韓国語文献

- イエ・ドンゲン外『朝鮮族3世のソウル物語』白山書堂、2011年
- 吉林新聞・仁川文化財団『ママが韓国へ行きました—朝鮮族子ども達の手記』ボリ出版社、2012年
- グォン・テファン『中国朝鮮族社会の変化—1990年以降を中心に』ソウル大学出版社、2005年
- 朴光星『世界時代中国朝鮮族の超国家的に移動と社会変化』韓国学術情報、2008年
- 朴今海『中国朝鮮族教育の歴史と現実』京仁文化社、2012年
- 朴・ヨンヒ『満州の子ども達』文学村、2011年

中国語文献

- 全信子『同源異流の文化情結—中韓国際婚姻中の朝鮮族女性の婚姻移民現象探求と分析』学苑出版社、2012年
- 延辺大学人文学院社会学系『社会転型と民族発展』、延辺大学出版社、2012年
- 全国妇联儿童工作部『农村流动儿童状况调查报告』社会科学文献出版社、2011年
- 谢妮·申健强·陈华聪『农村留守儿童教育现状研究』、2010年

論文及び学会誌

日本語論文

- 小内 透「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」、北海道大学、『調査と社会理論』研究報告書 24、2007 年、pp1-11
- 辛誉眞(2010)「韓国の多文化政策に関する批判的考察」、慶応義塾大学大学院、政策・メディア研究科、修士論文
- 白井 京「韓国の外国人労働者政策と関連法制」『外国の立法』通巻 231 号、東京:国立国会図書館調査及び立法考査局、2007 年
- 鄭 雅英「韓国の在外同胞移住労働者—中国朝鮮族労働者の受け入れ過程と現状分析」『立命館国際地域研究』第 26 号、2008 年 2 月、pp78-95
- 田巻松雄「アジア域内の労働力移動と非合法移民」、奥山、田巻、北川編著『階層・移動と社会・文化変容』文化書房博文社、2005 年、pp15-39
- 陳小君「中国農村における留守児童問題について」『家庭教育研究』16、筑波大学、2011、pp35-41
- 張京花「中国延辺地域における朝鮮族社会の変容—韓国への出稼ぎを中心に」宇都宮大学国際学研究科修論、2010 年
- 出羽孝行「中国朝鮮族の民族教育の現状に関する実証的研究」龍谷大学大学院文学研究科博論、2007 年
- 登坂 学「中国農村における‘留守児童’問題について」九州保健福祉大学研究紀要 10、2009 年、pp67-77
- 尹秀一「中国における海外出稼ぎにともなう留守子女の問題—延辺朝鮮族自治州を中心に—」『創価大学別科紀要』20、2010 年、pp15-31

韓国語論文

- キム・フム「在韓朝鮮族の生活の変化に関する研究—1990 年代と 2002 年以降の在韓朝鮮族の生活の差についての比較」ソウル大学修士論、2012 年
- イ・ドンフン、キム・ナムウ「多文化社会進展による移民政策の正しい方向—段階的定住化体系の導入」大韓民国法務部移民政策分野優秀論文、2009 年
- イ・ジンヨン「韓国で生活している中国同胞」在外同胞財団、2010 年

イジンヨン・イヘギョン・キムヘンミ「訪問就業制に対する実態、及び同胞満足度調査」
法務部、2008年

イ・ジンヨン「中国朝鮮族と韓国の移民政策」『朝鮮族研究学会誌』朝鮮族研究学会、
2011年

イ・ヘギョン「外国人労働者雇用に関する研究:国内労働市場に及ぼす影響」『韓国社会学』
28号(ソウル:韓国社会学会、1994年、pp89-113)

朴光星「韓国の朝鮮族労働者の流入と定着、適応に関する研究」ソウル大学社会学科修
士論文、2002年；朴光星、注2前掲載論文、2008年

中国語論文

朴今海「朝鮮族の国を跨る人口移動と留守児童の教育問題」『社会転型と民族発展』、延
辺大学出版社、2012年、pp122-139

湖北医药学院「关于农民工留守子女教育问题」2011年

湖北医药学院「关于农民工留守子女教育问题」<http://www.93576.com/>、2010年

段成荣、周福林「我国留守儿童状况研究」『人口研究』第29卷第1期、2005年

邹亚文、何杰「吉林省朝鲜族人口现状及变动因素分析」『第五次全国人口普查科学讨论会
论文集』、2003年

新聞・インターネット資料、政府統計資料

大韓民国法務部出入国外国人政策本部統計資料

大韓民国行政安全部資料室

大韓民国統計庁 e-国指標

大韓民国電子政府のパブリックコメントシステム

中華人民共和国国家统计局人口普查資料「第六次人口普查主要数值公报」

吉林新聞「海外出稼ぎ延辺經濟を牽引する基幹産業の役目を十分に果たしている」2008
年7月29日

中国民族報電子版「留守児童心理問題需要“三位一体”来解决 一訪延辺大学心理諮問研
究中心主任朴婷姬」、4面、錢麗華記者、2007年8月17日版。

朝鮮族ネット「韓国不況の中、労務者たち帰国の兆し」2008年11月18日記事

連合ニュース「F-4 取得朝鮮族同胞子女の来往急増」2013年1月3日ニュース、{ゾグロ
メディア http://blog.zoglo.net/board/read/m_shehui/141790/705/40、2013年9月3日検
索}

連合ニュース「旧正月に韓国行ー新たな風習」 2010年1月26日

連合ニュース「韓国門戸開放に中朝鮮族離婚率激減」2010年11月17日

初出一覧

本論文は、次のような既発表及び発表予定の小論文によって成ったものである。

第1章 問題の所在と研究の枠組 書き下ろし

第2章 韓国における受け入れ政策の変遷

- ・韓国在外韓人学会『在外韓人学会誌』 2014年1月投稿予定

第3章 韓国における出稼ぎの変容

- ・「在韓朝鮮族の長期滞在と定住化傾向について」
日本朝鮮族研究学会『朝鮮族研究学会誌』3号2013年9月投稿 査読に従って修正中
- ・「韓国における中国朝鮮族の出稼ぎの変容と家族生活」
日本比較文化学会『比較文化研究』 2013年12月投稿予定
- ・口頭発表予定：朝鮮族研究学会2013年全国大会(2013年12月15日、日本大学)

第4章 子どもの教育への影響

- ・東アジア日本学会学会誌『日本文化研究』第46集掲載、査読有り(平成25年4月)、
PP 120-142 「中国朝鮮族の出稼ぎによる人口移動が子どもの教育に与えた影響
—延辺州龍井市の事例を中心に—」
- ・口頭発表：朝鮮族研究学会「2013年度全国学術大会及びシンポジウム」
日時：25年3月16日 10:00～10:25 場所：大阪経済法科大学東京麻布セミナー
ハウス2階大会議室、第一部学術報告「中国朝鮮族の出稼ぎによる留守児童の現
状と課題」
- ・宇都宮大学多文化公共圏センター年報第5号掲載(平成25年3月)、PP 161-175
「中国朝鮮族の出稼ぎによる留守児童生徒の実態調査報告—延辺州龍井市の小中
高校へのアンケート調査を中心に—」

第5章 留守児童の対策と家族の再発見—送り出し社会の取り組み

- ・「送り出し社会の取り組みから見る中国朝鮮族留守児童の対策と家族の再発見」
日本異文化教育学会『異文化教育学会誌』2014年 2月投稿予定

第6章 終章 書き下ろし

謝 辞

本研究は、著者が宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程在学中に、同大学国際学部田巻松雄教授の指導のもとに行ったものであります。この研究を博士論文として形にすることができるまで、問題意識から、テーマの設定、臨地調査、作成に至るまで時には厳しく、時には優しくご指導を頂き、深く感謝申し上げます。また本論文をまとめるにあたり、終始温かい激励とご指導、ご鞭撻を頂きました本大学副指導教員の丁 貴連先生と中村祐司先生、学位論文審査において、本論文をご精読頂き、有用なコメントを頂きました松金公正先生、佐々木史郎先生にも心より感謝申し上げます。

本論文の執筆と完成にあたり、立命館大学経営学部経営学科の鄭 雅英先生には構成の訂正から、日本語の修正、博論としての体裁など、細かいところまで何回も推敲して頂き明瞭な文章にしてくださいました。丁寧かつ熱心なご指導にこの場を借りて深く感謝の意を表します。また、朝鮮族研究学会の各先生方には真剣に議論を交わしていただき、貴重な御教示とアドバイスを頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

調査とアンケートを進めるにあたり、韓国と中国の多くの方々にお世話になりました。一々名前を記すことはできませんが、貴重な時間を割いてご協力いただきました皆様には感謝の念にたえません。また、同じゼミの先輩、後輩の皆さんとは常に議論を通じて刺激を頂き、多くの知識や示唆を頂きました。本当にありがとうございました。

韓国での安定した仕事を辞め、日本への博士留学を決めたときにも、その後の日本での生活においても様々な面で支えてくれている千葉県市川市の笠原 智部長、友人若狭成典さん、そして千葉光行前市川市長、前行革の皆様にも大きな励みとなったことをここに記して、心より厚くお礼申し上げます。また、安心して論文が書けるようまとまった時間と仕事の便宜を図ってくれた東京都豊島区役所外国人住民グループの野本係長をはじめ、同僚の皆様にもただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

最後になりますが、中国で癌と戦いながらも娘の学業に支障が出ないように陰で温かく見守り続けてくれている父金世峰と一人で父の介護に尽くしている母蔣玉子に、そして遠いアメリカで学位授与を待ちかねている姉二人にも深く深く感謝します。三十路後半にして無謀な日本での博士学位挑戦を快く承諾し、物心両面から応援しながら一人で韓国で頑張っている夫権五珍と親の都合で自らも家族分散と越境生活を余儀

なく経験している愛娘權珉湊にも重ねて感謝します。いつも支えてくれて、日本の中学に良く適応してくれて、そばで勇気とエネルギーをくれてありがとう。

博士論文は自分にとっては新たな道への挑戦であり、自分探しの道でもありました。本論文を完成するに際して、改めて自分自身こそ朝鮮族の激動の移動の歴史の真ん中に立っているのを全身で実感しながら、今後も研究室での経験を心の糧に、研究者として人の役に立っていく所存です。これで長い間常に自分の意識の片隅で自分を束縛してきた博士号への執念から解放され、新しいスタートラインに立って、力強く前へと一步を踏み出すことができることを願いつつ、御礼の言葉とさせていただきます。

2013年 12月

さいたま市浦和自宅にて

金 英花

添付：中国龍井市での質問票(日本語、朝鮮語、各一部)

中国朝鮮族児童の日常生活と学校生活、周りの人との関係に関するアンケート

みなさん、こんにちは。

この質問紙は近年朝鮮族社会で起きている出稼ぎブームの中、皆さんが日常生活と学校生活をどう過ごしているか？また周りの人たちとどういう関係を作りながら生活しているかを知るために行うものです。

従いまして、みなさんご自身が考えて、感じるそのまま素直に答えてくだされば、大丈夫です。みなさんから頂きましたご意見は秘密にされ、誰にも知られることがなく、研究のデータとして使われるだけです。一切ご迷惑をおかけすることはありません。

もし、分からないことがありましたら、先生に聞いてもかまいません。

多少時間がかかっても、漏れる部分がないように、自分の考えのそのまま、誠実にお答えくださいますよう、よろしくお願いいたします。

お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

日本宇都宮大学院国際学研究科

博士後期課程

指導教授：田巻松雄

研究者：金英花

連絡先：090-***-****（日本携帯）

133****（中国携帯**10.27～11.3まで通話可能）

メールアドレス：kj27971@yahoo.co.jp



I まず、皆さんご自身の基本情報に関する質問です。よく読んで該当する項目に“✓”表示、又は“内容”を直接書いてください。

1. 性別は？

- ①男性 ②女性

2. 年齢は？ 満 才

3. 今何年生ですか？

- ①中学一年生 ②中学二年生 ③中学三年生 ④高校一年生 ⑤高校二年生 ⑥高校三年生
⑦小学六年生 ⑧小学校五年生

4. 家族は？

- ①一人 ②二人 ③三人 ④四人 ⑤五人以上

5. 皆さんは今誰と生活していますか？

- ①父と母 ②父 ③母 ④祖父母 ⑤親戚 ⑥兄弟又は一人
⑦その他_____

6. 現在どこに住んでいますか？

- ①実家 ②祖父母の家 ③親戚の家 ④知り合いの家 ⑤寮 ⑥伝托施設 ⑦その他_____

7. 両親の中で海外に出稼ぎに行った経験はありますか？

①いる ☞

【質問7-1】から【質問7-12】まで答えてください。

②なし ☞

【質問7-13】から【質問7-14】まで答えてください。

質問7で①いると答えた方のみ答えてください

【質問7-1】. 親の出稼ぎ先はどこですか。

- ①韓国 ②日本 ③アメリカ ④ヨーロッパ ⑤その他_____

【質問7-2】. 親又は片親と離れた経験は何年ですか

- ①1年以下 ②一年 ③2年 ④3年 ⑤4年 ⑥5年以上 ⑦10年以上

【質問7-3】. 出稼ぎに出ている親とはどうやって連絡を取っていますか。

- ①携帯（電話） ②携帯（メールやメッセージ） ③一般電話
④パソコン（メールやメッセージ） ⑤誰かを通じて ⑥会う ⑦連絡していない ⑧複数回答

【質問7-4】. 出稼ぎ先の親との連絡頻度は

- ①毎日 ②週に数回 ③月に数回 ④半年に数回 ⑤年に数回
⑥連絡していない

【質問7-5】. 出稼ぎ先の親との連絡の際の主な話題は

- ①勉強 ②健康 ③小遣いなど生活の面 ④その他_____ ⑤連絡していない

【質問7-6】. 出稼ぎ先の親とは年に何回会いますか？

- ①1回 ②2回 ③3回 ④その他___年___回 ⑤会っていない

【質問7-7】. 親とはどうやって会いますか？

- ①親が帰国する ②私が親のところに行く ③両方ある ④会ったことがない

【質問7-8】. もし親と一緒に出稼ぎ先での生活が可能とすれば、出稼ぎ先で勉強したいですか？

- ①とても行きたい気持ちである ②どちらかといえば行きたい気持ちである ③あまり行きたくない ④行きたくない ⑤よくわからない

【質問7-9】. 現在一緒に住んでいる人との関係は？

- ①非常に仲がいい ②まあまあ仲がいい ③普通である ④あまり仲がよくない ⑤仲が悪い
⑥どちらでもない

【質問7-10】. 現在一緒に住んでいる人はあなたに対して良く理解してくれますか？

- ①充分理解してくれる ②まあまあ理解してくれる ③普通である ④あまり理解してくれない
⑤全然理解してくれない ⑥どちらでもない

【質問7-11】. 現在一緒に住んでいる人とはよくトラブルが発生しますか？

- ①よくある ②たまにある ③ほとんどない ④ない ⑤なんとも言えない

【質問7-12】. 現在一緒に住んでいる人とトラブルが発生した時、どうしますか？

- ①何も言わず、従う ②怒りを感じるが、従うほうだ ③喧嘩する ④親に訴える ⑤無視する
⑥何かの行動で解消する ⑦その他_____

質問7で②なしと答えた方のみ答えてください

【質問7-13】. 親がこれまで出稼ぎに行っていない理由は何だと思えますか？

- ①行く方法が分からないから ②家族と私の教育のために ③家族と周りの反対で
④生活が豊かだから、行く必要がない ⑤健康上の理由で行けない
⑥出稼ぎに行く経費がないから ⑦その他_____

【質問7-14】. 親がこれまで出稼ぎ行っていないことについてどう考えますか？

- ①とてもよかったと思う ②どちらかと言えばよかったと思う ③よくなかったと思う
④どちらかと言えばよくなかったと思う ⑤何ともいえない

II 次は皆さんの日常生活と学校生活についての質問です。よく読んで該当する項目に“✓”表示、又は“内容”を直接書いてください。

8. あなたの家庭の経済水準はどうですか？

- ①貧困 ②比較的貧困 ③普通 ④割と豊か ⑤豊か

9. 一ヶ月の小遣いはいくらですか？

- ①100元以下 ②100元～500元 ③500元～1000元 ④1000元以上 ⑤なし ⑥その他_____

10. 小遣いは主にどこに使いますか？

- ①衣服 ②食料品 ③ゲームなどの娯楽 ④勉強 ⑤友達との遊び ⑥その他_____

11. 今一番夢中になっていることについて、何でもかまいませんので自由に書いてください。

12. 成績はどうですか？

- ①優秀 ②中より上 ③中 ④中より下 ⑤良くない ⑥その他_____

13. 学校での勉強生活は楽しいですか？

- ①とても楽しい ②楽しい ③普通である ④あまり楽しくない ⑤全然楽しくない ⑥どちらでもない

14. あなたの勉強に対する親の期待は？

- ①中学の義務教育卒業レベルまで期待している
②高校卒業レベルまで期待している
③中専（短大）卒業レベルまで期待している
④大学卒業レベルまで期待している
⑤大学以上の学歴レベルまで期待している ⑥その他_____

15. 通学態度はどうですか？

- ①ちゃんと毎日通っている
- ②どちらかといえば、まじめに通っているほうだ
- ③時々さぼったりする
- ④よくさぼる
- ⑤半分以上は行かない

16. 学校で何か先生とトラブルが発生した時に、どうしますか？

- ①何も言わず、従う
- ②怒りを感じるが、従うほうだ
- ③喧嘩（反抗）する
- ④親に訴える
- ⑤無視する
- ⑥何かの行動で解消する
- ⑦その他_____

Ⅲ 次は皆さんと周囲の関係についての質問です。よく読んで該当する項目に“✓”表示、又は“内容”を直接書いてください。

17. 皆さんにとってもっとも密接な関係を結んで皆さんを支援し、助けてくれる人は何人いますか？
一つだけ選んでください。

- ①一人もいない
- ②一人
- ③二人
- ④三人～四人
- ⑤五人以上
- ⑥該当なし

18. 困った時、助けをくれる人はどういう方ですか？（複数選んでもかまいません。）

- ①両親
- ②家族又は親戚
- ③先生
- ④友達
- ⑤青少年活動中心のような、行政が作った施設や機関
- ⑥少年先峰隊や团组织など学校の学生会など
- ⑦父母会など
- ⑧隣の人など知り合い
- ⑨いない
- ⑩その他_____

19. 主にどういう支援をもらっていますか？複数答えてもかまいません。

- ①経済的な支援
- ②悩み相談など精神的な面
- ③日常生活の面
- ④学校生活の面
- ⑤法律的なこと
- ⑥該当なし

20. 悩みなどについて助けを求める方法はなんですか？一つだけ選んでください。

- ①一人で悩む
- ②聞かれたら、話すほうだ
- ③積極的に周りに助けを求める
- ④たまたま周りに助けを求める
- ⑤その他_____

21. ストレス解消の方法は？複数答えてもかまいません。

- ①スポーツなど趣味に熱中する
- ②親や先生、周りの人に訴える
- ③友達とおしゃべりする
- ④一人で悶々する
- ⑤日記など文字で書く
- ⑥ゲーム、娯楽などで発散する
- ⑦買い物などお金をたくさん使って解消する
- ⑧おいしい物を食べて解消する
- ⑨たくさん泣いて解消する
- ⑩歌を歌ったり、音楽を聴いたり、映画を見たり、外に出かけて散歩したりして解消する
- ⑪周りの人に怒ったりして、解消する

22. 韓国についての全体的なイメージはどうですか？

- ①とても好き
- ②やや好き
- ③どちらかと言えば嫌い
- ④嫌い
- ⑤普通
- ⑥考えたことがない

⑦その他_____

└─ 22の質問で答えたそのイメージはどのようにして作られたと思いますか？

- ①歌手・芸能人などのテレビ番組を通じて ②大人や周りの人たちの話を通じて
③親の出稼ぎによって ④韓国の人を通じて
⑤中国に進出している韓国企業や商品を通じて ⑥その他_____

◆以下は自由記述です。何でもかまいませんので、思っていることを書いてください。

朝鮮族の人たちがたくさん韓国に出稼ぎに行っていることについて、どう考えますか？

本人が今一番困っていることや、悩み、不満などがあれば、何でもかまいませんので書いてください。
また周りからどういう支援があれば、助かると思いますか？

以上、ご回答ありがとうございます。お疲れ様でした。

중국 조선족 학생들의 생활과 학습, 그리고 주변사람들과의 관계에 관한 설문조사

여러분 안녕하십니까?

이 설문지는 최근 조선족사회에서 불고 있는 해외(외지)노무 등 사회적 분위기 속에서 학생 여러분들이 일상생활과 학교생활을 어떻게 보내고 있는지? 그리고 주변사람들과 어떤 관계를 유지하면서 생활하는 지를 파악하기 위하여 하는 조사입니다.

따라서 여러분이 생각하고 느끼는 그대로 솔직하게 답해주시면 됩니다. 여러분들로부터 받은 의견은 익명으로(비밀) 처리되며, 연구자료로만 쓰이기 때문에, 여러분께 피해를 입히는 일은 절대 없을 것입니다.

만약 잘 이해가 안 되는 부분이 있으면 선생님에게 물어보아도 괜찮습니다.

조금 시간이 걸리더라도 **빠지는 부분이 없이** 본인 생각 그대로 성실하게 대답해주시면 감사하겠습니다.

혹시 기타 궁금한 점이나 의문점이 있으면 아래로 직접 문의해주시기 바랍니다.

일본 우즈노미야대학원 국제학연구과

김영화

연락처 : 133*****(10.27~11.3까지 사용가능)

메일주소:kj27971@yahoo.co.jp



I 우선 여러분의 일반적인 사항에 대한 질문입니다. 해당란에 “✓” 표시 혹은 “관련내용”을 직접 답해주시기 바랍니다.

1. 성별은?

①남자 ②여자

2. 나이는? 만 세

3. 지금 몇학년입니까?

①중학1년 ②중학2년 ③중학3년 ④고등1년 ⑤고등2년 ⑥고등3년

4. 식솔은 어떻게 됩니까?

①한명 ②두명 ③세명 ④네명 ⑤다섯명 ⑥여섯명이상

5. 지금 누구와 같이 살고 있습니까?

①아버지와 어머니 ②아버지 ③어머니 ④친(외)할아버지,할머니 ⑤친척

⑥형제 혹은 혼자 ⑦기타_____

6. 현재 어디에 살고 있습니까?

①우리집 ②친(외)가집 ③친척집 ④아는 사람 집 ⑤기숙사 ⑥전락하는 집

⑦기타_____

7. 부모중에 해외노무를 간 경험이 있습니까?

①있음 ☞

【질문7-1】 부터 【질문7-12】 까지 대답해 주세요.

②없음 ☞

【질문7-13】 부터 【질문7-14】 까지 대답해 주세요.

질문 7에서 ①있음이라고 선택한 사람만 대답해 주세요.

【질문7-1】. 부,모가 해외노무를 나간 곳은 어디입니까?

①한국 ②일본 ③미국 ④유럽 ⑤기타_____

【질문7-2】. 부모 혹은 한쪽부모와 몇 년 떨어져 지냈습니까?

①1년이하 ②1년 ③2년 ④3년 ⑤4년 ⑥5년이상 ⑦10년이상

【질문7-3】. 해외에 나가있는 부, 모와는 어떻게 연락을 하고 있습니까?

- ①휴대폰 (전화통화) ②휴대폰 (메일, 카톡 등 메신저) ③일반전화
④컴퓨터 (메일 혹은 QQ등 메신저) ⑤사람을 통해서 ⑥만나다 ⑦연락하지 않는다

【질문7-4】. 해외에 나가있는 부, 혹은 모와의 연락횟수는?

- ①매일 ②주 몇 번 ③월 몇 번 ④반년에 몇 번 ⑤년 몇 번
⑥연락하지 않는다

【질문7-5】. 해외에 나가있는 부, 모와 연락할 때 주요 화제는?

- ①공부 ②건강 ③용돈 등 생활적인 면 ④기타_____ ⑤연락하지 않는다

【질문7-6】. 해외에 나가있는 부, 모와의 만남주기는 어떻게 됩니까?

- ①1년에 한번 ②1년에 두번 ③1년에 세번이상 ④기타:_____년에_____번 ⑤만나지 못했다

【질문7-7】. 부, 모와는 어떻게 만납니까?

- ①부,모와가 귀국해서 ②내가 부, 모가 있는 곳으로 간다
③내가 가든지, 부,모가 귀국하든지 한다. ④만나지 못했다

【질문7-8】. 만약 부, 모를 따라갈 수 있다면, 부, 모가 일하는 곳에서 함께 생활하며 학교를 다니고 싶습니까?

- ①매우 가고 싶다 ②가고 싶은 편이다 ③그다지 가고 싶지 않다 ④매우 가고 싶지 않다
⑤잘 모르겠다

【질문7-9】. 현재 함께 살고 있는 사람과의 관계는 어떻습니까?

- ①매우 사이가 좋다 ②그럭저럭 사이가 좋은 편이다 ③보통이다 ④그다지 사이가 좋지 않
⑤매우 사이가 좋지 않다 ⑥어느 쪽도 아니다

【질문7-10】. 현재 함께 살고 있는 사람은 학생을 잘 이해해줍니까?

- ①충분히 이해 해준다 ②그럭저럭 이해해 주는 편이다 ③보통이다 ④그다지 이해 못해준다
⑤전혀 이해 못해준다 ⑥어느 쪽도 아니다

【질문7-11】. 현재 함께 살고 있는 사람과는 트러블(마찰)이 발생합니까?

- ①자주 있다 ②가끔 있다 ③거의 없다 ④없다 ⑤뭐라고 말하기 어렵다

【질문7-12】. 현재 살고 있는 사람과 트러블(마찰)이 발생할 때 어떻게 합니까?

- ①아무것도 말하지 않고 따르는 편이다 ②화가 나지만 따르는 편이다 ③싸운다 ④부모한테 호소한다 ⑤무시한다 ⑥어떠한 행동으로써 해소한다 ⑦기타_____

질문 7에서 ② 없다고 대답한 사람만 대답해 주세요

【질문7-13】. 부,모가 지금까지 해외(외지)로무를 나가지 않은 이유는 뭐라고 생각합니까?

- ①가는 방법을 몰라서 ②가족을 위하여, 나의 교육을 위하여 ③가족과 주변의 반대로
- ④생활이 풍족하여 갈 필요가 없다 ⑤건강상의 이유로 갈 수 없었다
- ⑥해외 로무를 나가는 경비를 마련못해서 ⑦그 외_____

【질문7-14】. 부,모가 지금까지 해외(외지)로무를 나가지 않은 것에 대하여 어떻게 생각합니까?

- ①매우 좋았다고 생각한다 ②어찌 보면 좋았다고 생각한다 ③좋지 않다고 생각한다
- ④어찌 보면 좋지 않은 편이다 ⑤뭐라고 말하기 힘들다

II 다음은 여러분의 일상생활과 학교생활에 관한 질문입니다. 잘 읽고 해당하는 항목에 “✓” 표시 혹은 “관련내용”을 직접 써 넣어 주세요.

8. 가정형편은 어떻습니까?

- ①가난하다 ②비교적 가난하다 ③보통이다 ④비교적 풍족하다 ⑤풍족하다

9. 1개월의 용돈은 얼마입니까?

- ①100元이하 ②100元~500元 ③500元~1000元 ④1000元以上 ⑤없음 ⑥그 외_____

10. 용돈은 주로 어디에 씁니까?

- ①의복 ②식료품 ③게임 등 오락 ④공부 ⑤친구와의 교제 ⑥그 외_____

11. 지금 가장 빠져있는(심취해 있는) 일은 됩니까? 뭐든지 상관없으니 자유로 기술해 주세요.

12. 성적은 어떻습니까?

- ①상 ②중보다 상 ③중 ④중보다 하 ⑤좋지 않다 ⑥그 외_____

13. 학교에서의 공부는 즐겁습니까?

- ①매우 즐겁다 ②즐겁다 ③보통이다 ④그다지 즐겁지 않다 ⑤전혀 즐겁지 않다
- ⑥어느쪽도 아니다

14. 학생의 공부에 대한 부, 모의 기대는?

- ①중학교 의무교육졸업 수준까지 기대하고 있다
- ②고등학교 졸업수준까지 기대하고 있다
- ③中專 졸업수준까지 기대하고 있다
- ③대학 졸업수준까지 기대하고 있다
- ⑤대학이상의 학력까지 기대하고 있다 ⑤그 외_____

15. 통학태도는 어떻습니까?

- ①매일 제대로 다니고 있다
- ②성실히 다니는 편이다
- ③가끔 수업을 빼먹는다
- ④자주 수업을 빼먹는다
- ⑤거의 절반 이상 학교에 안 간다

16. 학교에서 선생님과 뭔가 마찰이 발생했을 때 어떻게 합니까?

- ①아무것도 얘기 안하고 따르는 편이다
- ②화나지만 따르는 편이다
- ③싸운다(반항한다)
- ④부, 모한테 호소한다
- ⑤무시한다
- ⑥어떤 행동으로 해소한다
- ⑦그 외_____

Ⅲ 다음은 여러분과 주변사람들과의 관계에 대한 질문입니다. 잘 읽고 해당하는 곳에 “✓” 표시 혹은 “관련내용”을 직접 써 넣어 주십시오.

17. 여러분들과 보다 밀접한 관계를 가지고 여러분들을 지원해주고, 도움을 주는 사람은 몇 명입니까? 답안은 한 개만 선택해 주십시오.

- ①1명도 없음
- ②1명
- ③2명
- ④3명~4명
- ⑤5명이상
- ⑥해당 없음

18. 곤란에 처했을 때, 도움을 주는 사람은 어떤 사람입니까?(여러 개 선택해도 괜찮습니다.)

- ①부모
- ②가족 혹은 친척
- ③선생님
- ④친구
- ⑤청소년을 위한 시설이나 기관, 시 정부 등
- ⑥소년선봉대와 단조직 등 학교 학생회 등
- ⑦가장모임 등
- ⑧이웃 등 아는 사람
- ⑨없음
- ⑩기타_____

19. 주로 어떤 지원을 받고 있습니까? 여러 개 선택해도 괜찮습니다.

- ①경제적인 지원
- ②고민상담 등 정신적인 면
- ③일상생활적인 면
- ④학교생활적인 면
- ⑤법률적인 것
- ⑥해당 없음

20.고민 등이 있을 때 도움을 청하는 방법은? 한개만 선택하세요

- ①혼자서 고민한다
- ②물어보면 말하는 편이다
- ③적극적으로 주변에 도움을 청한다
- ④가끔 주변에 도움을 청한다
- ⑤기타_____

21. 스트레스 해소방법은? 여러개 선택해도 괜찮습니다.

- ①스포츠 등 취미에 열중한다
- ②부모, 선생님 등 주변사람들께 토로한다
- ③친구들과 수다를 떠다
- ④혼자 끄끙 앓는다
- ⑤일기 등 글로 쓴다
- ⑥게임, 오락등을 통해서 발산한다
- ⑦쇼핑 등 돈을 많이 쓰는것으로써 해소한다
- ⑧맛있는 음식을 먹으면서 해소한다
- ⑨실컷 울어서 해소한다
- ⑩노래하거나, 음악 듣거나, 영화 보거나 산책하거나 하면서 해소한다
- ⑪주변 사람한테 화내거나 하면서 해소한다

22. 한국에 대한 전체적인 이미지는 어떻습니까?

①매우 좋음 ②조금 좋음 ③싫은 편이다 ④매우 싫음 ⑤보통 ⑥생각한적 없음

⑦기타 _____

→ 22.의 질문에 그 답안을 선택한 이유를 아래의 내용중에서 다시 한번 선택해주시시오.

- ①가수·예능인 등 텔레비 프로를 통해서 ②어른 등 주변사람들의 말을 통해서
③부모의 해외노무로 인해서 ④한국사람들을 접하거나 통해서
⑤중국에 진출해있는 한국기업이나 상품을 통해서 ⑥기타 _____

◆다음은 개인의 생각을 자유롭게 써주시면 됩니다. 뭐든지 괜찮으니 생각을 그대로 적어주시면 됩니다.

↓최근 많은 조선족들이 한국으로 일하러 가는 것에 대하여 어떻게 생각합니까?

↓요즘 본인이 처해있는 곤란한 일, 혹은 고민, 불만, 걱정 등이 있으면 써 주세요.

또한 주변에서 어떤 지원이라든지 도움을 주면 좋겠다고 생각합니까?

이상 조사에 협력해주셔서 감사합니다.